

# 博多 17

— 博多遺跡群第42次発掘調査概報 —  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第245集



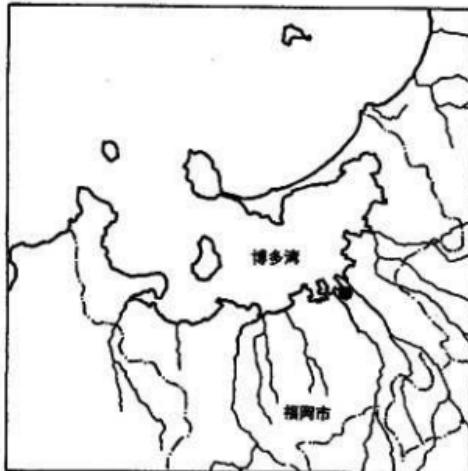
1991

福岡市教育委員会

# 博 多 17

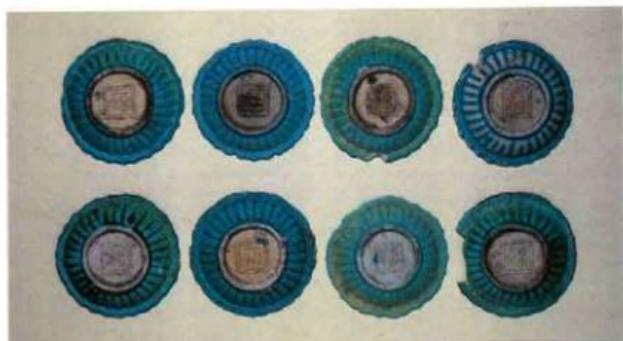
— 博多遺跡群第42次発掘調査概報 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第245集



1991

福岡市教育委員会



トレンチ出土青釉陶器皿



318号遺構出土瓦経

## 序

玄海灘を介して中国大陆と向かい合う福岡市は、古くから大陸の文化を受け容れる窓口の役割を果たしてきました。市内には、大陸との交渉を物語る数々の遺跡・遺物が残されています。とりわけ、都心部にある博多遺跡群は、中国・朝鮮との貿易で栄えた国際都市の遺跡です。

ここでは、近年、都心部の再開発が急速に進み、民間の開発関係だけでも70次にもおよぶ発掘調査がなされています。本書は、その第42次調査の概要を報告するものです。第42次調査地点は、蒙古襲来絵詞にその名の見える「息の濱」に位置しています。「息の濱」では、これまで、第2次大戦後の復興の際に遺跡が削られて、残っていないと考えられてきました。ところが、第42次調査の結果、11世紀以後の多くの遺構・遺物が検出され、「息の濱」にも遺跡が残っていることが確認されました。

本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で広く活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理までの費用負担・便宜にご協力をいただいた、大石ゴム株式会社・株式会社辻組を始めとする多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表します。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

## 例 言・凡 例

1. 本書は、駐車場ビル建設に先立ち福岡市教育委員会が調査を実施した、博多遺跡群第42次調査（博多区網場町8-25）の概要報告書である。
2. 本書の纏集・執筆は、大庭康時が行なった。
3. 本書に使用した遺構実測図は、大庭・山口満・梶村嘉長・馬瀬直子が、遺物実測図は、大庭・森本朝子・田川明美が作成した。また、製図には、大庭・森本・小金丸昌世・井上涼子・矢野朋子・上村智美・江頭公子が分担してあたった。
4. 本書に使用した遺構写真は、大庭が撮影した。また、遺物の写真は、大庭が撮影し、荻尾朱美が焼付した。
5. 遺物の整理には、生垣綾子・保利みや子・古谷宏子・村田喜代美・瀬戸満寿江・楠葉恭子・佐田恵理子・渡辺美和・井上涼子・小金丸昌世・矢野桂子・川辺紀子・古谷祥子・佐藤恵美子・田中真樹・占部千鶴・中村るい子・有村奈保子・越後幸子・平井京子・木龍まゆみがあたった。また、銅鏡の鋳落し、集計、拓本には、馬瀬直子があたった。
6. 本書で用いた遺構番号は、発掘調査時につけた通し番号を、そのまま用いている。出土遺物の注記、発掘調査の記録類は、すべてこの通し番号によっている。
7. 本書に示した遺物は、遺構ごとに通し番号とした。
8. 本書に使用した方位は、実測図・本文ともに磁北を用いている。
9. 本書の本文中においては、時間的制約などから、遺構実測図・写真等を示しえなかつた遺構が少なからずある。これについては、本文中に検出したグリットを記しているので、Fig. 6・9・13および付図から検索していただきたい。
10. 本調査に関するすべての記録類、出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵管理される予定である。

遺跡調査番号	8843	遺跡略号	HKT42
調査地地番	博多区網場町8-25	分布地図番号	天神49
開発面積	1,196.33m <sup>2</sup>	調査対象面積	975m <sup>2</sup>
調査期間	1988年12月16日～1989年6月1日		

# 本文目次

第一章 はじめに.....	1
1. 発掘調査にいたるまで.....	1
2. 発掘調査の組織と構成.....	2
3. 遺跡の立地と歴史的環境.....	2
第二章 調査の記録.....	5
1. 発掘調査の経過と概要.....	5
2. 調査地点の基本層序.....	6
3. 各構造物の概要.....	9
第1面.....	9
第2面.....	11
第3面.....	12
第4面.....	14
第5面.....	15
第6面.....	17
4. 近世の遺構・遺物.....	18
118号遺構.....	18
136号遺構.....	20
137号遺構.....	27
139号遺構.....	29
140号遺構.....	32
141号遺構.....	33
150号遺構.....	34
155号遺構.....	39
156号遺構.....	41
157号遺構.....	42
222号遺構.....	49
447号遺構.....	51
5. 中世の遺構・遺物.....	54
128号遺構.....	54

253・255号遺構	57
275号遺構	57
311・312号遺構	58
314号遺構	61
315号遺構	64
318号遺構	65
422号遺構	68
423号遺構	68
424号遺構	70
511号遺構	74
517号遺構	77
534号遺構	79
573・575・596・680号遺構	80
633号遺構	80
701号遺構	83
709号遺構	84
735号遺構	86
751号遺構	96
852号遺構	96
906号遺構	97
907号遺構	99
965号遺構	103
1094号遺構	106
1117号遺構	107
1139号遺構	107
1141号遺構	112
1157号遺構	114
1343号遺構	115
1437号遺構	115
1453号遺構	117
1465号遺構	117
1468号遺構	118

1500号遺構	121
1566号遺構	123
1567号遺構	126
1606号遺構	127
1611号遺構	129
1760号遺構	130
1832号遺構	130
1834号遺構	130
6. 古代の遺構・遺物	133
1135号遺構	133
1688号遺構	133
1700号遺構	133
1740号遺構	134
1758号遺構	134
7. その他の遺物	136
第三章　まとめ	146
 付篇　博多遺跡群第42次調査出土中世人骨 九州大学医学部解剖学第2講座 中 橋 孝 博	149

# 第一章　はじめに

## 1. 発掘調査にいたるまで

1988年5月23日、大石ゴム株式会社より福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課に対し、福岡市博多区綱場町8-25について、埋蔵文化財開発事前調査願が提出された。同地は、博多遺跡群でも、これまで発掘調査例のない、いわゆる「息ノ浜」に含まれ、遺構の有無が注目された。埋蔵文化財課では、1988年6月15日、試掘調査を実施した。その結果、現地表下1mから下に、良好な遺物包含層の存在が確認され、この内に数枚の遺構面を想定することができた。これを受けて、埋蔵文化財課では発掘調査が必要であると判断し、大石ゴム株式会社及び施工業者である株式会社辻組と協議を重ねた。協議の結果、申請地内の建物建設予定部分975m<sup>2</sup>について、5ヶ月の調査期間で受託契約を結んだ。

発掘調査は、辻組による調査地の整備・現地表下約1mまでの擾乱層を含む表土層の除去の後、1988年12月16日より着手した。なお、隣地からの引きをとるなどの関係で、実際に調査した面積は、710m<sup>2</sup>におちている。

## 2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	大石ゴム株式会社
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎
調査総括	埋蔵文化財課 課長 柳山純孝
	埋蔵文化財第2係長 柳沢一男
調査庶務	埋蔵文化財第1係 松延好文
調査担当	埋蔵文化財第2係 大庭康時
調査作業	(調査補助) 山口満 梶村嘉長、 岩隈史郎、熊本義徳、椎藤利雄、小西哲夫、白土廣信、閑義種、高 浪信夫、田中太、三宅淳治、森山恭助、山崎光一、岩本朝子、江越 初代、近藤澄江、閑加代子、曾根崎昭子、濱地フサエ、前田直子、 村崎祐子、村田敬子、森山タツエ、猪瀬伸
調査指導	中橋孝博、下山正一(九州大学) 磐望(西南大学) 佐伯弘次(福岡大学)
その他	発掘調査に用いる種々の条件整備、調査中の便宜については、大石ゴム株式会社、 株式会社辻組の御協力をいただいた。

### 3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群とは、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらには現代へとつながる複合遺跡の総称である。地理的には、福岡平野の博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東は江戸時代に開墾された石堂川、南は石堂川開墾以前に那珂川に向って西流していた旧比恵川によって画される。この地域に形成された砂丘は、博多湾に平行して、大きく3列にわかれる。内陸側から砂丘Ⅰ・砂丘Ⅱ・砂丘Ⅲと仮称すると、砂丘ⅠはFig. 1に示した町名では、祇園町からその北東にかけて、砂丘Ⅱは上呉服町・店屋町・冷泉町、砂丘Ⅲは下呉服町・奈良屋町・網場町にあたる。砂丘Ⅲは、中世以来「息の浜」「沖の浜」と呼ばれてきたものにあたる。これらの砂丘は、縄文海進以後に形成されたものである。博多遺跡群の発展は、巨視的には、砂丘Ⅰから砂丘Ⅱ・砂丘Ⅲへの拡大過程と言える。

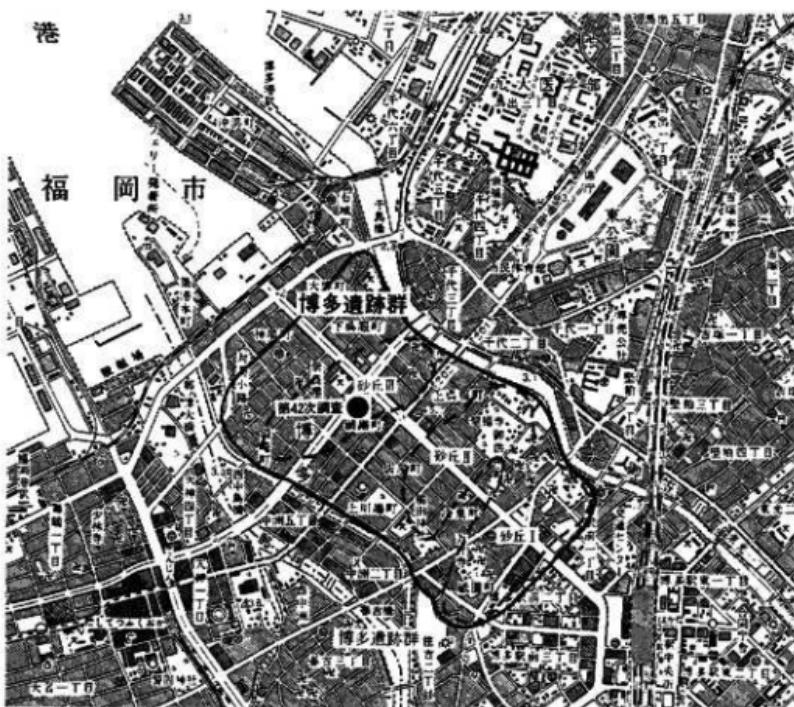


Fig. 1 博多遺跡群位置図 (1/25,000)

博多遺跡群においては、1977年の高速鉄道（地下鉄）祇園町工区の調査を嚆矢とし、一連の地下鉄関係調査、都市計画道路博多駅築港線拡幅関係調査および、60次をこえる民間開発関係調査が行なわれている。その結果、弥生時代中期前半には、砂丘Ⅰに堅穴住居址、甕棺墓などを営んでいたことが明らかとなった。ただし、土器片としては、板付Ⅱ式土器、金海式甕棺片等が採集されており、遺跡の初源が弥生時代前期にまで遡る可能性もある。古墳時代では、堅穴住居址・方形周溝墓などが調査されている。古墳時代前期には、遺跡は砂丘Ⅰのほぼ全面にひろがり、一部は砂丘Ⅱにも進出している。

歴史時代にはいると、博多は対外貿易の拠点として、独自の発展をとげることになる。遠唐使の発着地であり、外國使節・商客の迎賓館であった大宰府鴻臚館は、博多遺跡群から人海ひとつを隔てた西の丘陵に設けられたものであった。博多遺跡群においても、銅鏡帶、石帶、須恵器鏡、皇朝鏡、鴻臚館式瓦、若河式瓦、墨書須恵器など律令官人の存在を示す遺物が出土するとともに、少なからざる量の越州窯系青磁・長沙窯系青磁・邢窯系白磁も出土しており、博多もまた鴻臚館とならんで交易の場となっていたことを思わせる。奈良時代の遺構は、砂丘Ⅰ・砂丘Ⅱのほぼ全面で検出されている。平安時代後半には、博多には宋商人の居留がみられるようになり、これら在博多宋商人のもとで、中世都市「博多」が誕生することになる。こうして、最大の繁栄を迎えた中で、12世紀後半には、博多の街はついに砂丘Ⅲ「息の濱」まで拡大するにいたる。

鎌倉時代の13世紀後半、2度にわたる元寇で、博多の街は焼かれ、また「息の濱」には防壁が築かれるが、室町時代には、むしろ「息の濱」が博多の街の中心となってくる。1333年、「息の濱」は、論功行賞として、建武政権から大友貞宗に与えられた。その後、1348年には、室町幕府は博多を官領在所として指定する。九州の在地勢力を抑え、南朝勢力を圧倒したのは、1371年に九州探題として赴任した今川了俊であった。了俊が1395年に解任された後、探題となつた渋川満輔とその跡を襲つた義継父子は、1420年朝鮮使節を迎えるに当って、博多の道路を整備し門を作らせるなど市街整備を行なっている。ところが、九州探題による博多支配は長続きせず、1429年までに、「息の濱」は再び大友氏の領するところとなるのである。室町時代の「息の濱」は、勸合貿易で栄えた商人が屋敷を構え、繁榮した。しかし、戦禍をうけることも多く、戦国時代には、度々兵火にかかる。1587年には、豊臣秀吉によって戦災からの復興がなされ、17世紀初めには、博多の内陸側の砂丘と「息の濱」とを隔てていた湿地が埋め立てられ、博多は近世都市として生まれかわるのである。

「息の濱」における発掘調査は、これまで2回なされている。しかし、いずれも遺構が検出されず、「息の濱」では、第2次大戦からの復興時に大きく削平されたものと考えられてきた。今回の第42次調査は、「息の濱」でなされた、最初の本格的な発掘調査である。

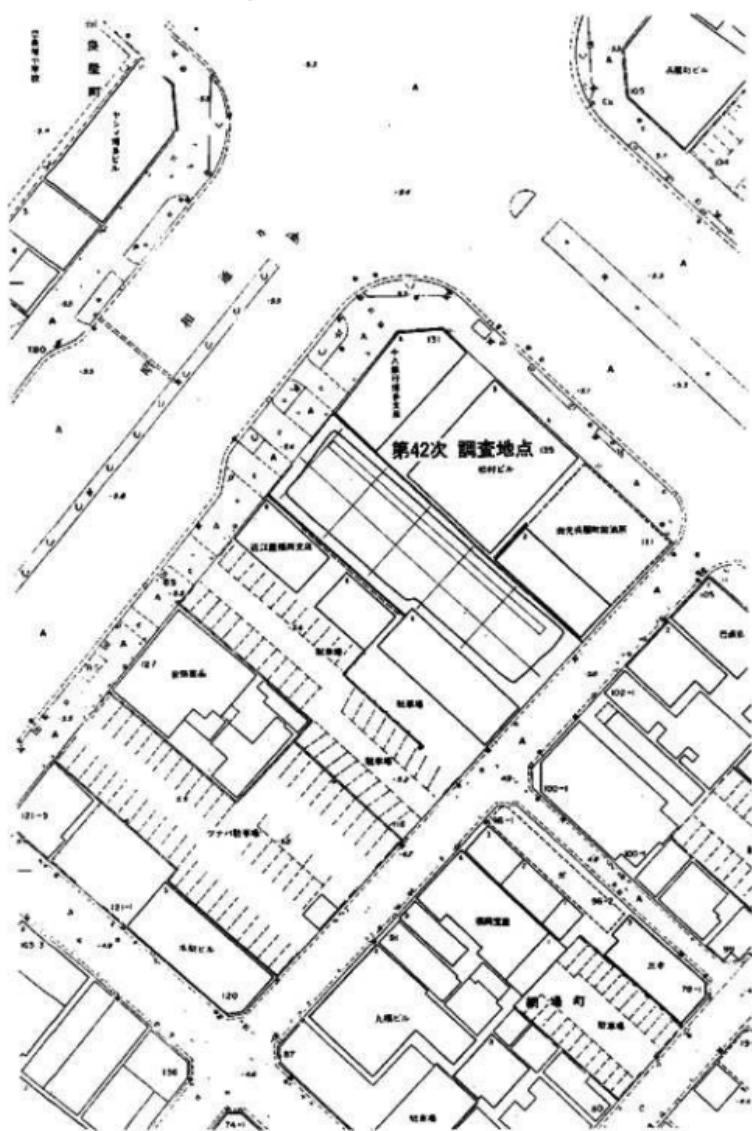


Fig. 2 第42次調査地点周辺測量図 (1/1,000)

## 第二章 発掘調査の記録

### 1. 発掘調査の経過と概要

発掘調査は、株式会社辻組による表土すき取りの後を受けて、1988年12月16日より開始された。試掘調査の所見では、数枚の遺構検出面が存在すると考えられたので、第1面の調査に先立ってトレーナーを入れ、土層の確認を行なうこととした。トレーナーは、調査区の東辺に沿って幅1mで設定した。このトレーナーの観察所見によれば、遺構・包含層の遺存状態は予想された以上に良好であること、数枚の焼土層がみられ、鍵層として用いることが可能であること、土層は全体的に北から南へ下って傾斜していることなどが知られた。そこで、表土すき取り後の面を第1面、以下焼土層の下面をそれぞれ第2面・第3面とし、淡黄色砂層上面を第4面・第5面として、それぞれ調査を行なうこととした。また、第4面調査段階で、基盤と考えていた灰黄褐色砂層の下に、炭や灰を含む黒色砂層があり、さらにその下に砂丘上面にあたる淡黄色砂層が存在することが判明した。そこで、さらにトレーナーを掘り下げ、第6面を新たに設定した。

調査は、遺構検出・遺構調査・掘り下げをくり返して実施した。その大まかな経過は、以下の通りである。

1988年12月16日	調査開始 トレーナー設定
12月19日～1月30日	第1面調査
1989年2月2日～2月13日	掘り下げ
2月10日～3月9日	第2面調査
3月10日～3月14日	掘り下げ
3月11日～4月6日	第3面調査
4月10日～4月14日	掘り下げ
4月13日～5月10日	第4面調査
4月25日	1号人骨検出（第4面1468号遺構、木棺墓）
5月12日～5月29日	掘り下げ、第5面調査
5月20日	2号人骨検出（第5面1834号遺構、木棺墓）
5月20日～5月24日	掘り下げ、第6面調査
5月23日	3号人骨検出（第6面1758号遺構、上塙？）
5月23・24日	1号人骨とりあげ
5月30日	3号人骨とりあげ
5月31日、6月1日	2号人骨・4号人骨・5号人骨とりあげ、調査終了

## 2. 調査地点の基本層序

博多遺跡群は、一般的には砂丘上に営まれた生活跡である。中世以降は間断なく続いている。したがって、最下層は砂丘上面、最上層は現在の地表となる。

ところで、前節で述べた様に、第42次調査地点は、博多遺跡群を構成する3列の砂丘の内、最も海側にある「息の浜」上に位置する。さらに、現地形に基いてみると、本調査地点が、「息の浜」が内陸側におちこむ、傾斜面の肩部分にあたることが知られる。

第42次調査においては、地形の傾斜方向である調査区の長辺方向（北西—南東）に、トレンドを設定し、土層観察と遺構検出面の設定を行なった。さらに、旧地形の傾斜方向については、トレンドと直交する調査区短辺（調査区北壁・南壁）において、確認した。

まず、旧地形の傾斜についてみると、短辺方向では、砂丘面から現地表にいたるまで、ほぼ水平に堆積し、傾斜はみられなかった。長辺方向については、現地表面においては、ほとんど傾斜はみられないが、下層に行き次第、傾斜を強める。そして、最下層では、北西方向から続く砂丘面は、長辺方向の中程から急激におちこみ、南東部分においては、湧水のため検出不可能なほどに低下する。

次に、砂丘面から、中世の包含層である、褐色～暗褐色土層までの間の堆積について、検討する。調査区北半では、砂丘砂（淡黄色砂）上に、灰色を帯びた砂層が堆積し、その上に中世の包含層が乗る。南半部では、淡黄色砂は検出できず、灰色を基調とした砂層が厚く堆積している（E層）。E層の直上には、黒褐色土・泥土まじりの暗灰色砂層が乗る。この上には、さらに、灰色砂・黒灰色砂が互層をなして堆積している。この堆積によって、地形の傾斜は、かなり緩くなる。その上には、灰黄褐色砂が20-80cmの幅で堆積する（C層）。C層中には、まじりものがなく均質で、試掘調査および第4面調査時には、地山である砂丘上面と誤認した程である。C層上には、中世の包含層が乗る。

E層は、九州大学下山正一氏の御指摘によれば、砂丘背面の砂層で、高潮時には海水をかぶる様な、湿地性の水つきの砂層で、生痕がみられるとのことであった。すなわち、E層以下は自然堆積層である。これに対し、下山氏はD層については、人為的な層（埋め立て）の可能性があるとしている、D層は、調査区中程まで上ると、第6面につながる。C層は、風成砂層であり、C層の堆積段階には、全く土地利用がなされていなかったことを示している。

ちなみに、第4面は、調査区北半部では地山砂丘上にうすく堆積した灰色砂層上、南半部ではC層の上層にあたる。第5面は、北半部では地山砂丘上面、南半部ではC層上面で検出した。第6面は、調査区中程で、暗灰色砂質土層上面で検出している。

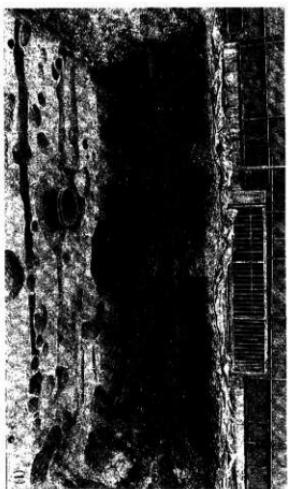


FIG. 4 土壌地図状況 (1) 北壁全景 (2) 東壁砂層 (3) 東壁、地形の傾斜

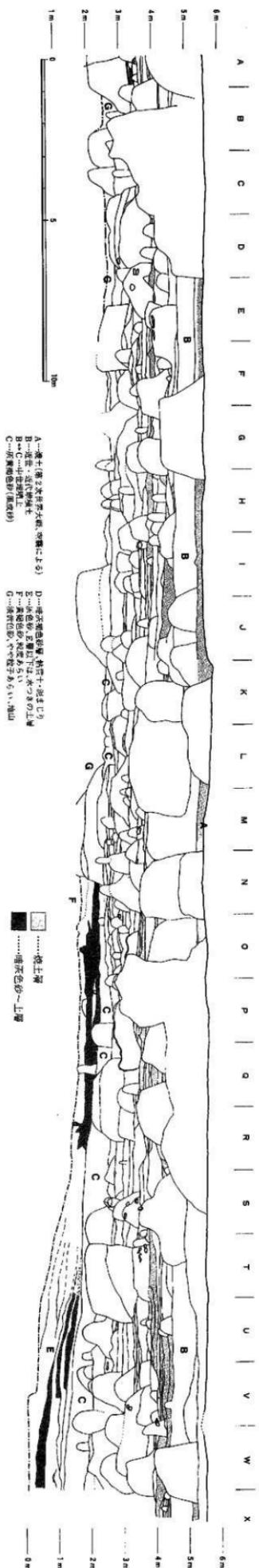


FIG. 3 諸木区東壁土壤実測図 (×100)

### 3. 各遺構検出面の概要

#### 第1面

標高4.3~4.7mで調査した遺構検出面である。第1面より上は、表土除去時に擾乱層としてすき取ってしまった。しかし、Fig. 3に示した土層実測図にみる様に、土層の堆積状況には比較的乱れが少なく、第1面以上にも包含層は比較的良好に残っていたものと考えられる。ただし、第2次世界大戦中、および戦後の大規模な擾乱層（防空壕や地下室を含む）もみられ、重機による一率のすき取りは、やむをえない所であろう。

第1面では、柱穴・土壙・石室状土壙・集石列・井戸・溝等が検出された。土壙は、ほとんどがゴミ穴で、墓壙と考えうるものは、発見されていない。集石列は、建物の基礎固めにかかるものと考えられている。井戸には、近世末以降のものとされる、井側に井戸瓦を用いたものが目立った。なお、145号遺構（井戸）は、福岡市西区愛宕山付近に産するいわゆる「愛宕石」を用いた井戸である。溝は、雨落ち溝程度のもので、土地を区画するものではない。

第1面で検出された遺構のほとんどは、江戸時代以後の遺構である。まれに室町時代後半にさかのぼる遺構もあるが、全体的にみて、第1面は江戸時代の生活面であると考えて大過ないであろう。



Fig. 5 第1面全景（南より）

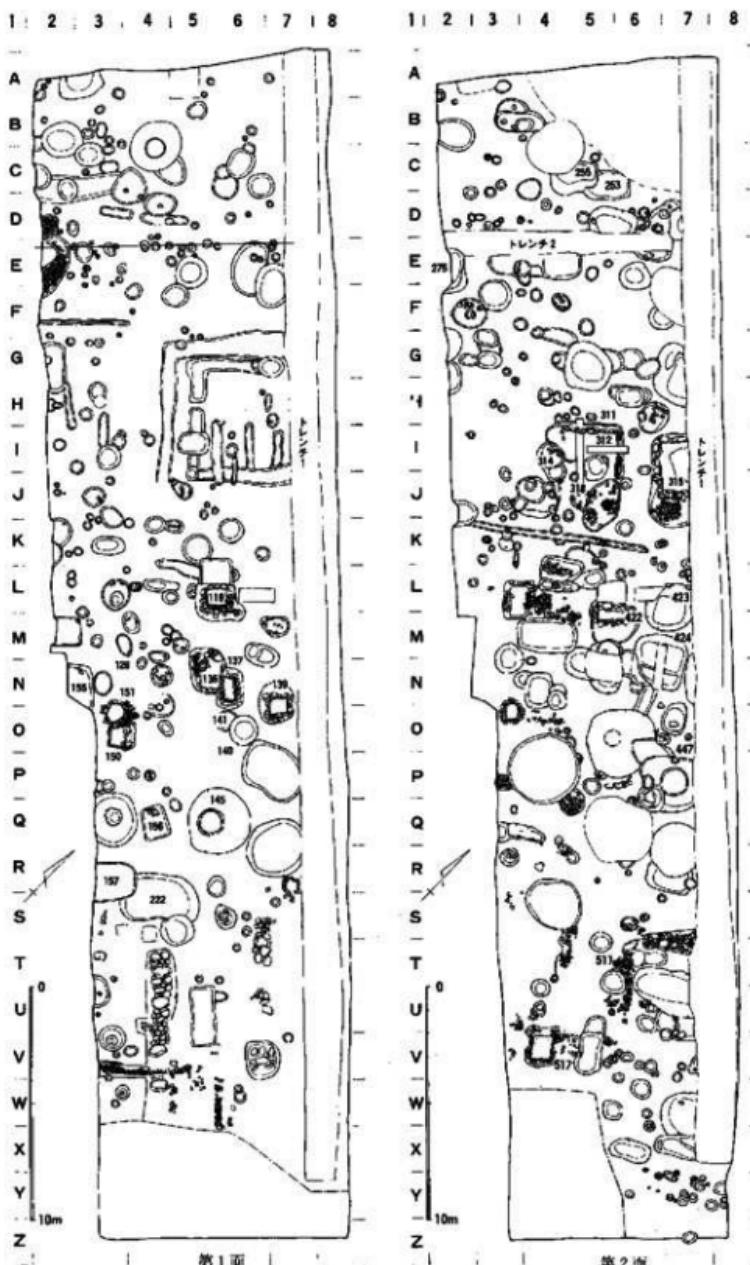


Fig. 6 第1面・第2面造構平面図 (1/250)

## 第2面

標高3.6~4.5mで調査した遺構検出面である。前述した様に、第2面以下はトレンチの観察から設定した面である。したがって、北から南に傾斜しており、現地表から一率にすき取った第1面とは、その設定の方法が異なる。このため、調査区の北東隅において、第1面のままで全く掘り下げていない部分ができる。第1面からの掘り下げ深さは、0~70cmである。

第2面で検出した遺構は、柱穴・土壤・石室状土壤・集石列・井戸・溝・基壇状遺構などである。基壇状遺構（2面311号遺構・312号遺構）は、1辺約2.5m、高さ0.25mの方形台状に黄灰色の粘土を盛り上げ、その四辺に扁平な板石を貼ったものである。柱穴等をともなわず、上部構造が不明であるが、その形状から何らかの建物（堂舎の可能性を考えたい）の基壇になるものと考えられる（P. 58~60）。511号遺構は、楕円形の土壤であるが、青磁の香炉11点が、重ね連ねた状態で出土した。すべて完形品であり、整然と出土している点からみても、埋納されたものと考えられよう（P. 73~76）。

第2面の遺構には、一部江戸時代に属するものがあるが、大半は16世紀代におくことができる。

なお、第1面から第2面に掘り下げる際に設定した東西トレンチ（トレンチ3）より、青釉陶器小皿が重なって出土した（P. 139）。博多遺跡群第42次調査22号土壤出土の一括資料から、16世紀末を前後する時代に位置付けられるものである。



Fig. 7 第2面全景（南より）

### 第3面

標高3.3~3.9mで調査した遺構検出面である。第2面からは、30~60cm掘り下げている。

第3面で検出された遺構は、柱穴・土壤・集石列・溝などである。柱穴には、扁平な板石を礎石とするものが、比較的多くみられた。礎石は、大きなものでは、さわわらし60~65cmをはかり、30cm程のもののが多かった。博多遺跡群におけるこれまでの調査で検出された礎石と比べて、かなり大振りな石が用いられていると言えよう。集石列は、L字形を呈するものとコ字形を呈するものとが近接して検出されている(P. 80~81)。両者の時間的な関係は、明らかではない。溝は、L字形に屈折するものが、調査区南東隅で、検出された。東西方向をとる部分は、幅1.2m、深さ1.2~1.4mをはかり、逆台形の断面形を示す。これから、やや鋭角に折れて南へのびる部分では、幅0.95~1.3m、深さ0.4~0.9mと浅くなって行く。この溝に区画されたであろう土地の大部分は調査区外に出ているため、溝の性格を明らかにしがたいが、おそらくは、屋敷地を区画する溝であろう

(P. 86~95)。

第3面で調査された遺構の時期は、おおむね15世紀代にあると考えられる。



Fig. 8 第3面全景(南より)

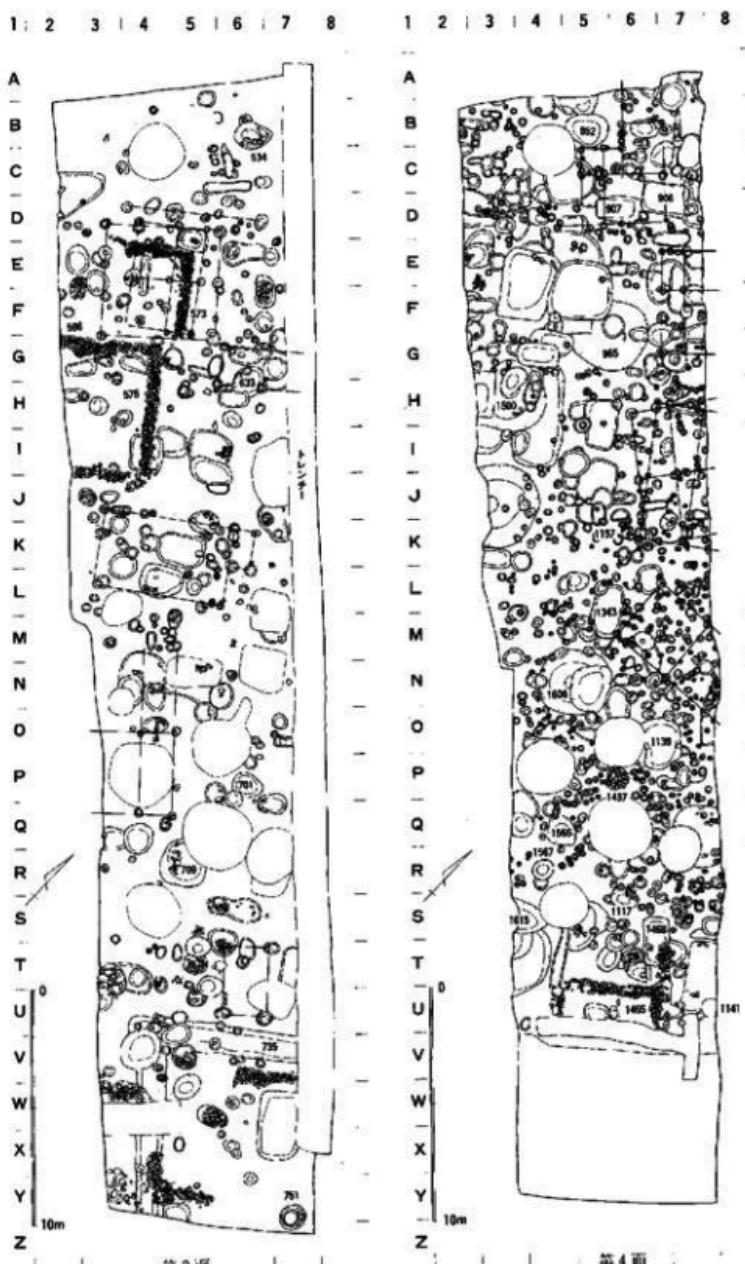


Fig. 9 第3圖：第1面連續平面圖 (1/250)

#### 第4面

標高2.5~3.1mで調査した遺構検出面である。第3面からは、80cm前後掘り下げている。遺構の基盤としては、砂の面となるが、博多遺跡群で通有にみられる砂丘砂層の上面ではない。淡黄色を呈する砂丘砂層の上面は、第5面北半・第6面においてみとめられるものである。

第4面では、柱穴・土壙・集石列・井戸等である。柱穴は、第3面とは異なって、礎石を持つものは少なく、全体的に規模の小さいものが多い。また、密度が濃いのは、それだけ時期的な重複が大きいためであろう。数棟の掘立柱建物址が推定されるが、遺構の切り合いや稠密な分布のため、断定しがたい。ただし、この推定される建物の柱筋をみると、若干のバラつきがある様で、各面を通じて集石列や溝によって示される方位N-37°45'-Wに規制されていないことをうかがわせる。土壙では、ほぼ長方形のプランをとった大型の土壙が多くみられる。また、1468号遺構は、木棺墓を埋置した墓壙である。人骨が、横臥屈葬で遺存していた(P. 118 ~120)。

第4面の遺構の時期は、12世紀後半から、14世紀代にわたっている。前述した様に(第二章2、調査地点の基本層序)，第4面の中程の遺構は、調査区の北側と南側で検出された第5面につながるものと考えられる。このような点から、第4面で調査した遺構に時間的な幅が大きいのはやむをえないし、そのために遺構の分布が稠密になっているものと言えよう。

なお、第4面では、その南端部分において、残土置きとその搬出の関係から、一部調査を断念した部分がある。



Fig. 10 第4面全景（南より）

## 第5面

前述した様に（第二章2、調査地点の基本層序）、第4面の中程の遺構検出部分から、調査区の南と北に、第5面がつづいて行く。そのため、第5面は、調査区の南側と北側に二分され

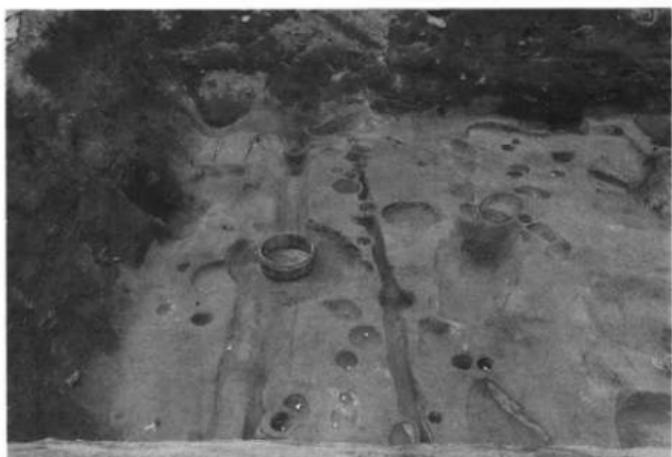


Fig. 11 第5面北側全景（西より）



Fig. 12 第5面南側全景（南より）

1 2 3 4 5 6 7 8

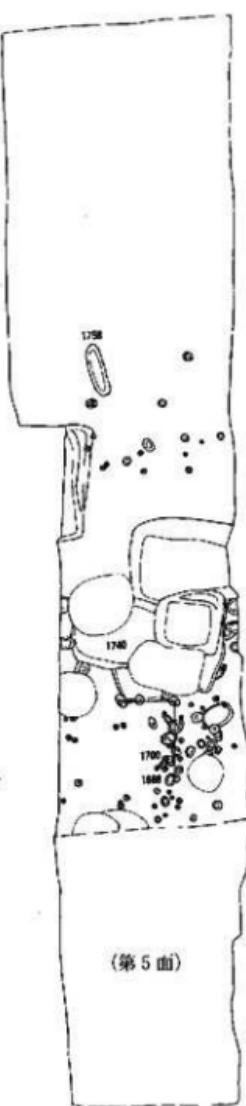
A  
B  
C  
D  
E  
F  
G  
H  
I  
J  
K  
L  
M  
N  
O  
P  
Q  
R  
S  
T  
U  
V  
W  
X  
Y  
Z



第4面

1 2 3 4 5 6 7 8

A  
B  
C  
D  
E  
F  
G  
H  
I  
J  
K  
L  
M  
N  
O  
P  
Q  
R  
S  
T  
U  
V  
W  
X  
Y  
Z



第5面

Fig.13 第5面・第6面造構平面図 (1/250)

ている。

第5面北側は、標高2.6~2.8mで調査した遺構検出面である。第4面からは、30cm程掘り下げている。溝が2条、調査区を横断している。また、それに平行する短い溝状遺構もみられる。柱穴・土壌が若干ある程度で、遺構の分布密度は低い。

第5面南側は、標高1.2~1.8mをはかる。第4面からは、70cm程掘り下げている。検出した遺構は、柱穴・土壌・井戸で、第5面北側と比べれば、遺構の分布密度は大きい。1834号遺構は、木棺を埋置した墓壙である。仰臥伸展葬された人骨が残されていた(P. 130~132)。

第5面で検出した遺構は、おおむね12世紀後半に位置付けられるものである。

## 第6面

標高1.7~2.3mで調査した遺構検出面である。調査区のはば中程で検出された遺構面で、調査区の北側では第5面とした淡黄色の砂丘砂層面につながり、南側では傾斜を強めて落ちこんで行く。

検出された遺構は、柱穴と方形・長方形のプランである。柱穴は、小規模なものが第6面南半にかたまつて検出されている。方形・長方形のプランは、方形~長方形のプランに、壁の立った逆台形の断面を呈するもので、柱穴等は伴っていない。竪穴住居等の性格が考えられるが、決め手は欠けている。1758号遺構は、砂の面に、伏臥伸展の状態で人骨が出土したもので、明瞭な土壌等の施設は伴っていない。人為的な埋葬施設ではないとも考えられる(P. 134~135)。

第6面の遺構の年代は、おおむね11世紀前半であろう。

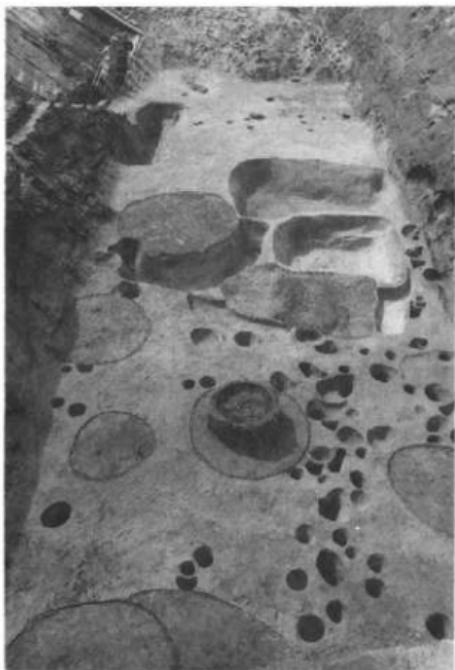


Fig. 14 第6面全景(南より)

#### 4. 近世の遺構・遺物

第42次調査地点では、第1面を中心として、近世以降の遺物・遺構が多く検出された。ここでは、それらの中から、主要な遺構およびまとまりの良い遺物を出土した遺構を抽出して、略述する。

##### 118号遺構

第1面1—5・6区より検出した土壙である。1辺約165cm、深さ約55cm隅丸方形の土壙を掘り、その内側に石積をして榾形の室をつくるものである。石積は、3段から5段で、特に石の大きさに規則性はない。大きめの石を下に置き、小振りな砾は、石と石とのすき間の充填や、石積上部に重ねられている。石積は、石の平らな面を内側に向けてなされ、平らで直線的な石壁をつくり出している。石積の内法は、81~83cmのはば正方形で、深さは、45~50cmをはかる。石積の裏側には、妻込めや控え積みはみられず、石を積み上げながら、背面に土をつめていったものと思われる。

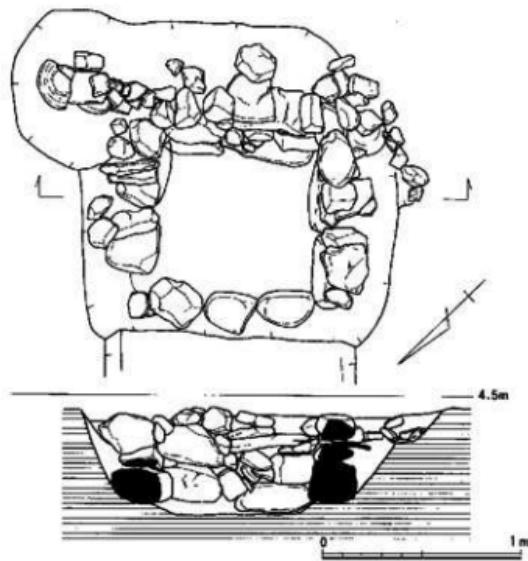


Fig. 15 118号実測図 (1/30)



Fig. 16 118号遺構（北より）



Fig. 17 118号遺構（東より）

### 136号遺構

第1面M—5・N—5区より検出した土壙である。約190cm×150cm、深さ60~70cmの隅丸長方形の上塙の内側に、126cm×105cm、深さ54cmの内法で石を積み上げたものである。床面は、中程から西側へ一段低くなり、ここを境として西側では、特に南西壁においては小砾を5~6段積みあげるが、東側の壁は大きい石を一段横に置くのみと、構造的に異なる。これらの点を考えると、最初はこの西半分の大きさであったものを、掘り足して、現在の大きさに拡げたものと思われる。

出土遺物は、土師器・肥前系陶磁器・備前焼等である。1~7は、土師器の皿である。法量の上から、3タイプにわかれれる。1~5は、口径7.0~8.4cm、器高1.15~1.4cmをはかる。6は、口径9.6cm、器高2.0cmで、口径に対して比較的器高が高い。7は、口径14.45cm、器高2.0cmをはかる。1~6は、外底部に回転糸切り痕がみられるが、7は体部下位から外底部を回転ヘラヶズリして、丸味を作っている。いずれも体部及び内面は、回転ナデを施す。4の口縁には、油煙が付着している。8は、焼塩壺の蓋である。上面と、身を受ける段部まではヨコナデを施

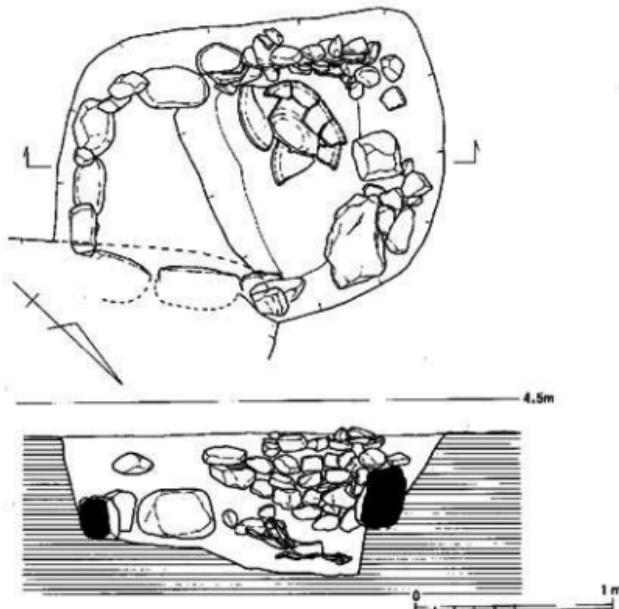


Fig. 18 136号遺構実測図 (1/30)



Fig. 19 136号遺構（東より）



Fig. 20 136号遺構（北より）

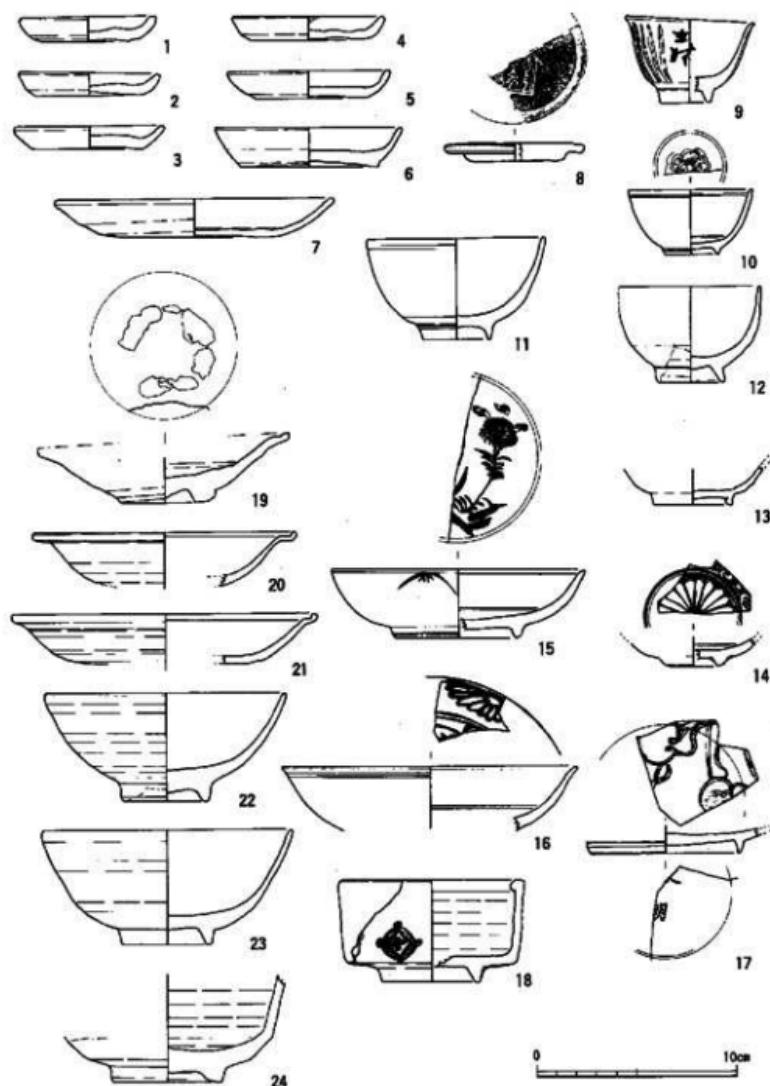
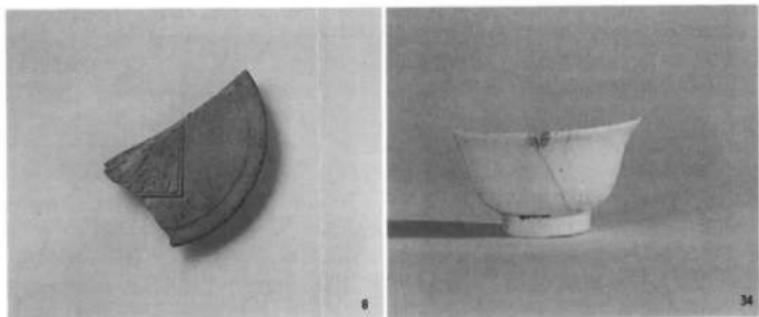
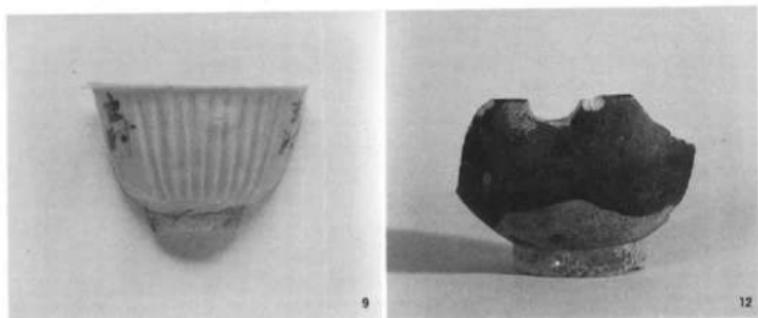


Fig. 21 136号墓出土实物实测图 1 (1/3)



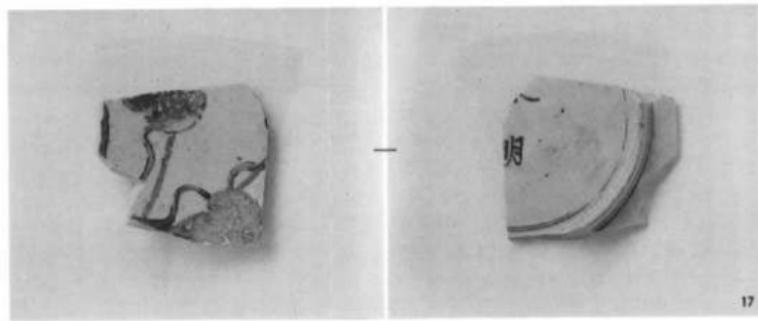
8

34



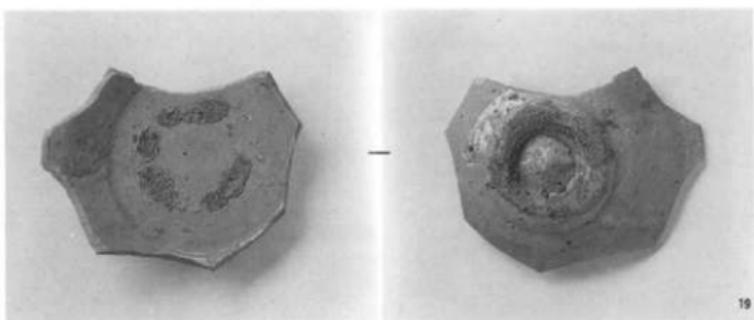
9

12

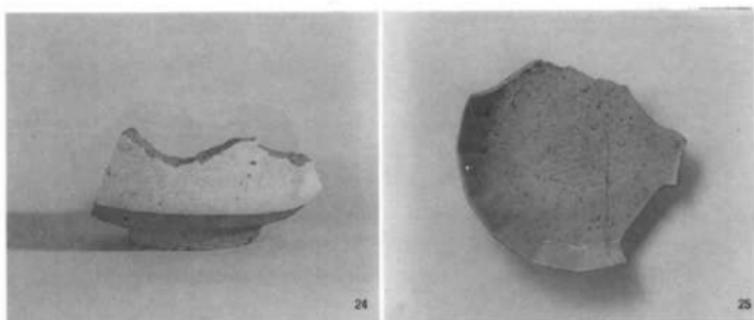


17

Fig. 22 136号遺構出土遺物 1

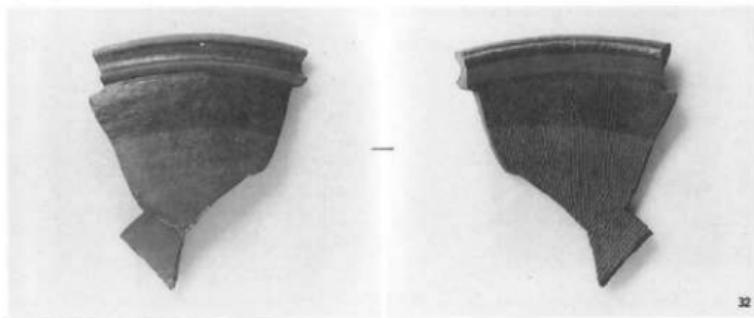


19



24

25



32

Fig. 23 136号遺構出土遺物 2

すが、内面の凸部の平坦面は、型抜きのままで調整されていない。上面に刻印が打たれる。上半部を欠くが、二重線による長方形の枠取りの中に、漢字まじりの仮名で三行書きされている。他の類例から、「団団団ん里う 田園図き志本 団団団□□左衛門」と推定判読できる。渡辺誠氏の分類による蓋D類である（渡辺誠「塩焼」『講座・日本技術の社会史 第二巻：日本評論社 1985年』）。9～11・14～16・18は、肥前染付である。17は、伊万里の色絵の皿である。外底には、赤絵で「大明塗園」の銘を入れる。12は、黒釉を施したぐい飲みである。釉はつけ

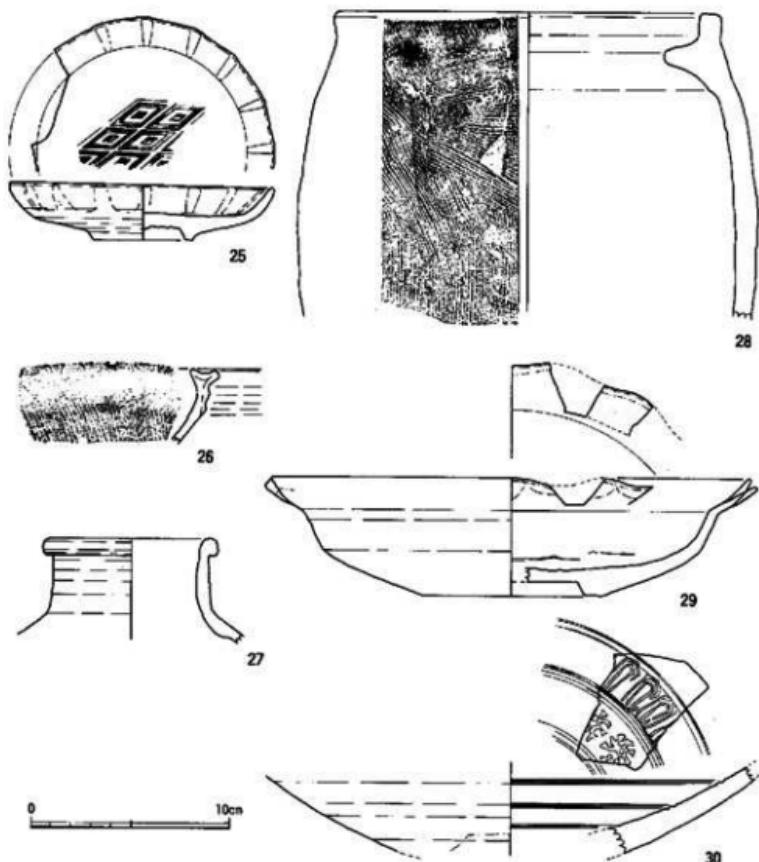


Fig. 24 136号橋出土遺物実測図 2 (1/3)

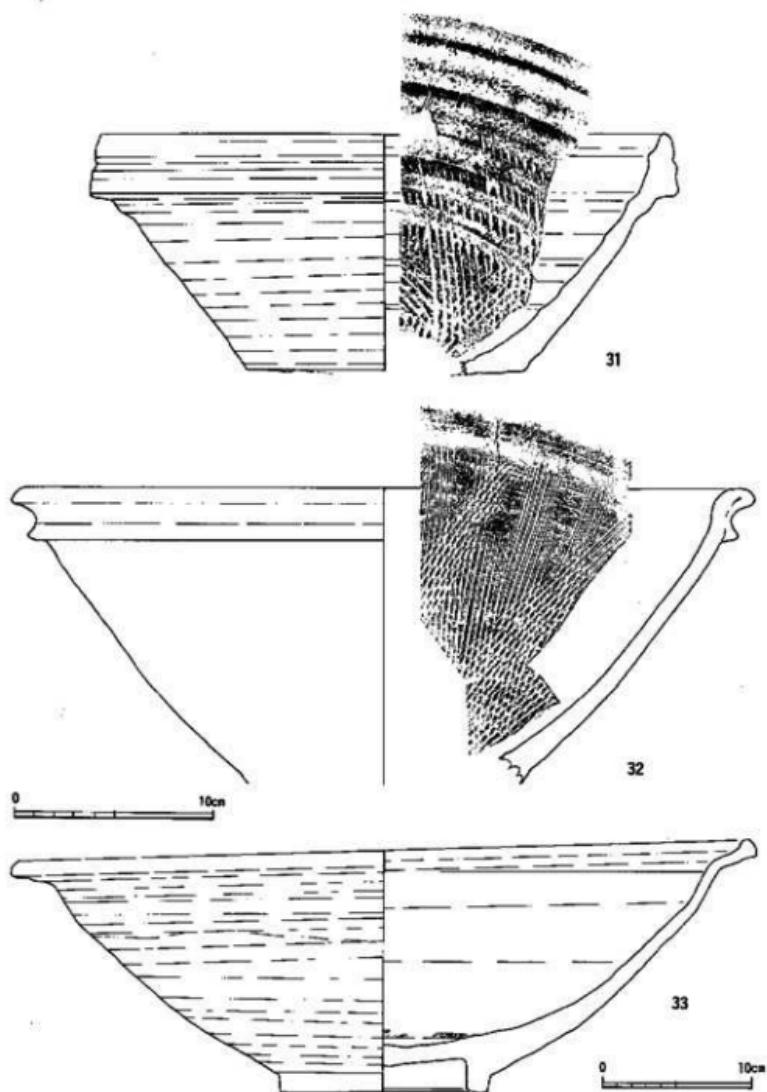
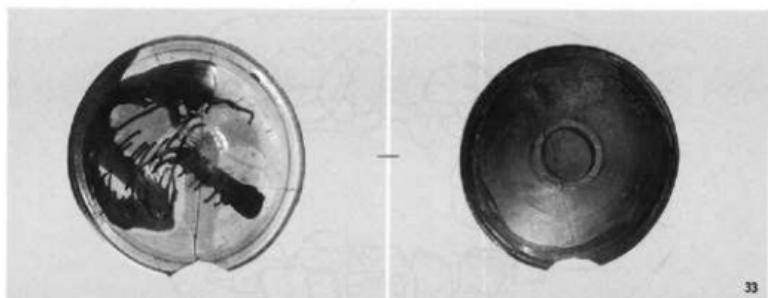


Fig. 25 136号墓出土遗物实测图 3 (1/3, 1/4)



33

Fig. 26 136号遺構出土遺物 3

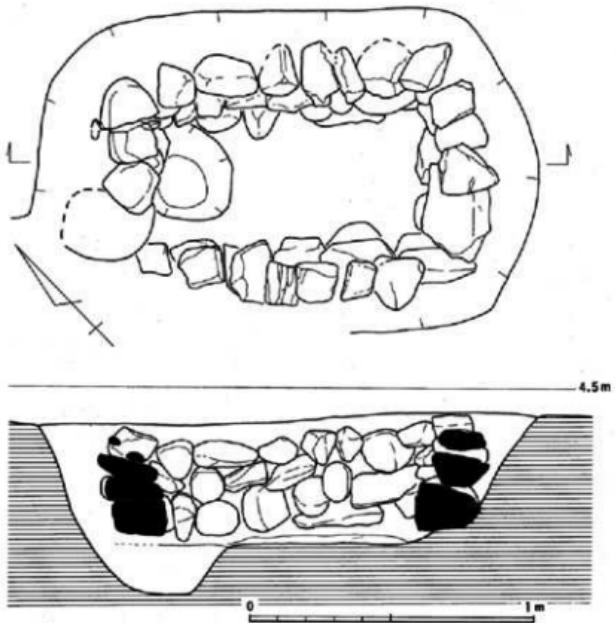
がけする。13は、青磁である。内面には、細かい平網様の布目がみられる。19~24は、唐津焼である。19~21は溝縁皿で、19には砂目がみられる。22・23は、刷毛目文様を施す。25は、灰白色の釉を施した陶器皿で、見込みには花菱文様がスタンプされる。26・32は掲釉陶器のすり鉢である。27は掲釉陶器の壺である。28は瓦質土器で、火舎であろうか。29は黄釉を施した陶器である。30・33は、唐津焼の鉢である。30は、沈線・劍頭文・花文を白象嵌している。また、体部外面は、うすく白化粧されている。31は、備前焼のすり鉢である。備前焼編年のⅦ期にあたるものであろう。

136号遺構の年代については、唐津焼の溝縁皿や備前焼Ⅶ期のすり鉢についてみれば、17世紀前半代を考える。しかし、焼塩壺の蓋は、前述した渡辺氏の考察によれば、20世紀、遅く19世紀である。ただし、渡辺氏もこの上限については今後の課題としており、ここでは、136号遺構の年代を、幅を取って17世紀代としたい。

### 137号遺構

第1面N-6区で検出した土壤である。136号遺構を切る。土壤の掘りかたは、長辺約160cm、短辺110cm程度、深さ46cmの長方形で、その内側に、石室状の石積をつくる。石積は、比較的大き目の石を用いたもので、小砾はほとんど使われていない。石積の内法は、96cm×60cmの長方形を呈し、深さは36cmをはかる。石積は、3~4段に積まれ、裏込め等はなされていない。石積を作りながら、背面に土を入れていったものと思われる。なお、土壤床面の北辺近くが、径約30cm、深さ約18cmほど落ちこんでいる。この落ち込みは、北壁の石積の下にもぐりこんでおり、137号遺構に先行する柱穴状のピットと考えられる。

出土遺物は、近世の肥前陶磁器・土師器などであるが、少量の為、固化していない。切り合ひ関係から、136号遺構よりも後出するものである。



### 139号遺構

第1面N-7, 0-7区で検出した土壙である。長径約175cm、短径約150cm、深さ約75cmの橢円形の土壙の内側に、石積で室を作る。石積は、大小の石をとりまして2~5段に積み上げている。石は、平坦な面を内にむけてそろえ、内法70cm×74cmのはば正方形に並べる。石積の高さは、最も残りの良いところで、46cmをはかる。土壙床面は、その中央部を徑約56cm、深さ約15cmほど掘りくぼめている。石積の上には、唐津焼の大鉢と肥前陶器の壺底部が乗っており、この石積の上端が、大きくは損われていないことを示している。

Fig. 32に出土遺物の一部を示した。1は唐津焼の大鉢である。2は砂岩製の板磚片で、石積

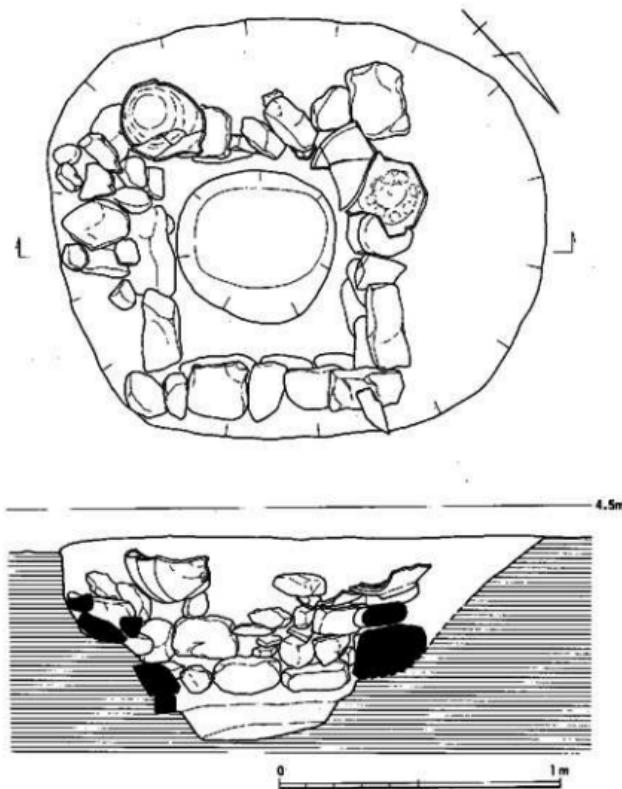


Fig. 29 139号遺構実測図 (1/20)



Fig. 30 139号遺構（南より）



Fig. 31 139号遺構（西より）

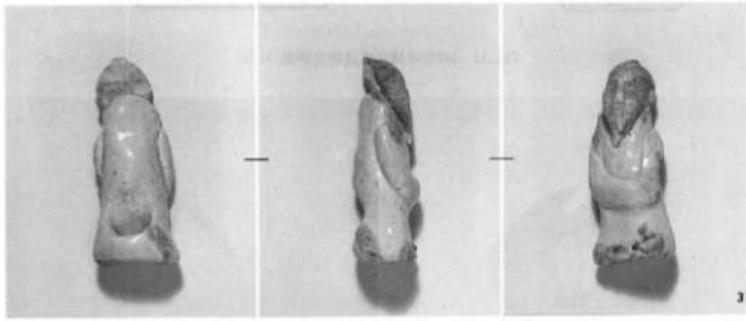
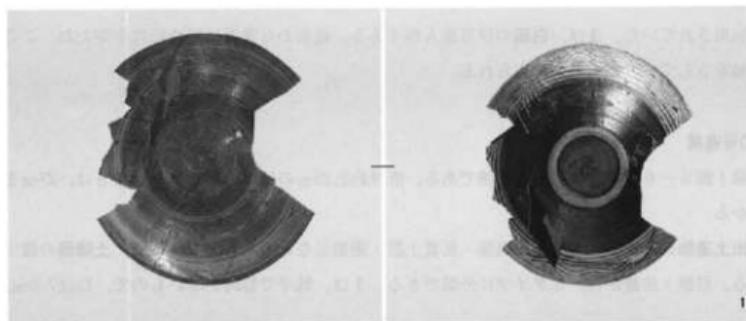


Fig. 32 139号遺構出土遺物

に転用されていた。3は、白磁の伊万里人形である。底面から背面に斜めに穴が穿たれ、ここに軸をさして立てたものと考えられる。

#### 140号遺構

第1面0—6区より検出した土壌である。直径約1.25mのほぼ円形を呈し、深さは、27cmをはかる。

出土遺物は、土師器・肥前陶磁器・瓦質土器・銅製品などである。1～4は、土師器の皿である。形態・法量から、2タイプに分類できる。1は、低平で器肉が厚いもので、口径7.0cm、

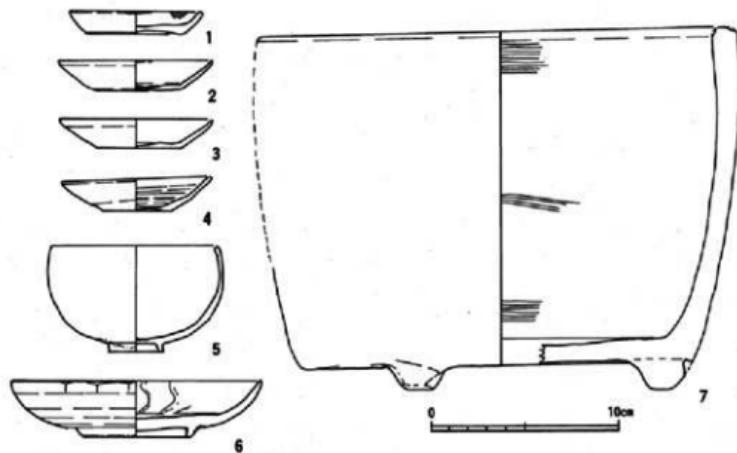


Fig. 33 140号遺構出土遺物実測図 (1/3)

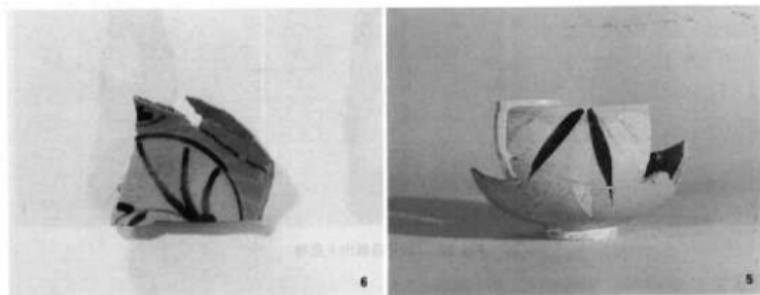


Fig. 34 140号遺構出土遺物

底径5.1cm、器高1.1cmをはかる。口縁に煤が付着し、灯火器として用いられていたことを示す。2～4は、口径に対して底径が小さく、ラッパ状に大きく聞く体部をもつもので、口径はやや内湾気味におさめる。器内は薄く胎土は精良で、黄味の強い淡褐色を呈する。口径8.2～8.3cm、底径4.4～3.6cm、器高1.6～1.7cmをはかる。皿は、すべて底部を回転糸切りし、体部・内底部には回転ナデを施す。5・6は、肥前系陶器である。5は色絵茶碗である。赤・緑で、筆葉文様を描く。高台疊付から、高台の内側傾斜面までは、露胎である。6は、鉄絵の皿である。疊付を露胎とする。7は瓦質土器の火舍である。内面は、体部上半で横位の刷毛目調整、下半で右下りの刷毛目となる。体部外面は、なめらかに磨いている。この他、140号遺構からは、分銅型銅製品が出土している。

#### 141号遺構

第1面0～6区より検出された土壙である。平面形は、直径約90cmの円形を呈する。深さは、約12cmをはかる。東側は、前述した140号遺構から切られている。

出土遺物は、土師器・肥前系陶器などである。出土量は少ない。1・2は、土師器の坏である。外底部は、回転糸切りする。体部と内底面は、回転ナデ調整である。口径9.8cm、10.2cm、底径7.2cm、7.0cm、器高1.7cm、1.95cmをはかる。3～7は、肥前系陶器である。3～5は、唐津焼の滑縁皿である。6は、褐釉陶器である。いわゆる柿天目釉のもので、明るい茶褐色の釉が、まんべんなく施されている。7も唐津焼の皿である。体部下半は、露胎となる。

#### 150号遺構・151号遺構

第1面0～3区より検出した井戸状土壙と、それに付設された方形土壙である。井戸状土壙（151号遺構）の東脇に敷かれた砾は、方形土壙（150号遺構）の掘りかた上にかぶさっている。その一方で、同じ敷石は、方形土壙の内法と辺をそろえており、方形土壙の機能を妨げていない。したがって、両者は同時に營まれた一連の遺構であると考えられる。

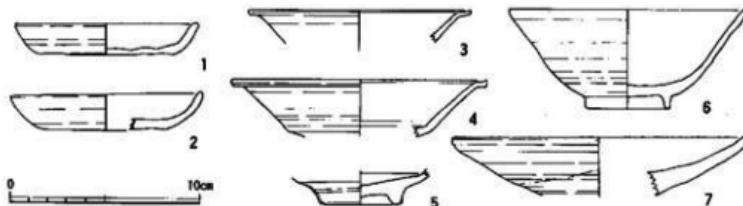


Fig. 35 141号遺構出土遺物実測図 (1/3)

150号遺構は、90×110cmの長方形の掘りかた内に、瓦を立てて70×80cmの長方形の枠を作るもので、北東壁の瓦は、本来なかったのか、検出されていない。151号遺構は、深さ0.9mの円筒形の上層の周壁沿いに、礫を積みあげて、径70~75cmの筒をつくるもので、形状としては、井戸に類似する。しかし、土壤底は標高3.4mにあたり、この高さでは湧水はえられない。したがって井戸としては機能せず、おそらくは水溜め状の遺構であろう。151号遺構の東の敷石と150号遺構は、151号遺構に付設された作業場と考えられる。

出土遺物は、Fig.39・40に150号遺構、Fig.41・42に151号遺構のものを示した。150号遺構の遺物から略述する。Fig.39-1・2…土師器、3・8・10・11…肥前系陶器、4～6…肥前系磁器、7…明代色絵磁器、9…備前陶器である。1・2は、外底部を糸切りし、体部および内面は回転ナデ調整する。口径7.8、9.6cm、器高1.6、1.55cmである。3は、唐津焼の溝縁皿である。4・6は、古伊万里の青磁である。4の見込みは、蛇の目に輪をかきとる。5は、白磁である。7は、見込みに人物を描く。疊付は竈胎となる。8・10・11は、褐釉陶器である。

Fig.41-1～8…土師器、9・10・15…肥前系磁器、12・13・14・16・17…肥前系陶器、11…明代染付である。1～6は皿、7・8は壺である。外底部は糸切り、体部および内面は同

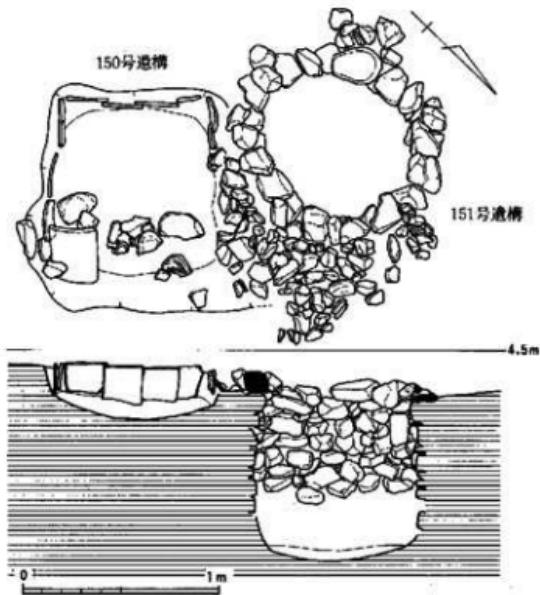


Fig. 36 150・151号遺構実測図 (1/30)



Fig. 37 150号遺構・151号遺構（西より）



Fig. 38 150号遺構・151号遺構（北より）

転ナデを施す。皿は、6.3~7.3cm、器高1.0~1.45cm、坏は、口径9.2, 10.0cm、器高1.6, 1.85cmをはかる。10は白磁である。15は染付である。12・17は、唐津焼である。13は緑釉陶器で、見込みの袖を蛇の目状にかき取る。14は、黄釉陶器の碗である。16は、褐釉陶器のすり鉢である。片口につくる。11は染付の皿である。苔筍底につくる。

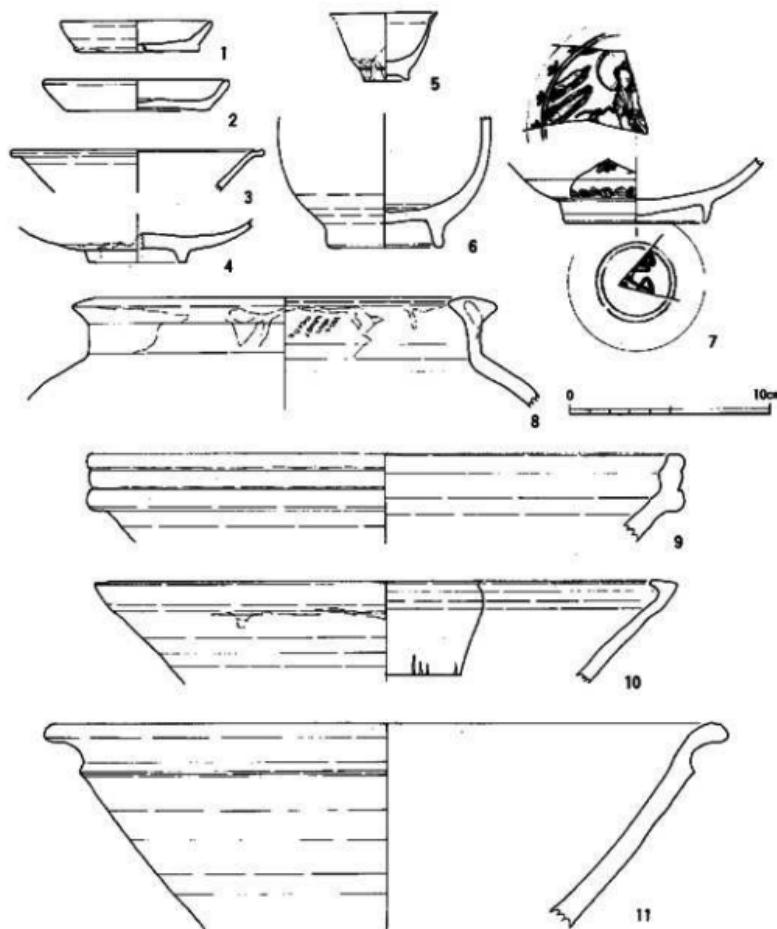


Fig. 39 150号遺構出土遺物実測図 (1/3)

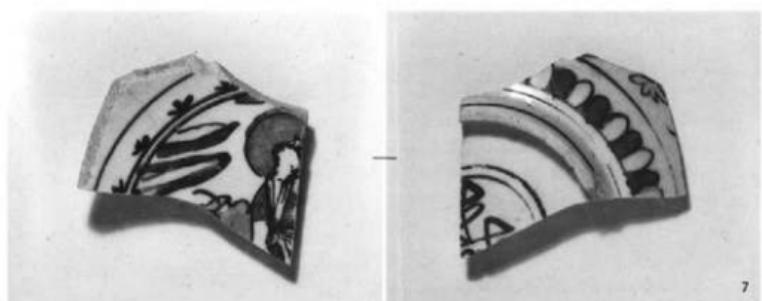


Fig. 40 150号遺構出土遺物

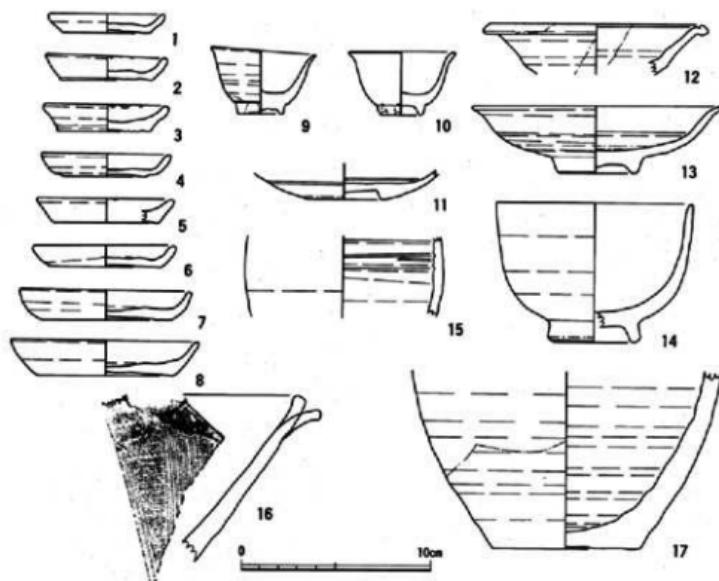


Fig. 41 151号遺構出土遺物実測図 (1/3)

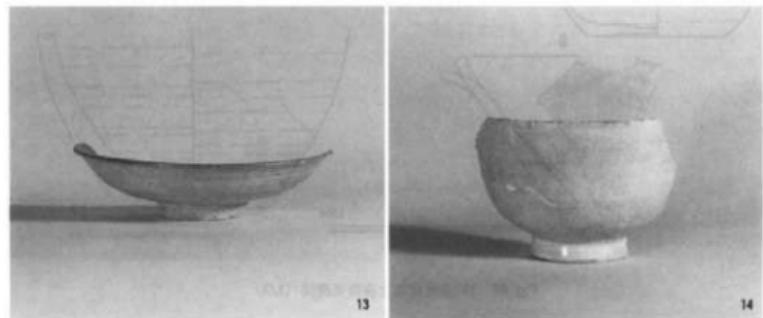
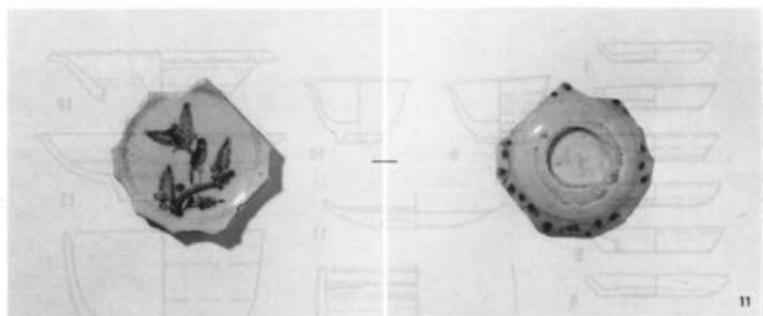
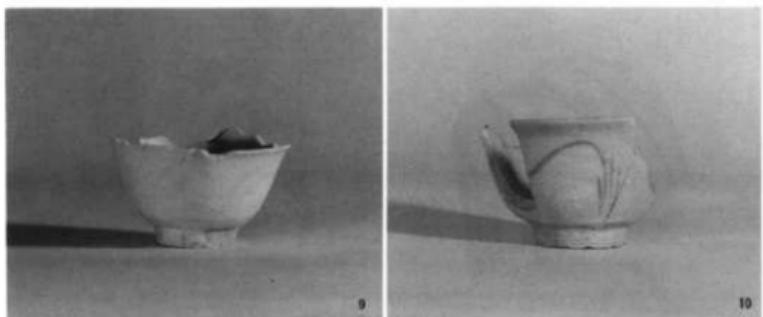


Fig. 42 151号遺構出土遺物

### 155号遺構

第1面N-2・3区より検出した土壌である。大半は調査区外に出ており、一部を調査したにとどまった。調査した部分は、 $1 \times 1.9\text{m}$ のみで、方形もしくは長方形を呈するであろう土壌の、北角部分にあたる。深さは、23cmである。

出土遺物は、土師器・肥前系陶磁器・備前陶器などである。1～7は、土師器である。外底

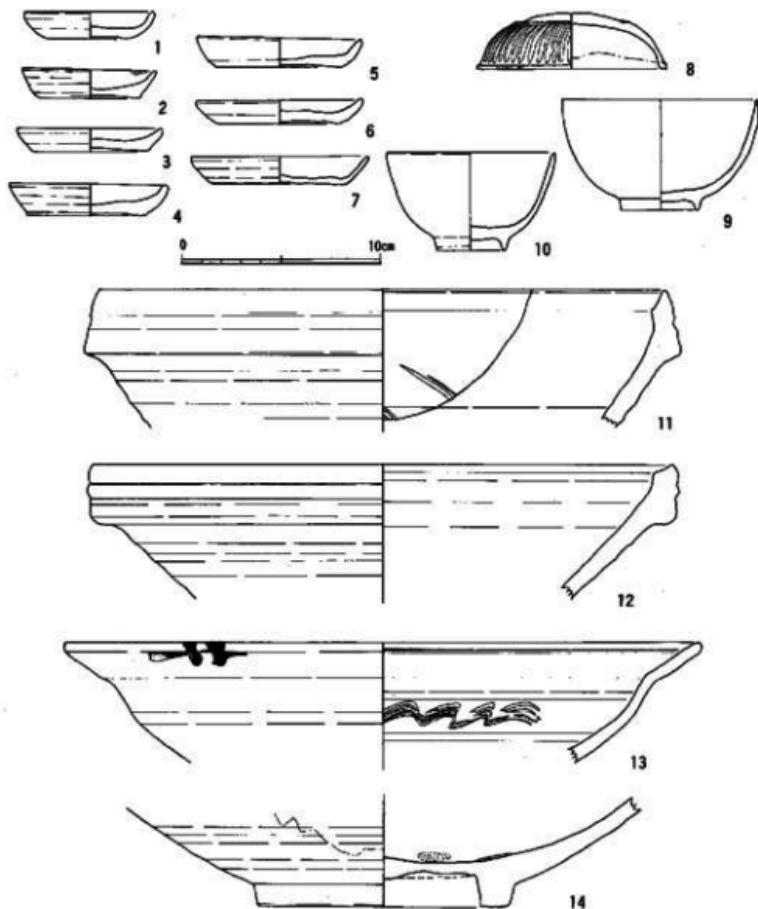


Fig. 43 155号遺構出土遺物実測図 (1/3)

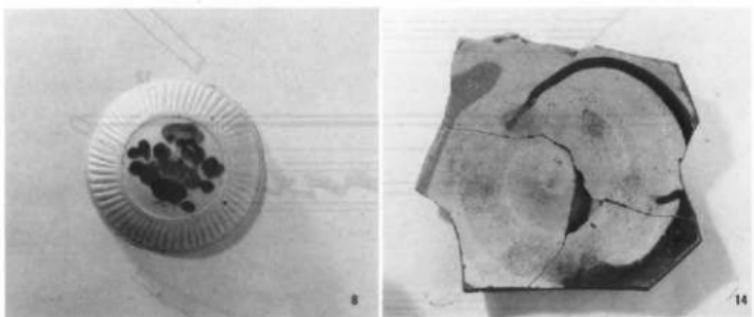
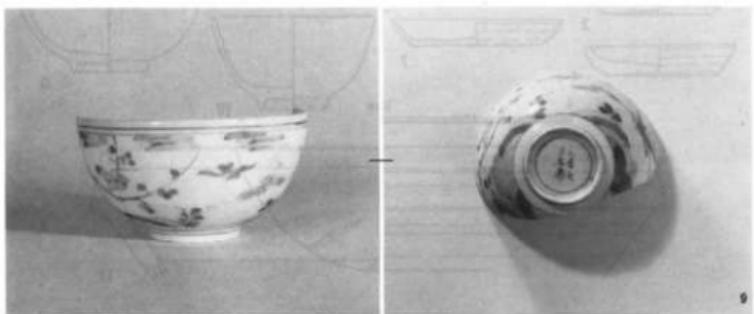
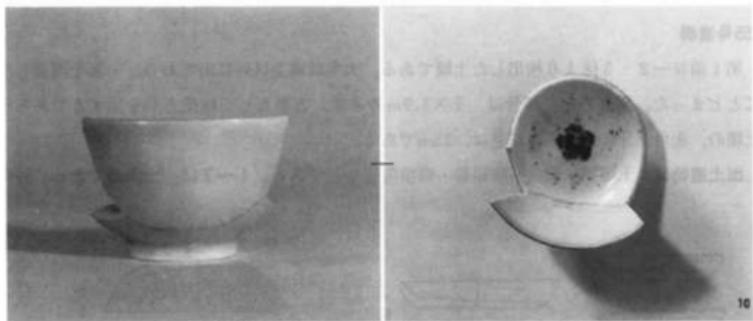


Fig. 44 155号遺構出土遺物 1

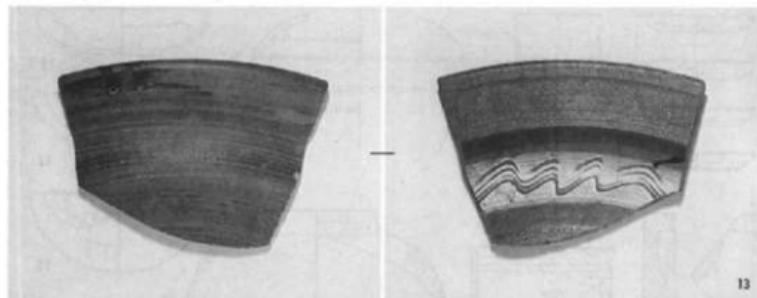


Fig. 45 155号遺構出土遺物 2

部は回転糸切りし、体部および内面には、回転ナデ調整を行なう。口径6.6~9.2cm、器高1.15~1.6cmをはかる。なお、2の口縁部には、煤が付着しており、灯明皿として用いられたことを示している。8~10・13・14は、肥前系陶磁器である。8は染付の合子の蓋である。頂部には、花文が描かれる。9は染付の碗である。内面は無文、体部外面に草花文を描く。10は、外面に青磁釉をかけ、内面を白磁とする碗である。見込み中央に五弁花文を入れる。13・14は唐津焼の大鉢である。13は刷毛目文を持つ。屈曲した口縁部内面から外面にかけては、褐釉をうすく刷毛塗りする。体部の内面は、内湾した部分に帯状に白化粧土をぬり、滌で波形に削り、地を出している。この文様帯から下には、褐釉を刷毛塗りする。14は、見込みに白化粧を施し、褐釉と綠釉を流している。11・12は、備前陶器のすり鉢である。

#### 156号遺構

第1面Q—4区より検出した土壙である。長辺1.3m、短辺0.95~1.15mのやや台形がかた長方形を呈し、深さは28~49cmをはかる。北西辺に寄って、礫が数個かたまって検出されている。一見墓壙を連想させるが、鉄釘・副葬品等の出土は全くみられず、また近世の遺構ということを前提とすれば、墓壙である可能性はきわめて低いと言える。ただし、形状からみて、単なる一時的なゴミ穴とは考えにくく、建物等に付設された施設(ゴミの穴の可能性を含めて)と思われる。

出土遺物は、土師器・肥前系陶磁器・ルツボ・瓦質土器観などが出土している。1~4は、土師器の皿である。外底部は、回転糸切りし、体部および内面は、回転ナデ調整を行う。口径5.9~6.2cm、器高0.9~1.0cmをはかる。5・6・8・9は、肥前系陶磁器である。5・8・9は、染付の磁器である。8の蓋の内面の文様帶は、墨ハジキがなされている。6は、京焼風の陶器である。呉須で絵付されている。7は、陶器である。白釉に褐釉をかけて文様を描く。10

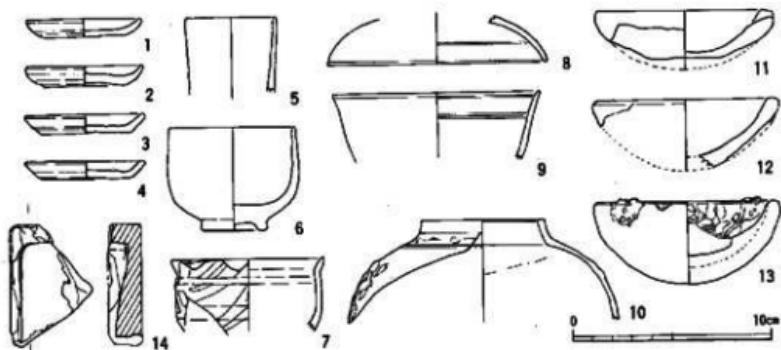


Fig. 46 156号造構出土遺物実測図 (1/3)

は、薄手で軟質の陶器である。土瓶である。褐釉で文様を描く。内面には、こまかいロクロ目がみられる。11～13は、ルツボである。土師質の壺形上器で、口縁部から内面にかけて、溶解した銅が厚く付着している。外面は、熱のためにかたく熱きしまる。11・12の外面は、熱のために剥離する。胎には、もみが多量に含まれている。14は、瓦質土器で作られた瓶である。陸の部分は、磨滅し、使用されたことを示している。

#### 157号造構

第1面R-3区より検出した土塊である。一部は調査区外に出ており、全体は知りえない。検出した範囲で、長辺1.8m以上、短辺1.6mをはかり、隅丸長方形を呈すると思われる。深さ13cmをはかる浅い土塊で、陶磁器を主として、大量の遺物が廃棄されていた。

出土遺物をFig.48～52に示す。1～15は、肥前系陶器の染付である。1は蓋である。2～4は皿である。2・3の外底部には、ハリの痕跡がみられる。5～11は、碗である。5の内面の口縁部直下には、雷文帯を描く。6は、体部と見込みに、昆虫文様をあしらう。7と8は、セットになる碗と蓋である。ともに、草むらに鳥がうずくまる絵柄を描いている。12は、長頸瓶である。13は、小鉢の蓋であろう。中央には、小さなつまみがつく。14は、仏壇器である。口縁部下に、蛸唐草文様を描く。15は、鶴首瓶である。小形品で、神酒徳利に用いたものであろうか。口縁部から胴部上半までは蛸唐草文を配し、胴部下半には綫縞が垂下する。

16～33は、陶器である。16は、軟質の陶器で、急須である。白釉の上に、緑釉や褐釉で絵付する。17～21は、京焼風陶器である。胎土は、精製されて緻密である。17～20は無高台、外面露胎である。21は高台をつけ、全面に施釉、疊付のみ露胎となる。21の見込みには、印花文がみられる。22・23は、黄釉を施した碗である。24・25は、黒色釉を施した碗である。26は、黒

色釉を厚くかけた鉢である。口縁は、八角形に面取りする。27は蓋である。上面には、飛びカシナがなされている。褐色釉をうすくかけた上に白泥をたらして施文する。28は、高台付の鉢である。黒色釉を厚く施した上に、白色釉をかけている。底部中央には、穿孔がみられる。植木鉢であろう。29は、型造りの変形鉢である。外底部には、耳形を呈する脚が、4箇所につけ

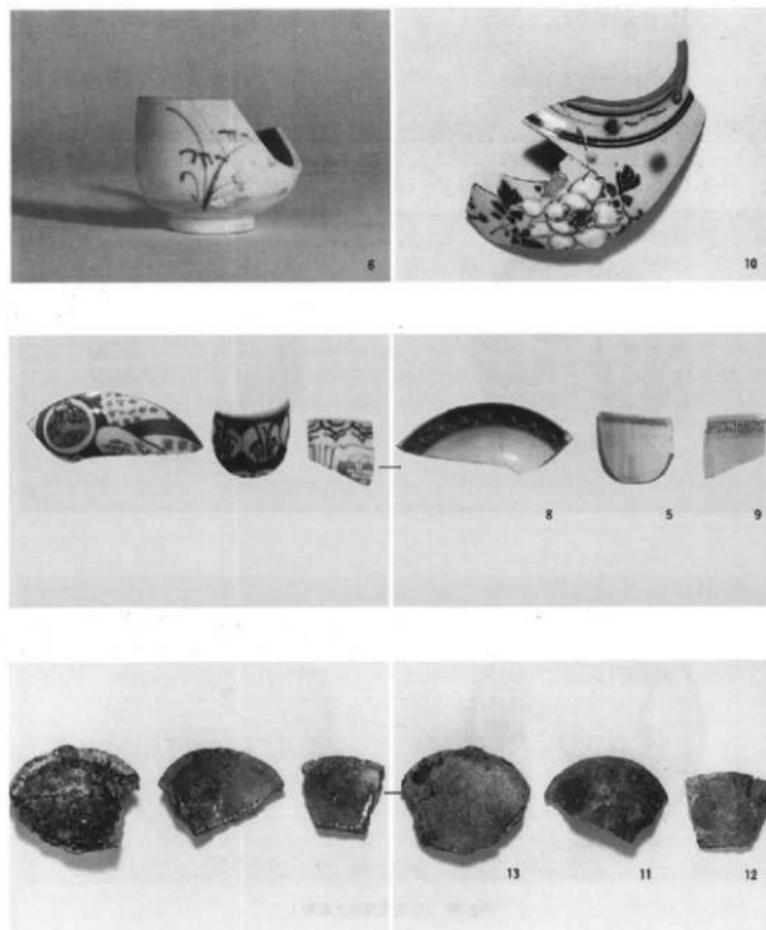


Fig. 47 156号遺構出土遺物

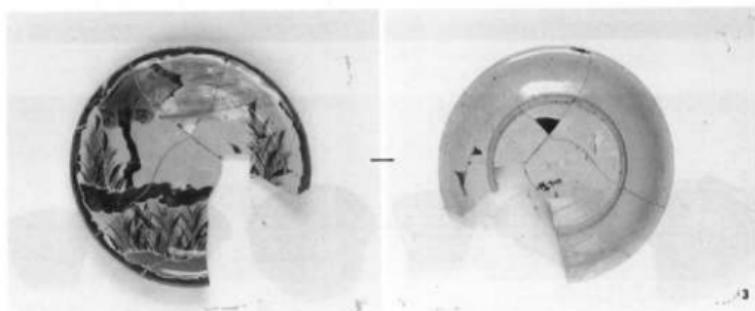
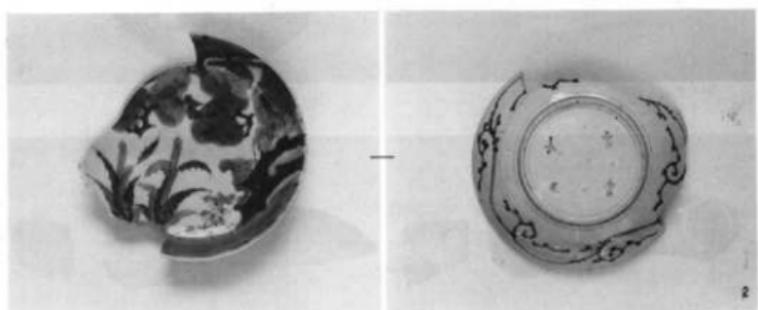
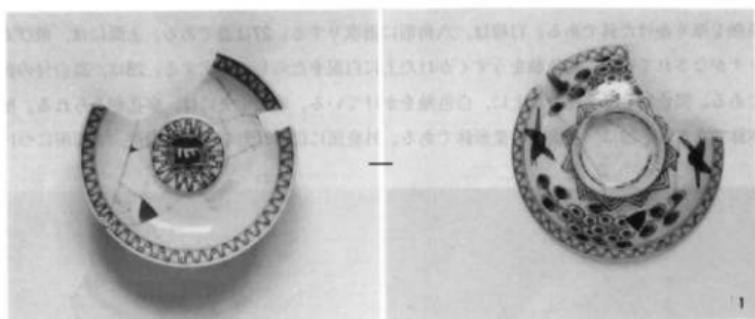
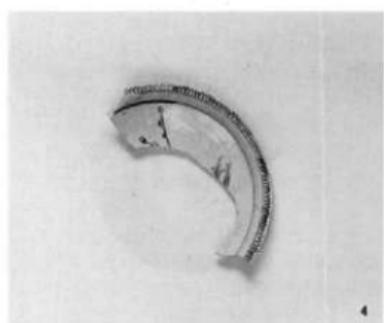


Fig. 48 157号遺構出土遺物 1



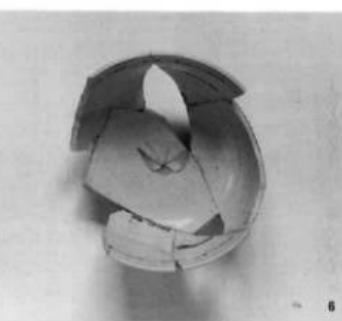
4



5



6

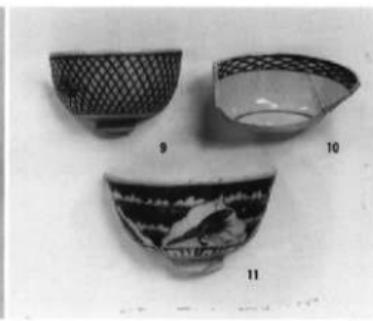


6



7

8



9

10

11

Fig. 49 157号遺構出土遺物 2

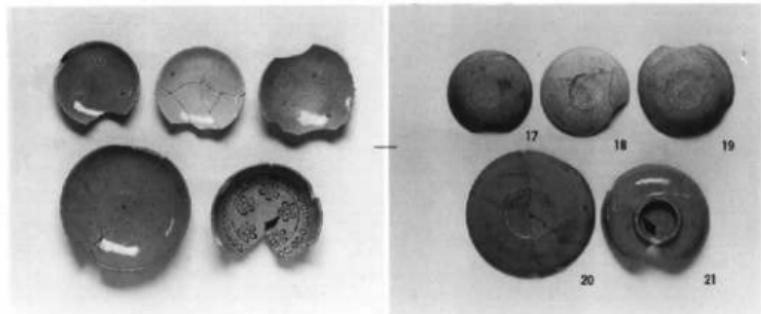
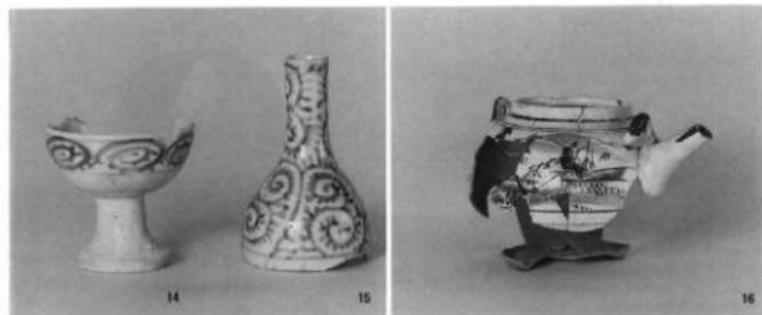
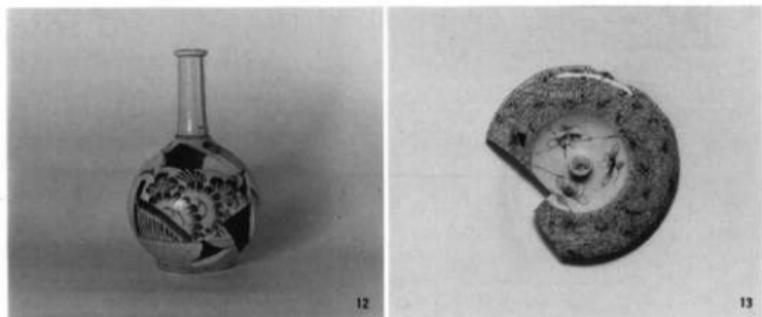


Fig. 50 157号遺構出土遺物 3

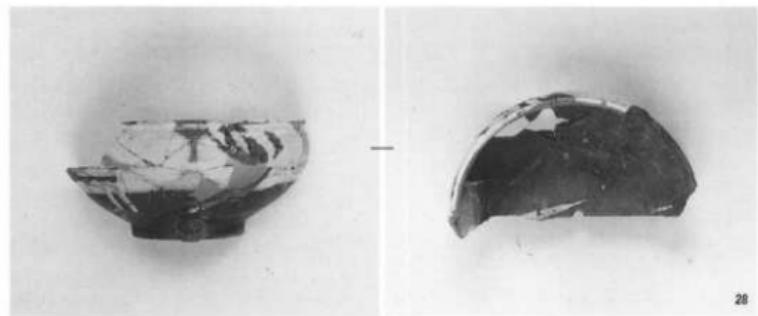
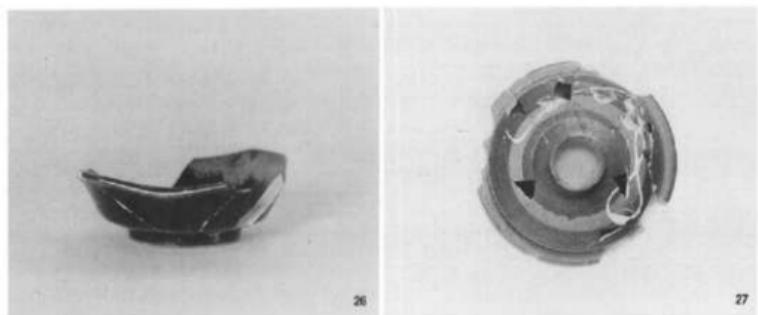
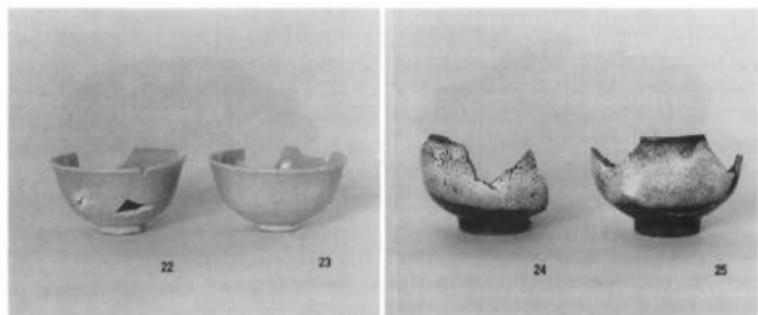
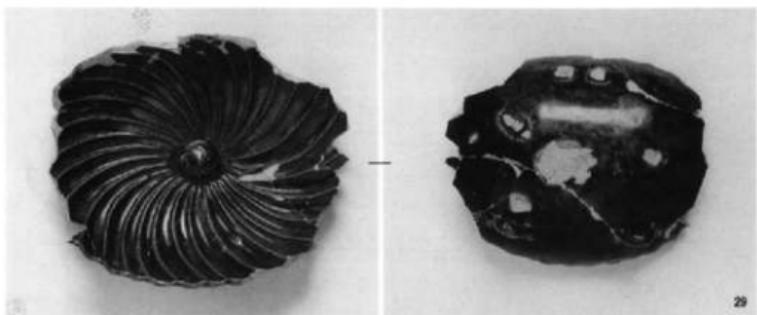
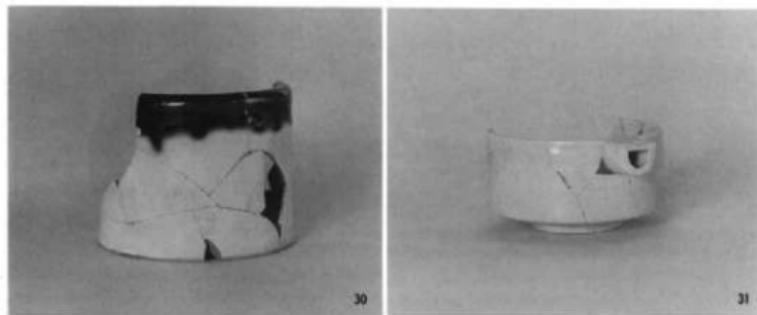


Fig. 51 157号遺構出土遺物 4



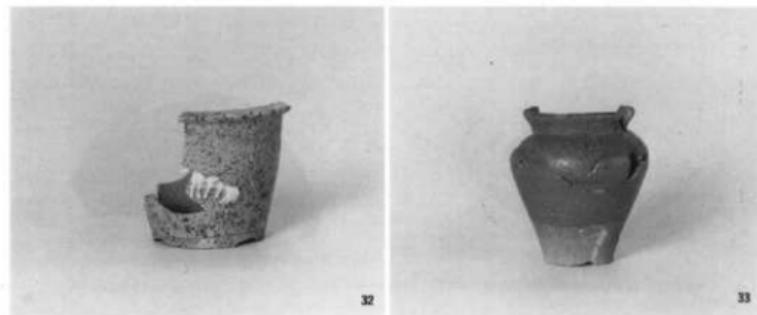
28

29



30

31



32

33

Fig. 52 157号遗構出土遺物 5

られる。濃紺色の釉が全面に施されている。花器であろう。30は、筒形の鉢である。白色釉をかけた後、口縁部分にのみ黒色釉を施す。平底である。31は、小鉢形の陶器である。うすく黄濁した白色釉をかける。断面が半円形を呈する長さ3cm程の把手状の部分が、貼りつけられている。遺存部分には、注口はなく、もし注口を設けるとすれば、把手と相対する位置に付くことになり、実用面で若干疑問が持たれる。把手部分は、飾りと考えたい。なお、把手上面には、花形の透し孔があけられている。32は、小形の鉢である。黄灰色の釉をうすく施した上に、白色釉を花弁形に置く。脚部は、アーチ形に抉り込む。楕木鉢状ではあるが、底部に穿孔はない。33は、小壺である。光沢のない茶褐色の釉を、つけがけする。釉表にあれた感があるので、あるいは二次的に火熱を受けた可能性もある。

157号遺構出土の遺物には、次に述べる222号出土の遺物と接合できるもの、同一個体と考えられるものがある。両遺構は切り合い関係にあり、157号遺構が、222号遺構を切っている。おそらく調査時に、157号遺構の遺物が222号遺構の遺物に混入したものであろう。

#### 222号遺構

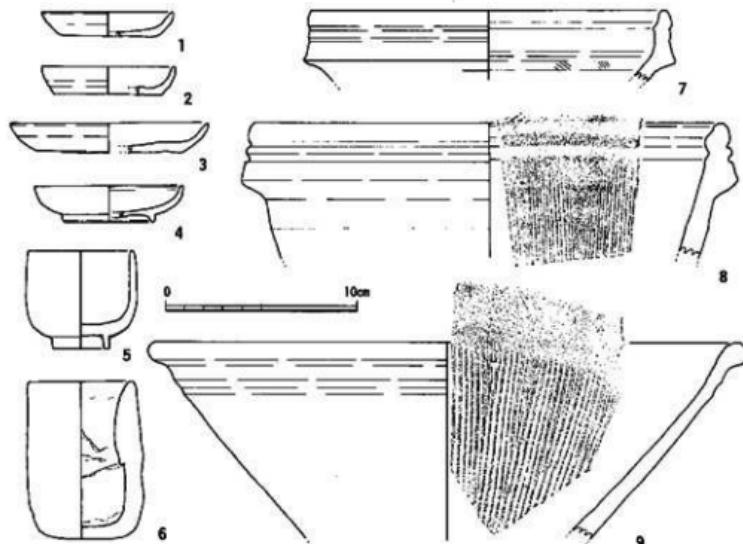


Fig. 53 222号遺構出土遺物実測図 (1/3)

第1面R・S—4・5区より検出した土壤である。長軸3.4m、短軸2.0mの不整椭円形を呈し、深さは、77cmをはかる。

出土遺物を、Fig.53・54に示す。1～3は、土師器の皿である。法量・形態から、2タイプにわかれれる。1・2は、それぞれ口径7.0cm、7.2cm、器高1.3cm、1.5cmをはかる。3は、口径10.6cm、器高1.6cmをはかり、1・2に対して口径が大きく、浅く扁平な形をとる。いずれも、外底部は回転糸切り、体部から内面は、回転ナデ調整する。4・5は、肥前系染付である。4は皿で、見込みに草花文様を描く。豊付のみ露胎とする。5は、湯飲み碗（ぐい飲み？）である。外面に蘭を描いている。6は、土師質土器の焼塙壺である。器表は、あれて剝離気味である。7・8は、備前陶器のすり鉢である。備前焼福年の貞期にあたると思われる。9は、褐釉陶器のすり鉢である。すり目は、すき間なく、密にならぶ。唐津焼か。

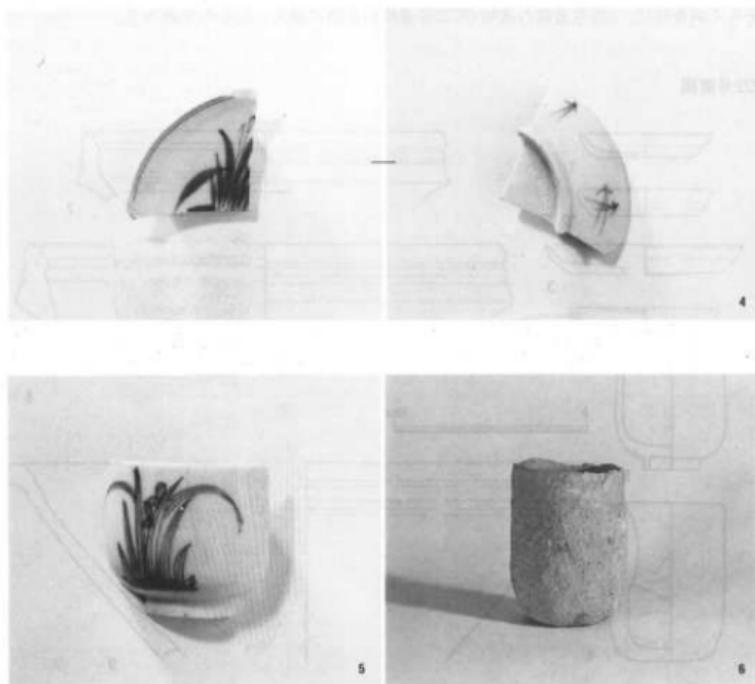


Fig. 54 222号遺構出土遺物

#### 447号遺構

第2面P—6・7区より検出した土壌である。一部は、調査区外へ出る。長辺2.2m以上、短辺2.2mの隅丸長方形を呈すると推定される。深さは、48cmをはかる。

出土遺物は、土師器・瓦質土器・肥前系陶磁器・備前陶器・石錠などである。1～11は、土師器である。法量から3タイプにわかれ。1～4は、口径6.6～7.25cm、器高1.2～1.3cmをはかる。2・4の口縁部には、煤が付着しており、灯明皿と考えられる。5～10は、口径8.4～10.3cm、器高1.3～1.6cmをはかる。11は、口径11.9cm、器高2.1cmをはかり、体部はラッパ状に大きく開く。1～10は、底部を回転糸切りし、体部および内面には、回転ナデ調整を施す。11は、これに更に内底部のナデ調整を行なう。12は、瓦質土器の浅鉢である。体部下半は、指押えである。体部上半から体部内面は、横ナデ調整、内底部は、一方向にナデ調整する。13は、明代染付のつば皿である。つば状口縁の上面には、桃と宝尽し、見込みには絵柄不明の丸い文様、口縁の下面には宝物と唐草、体部外面には花唐草文を描く。豊付は露胎で、砂が付着している。14・15・18は肥前染付である。16は陶器で、褐釉を全面に施した上に、口縁部から外面にかけて白釉をかける。19は色絵の磁器である。20は、唐津焼の皿である。見込に胎土目がつく。21は、備前焼のすり鉢である。22は、陶器の鉢である。体部下位に耳がついて、あるいは蓋か。23は滑石製の石錠である。24～26は、瓦である。24は、鬼瓦の一部であろう。

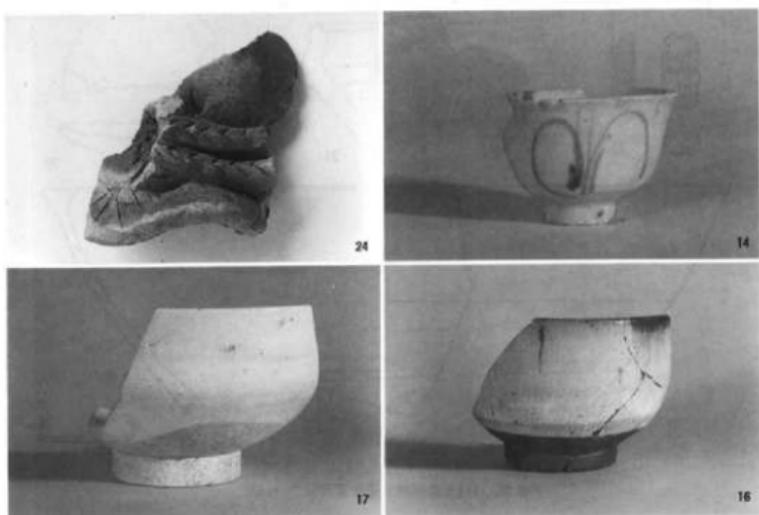


Fig. 55 447号遺構出土遺物 1

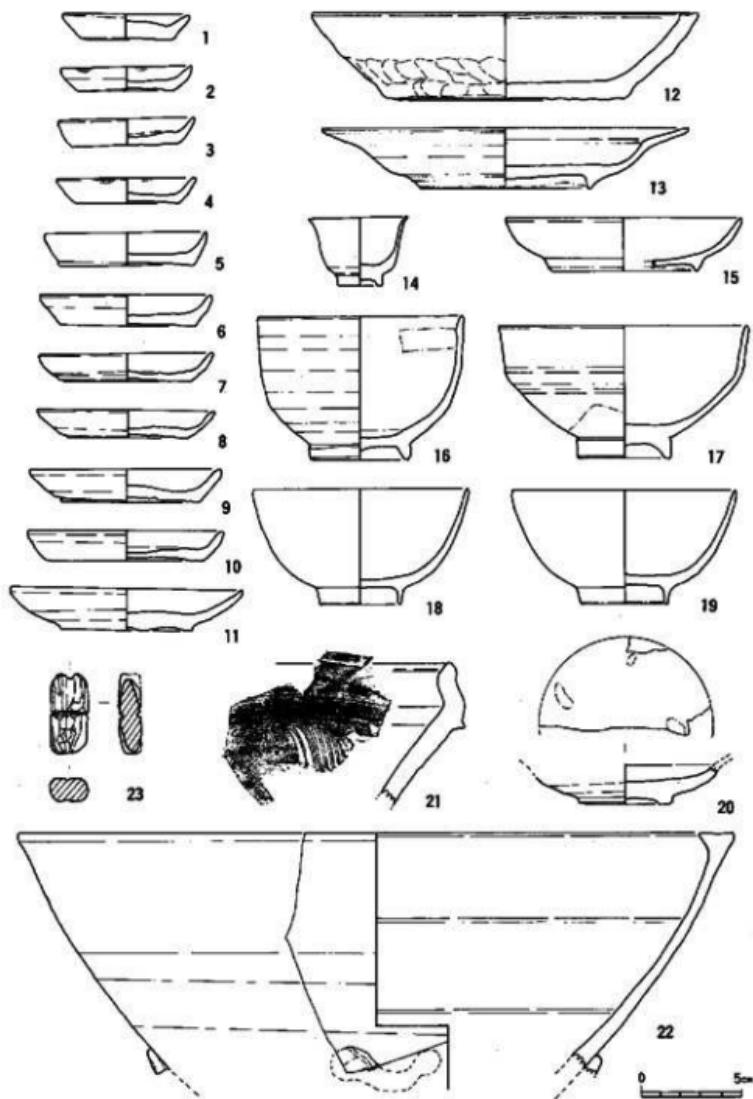


Fig. 56 447号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

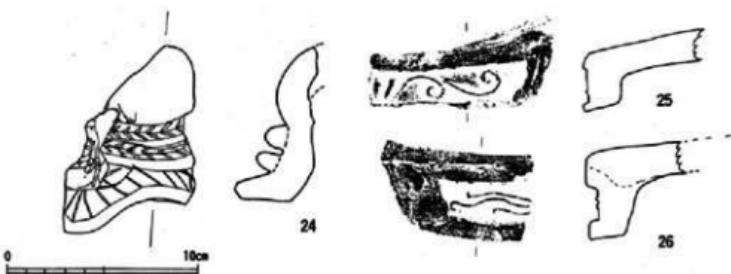


Fig. 57 447号遗物出土实物实测图 2 (1/3)

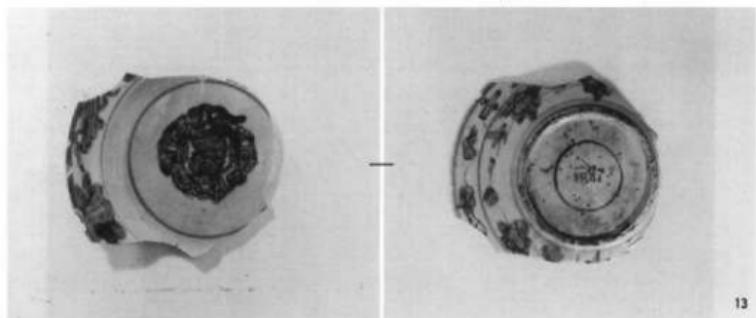
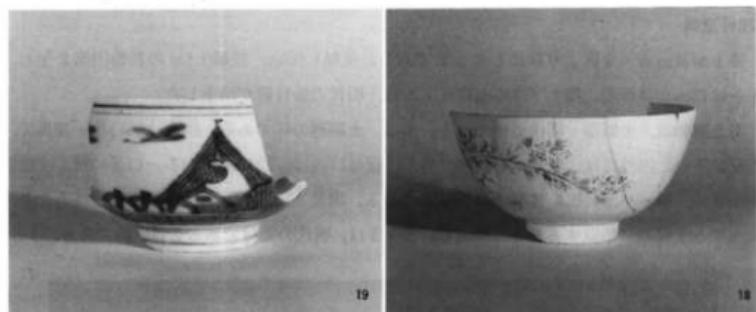


Fig. 57 447号遗物出土实物 2

## 5. 中世の遺構・遺物

第42次調査地点から中世の遺構として検出されたのは、柱穴・土塙・地下室状土塙・木棺墓・集石遺構・溝・井戸などである。時期としては、12世紀後半から、16世紀末までのものを、中世の遺構としてあつかっている。

中世の遺構にともなう遺物は、土師器・瓦器・瓦質土器・国産陶器・輸入陶磁器・石製品・鉄製品・銅製品などである。木製品は、漆器の被膜が若干出土しているのみで、ほとんど出土していない。腐朽して、残らなかつたものである。

以下、主要な遺構毎に述べていくが、その中で「磁器」・「陶器」と言う場合、特にことわからぬ限り、輸入陶磁器を指している。

### 128号遺構

第1面M—3・4区より検出した土塙である。長軸1.05m、短軸0.6mの長梢円形を呈し、深さは12cmをはかる。埋土下位の床面直上から、明代の染付碗が出土した。

出土遺物は、土師器・明代染付である。1は、土師器の坏である。胎土は灰白色・精良で、器壁は薄い。内外面は、回転ナデ調整である。復原口径は、12.0cmをはかる。口径に対して底径が小さく、ラッパ形に広く体部を持つものである。調整・形態等、周防の大内氏館跡あたりで出土する土師器に類似するタイプである。2・3は、明代の染付である2は、皿である。3は、

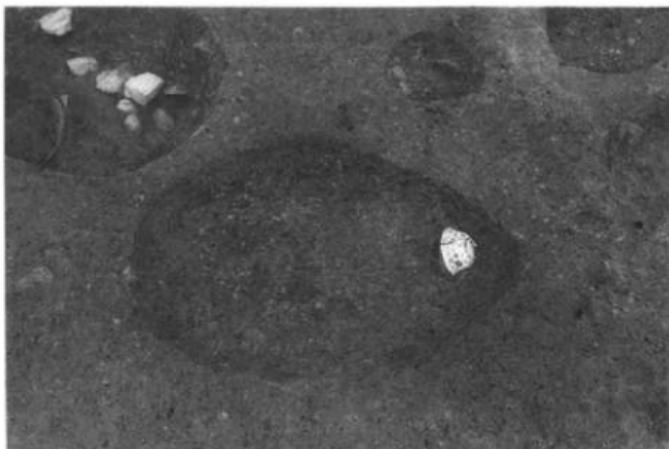


Fig. 58 128号遺構（西より）

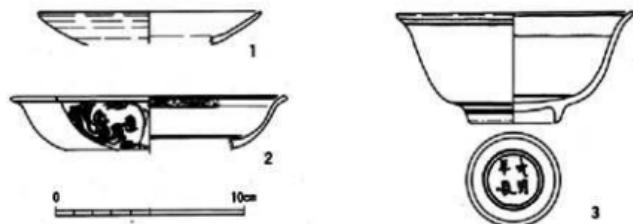


Fig. 59 128号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Fig. 60 128号遺構出土遺物

土壤床面に接して出土した碗である。口縁内面には四方捧文、見込みと体部外面には、牡丹文様を描く。外底部の高台内には、「大明年製」の銘を入れる。

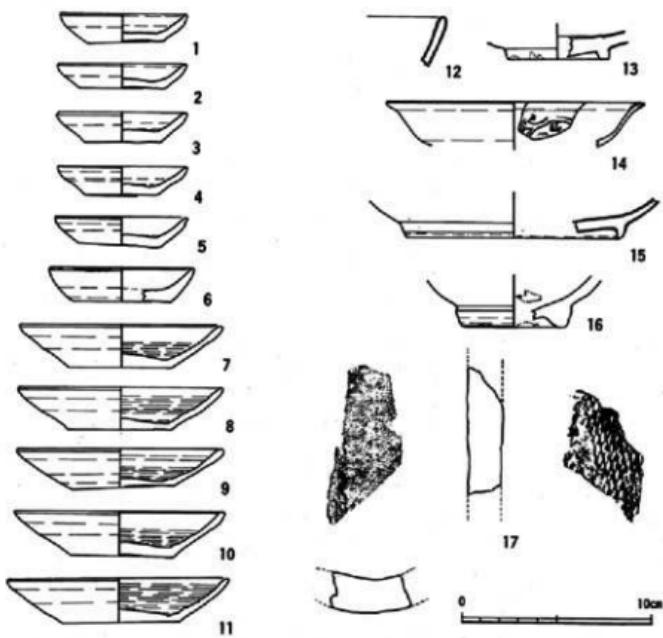


Fig. 61 253号遺構・255号遺構出土遺物実測図 (1/3)

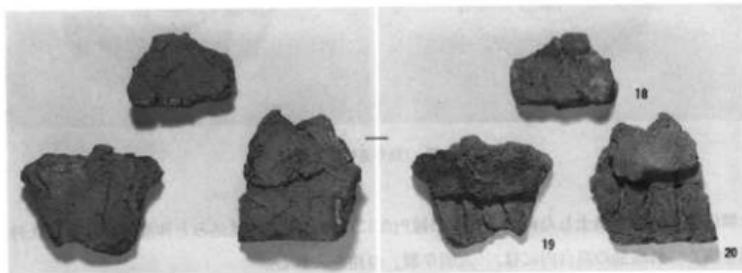


Fig. 62 253号遺構・255号遺構出土壁土

### 253号遺構・255号遺構

253号遺構は、第2面C・D-5・6区より検出した隅丸長方形の土壙である。長辺1.9m、短辺1.1m、深さ22~27cmをはかる。

255号遺構は、第2面C-4・5区より検出した、隅丸長方形の土壙である。長辺2.05m、短辺1.2m、深さ60.5~63.5cmをはかる。

両遺構は、本来は切り合い関係にある筈のものであるが、遺構検出作業段階では、両者を別の遺構として識別できず、不整長方形の单一の遺構として調査した。あらかた掘り上げてしまい、壁面の検出・土壙床面の検出を行なった段階で、長方形の土壙が2基重複していることが明らかになった。しかし、この時点では、すでに出土遺物を分別することは不可能であり、また、両遺構の前後関係を推定するのも困難であった。したがって、出土遺物については、両遺構の遺物を一緒にして報告する。ただし、出土遺物には、異なる2時期を想定する要素は認められず、近接した時期に設けられた遺構であると考えられる。

出土遺物は、土師器・青磁・白磁・李朝白磁・瓦などである。1~11は、土師器である。1~6は皿で、形態・法量を異にする2タイプがある。1~5は、外反して立ち上がった体部が、中位から内湾して口縁を作るもので、口径6.9~7.2cm、器高1.4~1.6cmをはかる。6は、厚手の体部がゆるく内湾するもので、口径7.9cm、器高1.8cmをはかる。口縁部には、煤が付着し、灯明皿として用いられたことを示す。7~11は、壺である。口径に対して底径が小さく、大きくラッパ状に開く体部を持つ。体部内面の回転ナデは、細かい幅の顎著な凹凸をなす。口径11.0~11.9cm、器高2.2~2.5cmをはかる。皿・壺とともに、外底部は回転糸切り、体部および内面は、回転ナデ調整する。板状压痕はみられない。12・13は、青磁の碗である。13は、疊付から内側を露胎とする。14・15は、白磁の皿である。14は、薄手で、内面には印花文を施す。15は、全面に施釉した後、疊付を削り、露胎とする。16は、李朝白磁である。全面に施釉する。見込みと、疊付に砂目痕がみとめられる。17は、瓦の小片である。18~20は、壁土である。小舞木とそれにまかれた繩目を、明瞭にとどめている。胎土には、刻んだ葉が歯として入れこまれている。

### 275号遺構

第2面E-2区より検出された土壙である。梢円形の土壙と思われるが、半分ほどが調査区外へ出るため、明らかではない。調査した部分から推定すれば、長軸4.3m、短軸2.5m程になろう。深さは、65cm前後である。

出土遺物は、土師器・白磁・青磁・明代染付・陶器・瓦・鉄釘・鐵滓などである。1は、土師器の皿である。底部は回転糸切り、体部および内面は回転ナデ調整する。口縁部に煤が付着

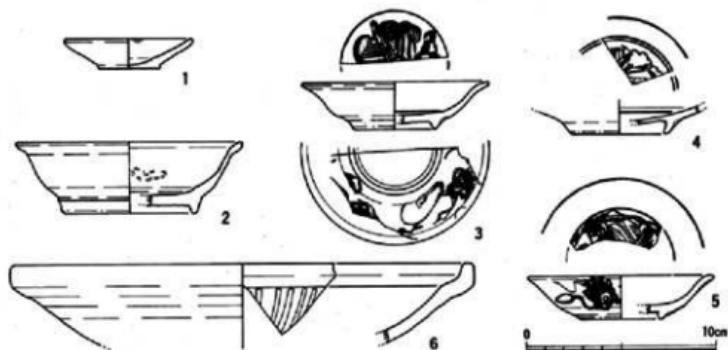


Fig. 63 275号遺構出土遺物実測図 (1/3)

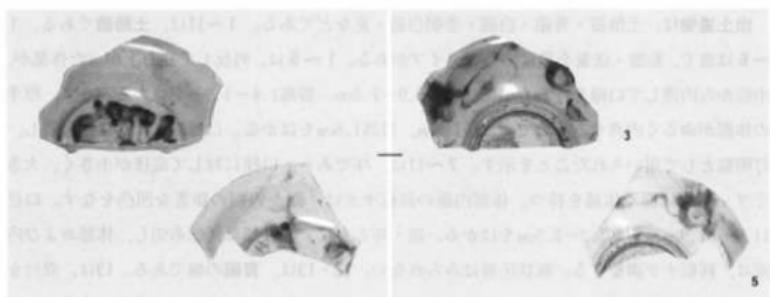


Fig. 64 275号遺構出土遺物

し、灯明皿として用いられたことを示す。口径6.8cm、器高1.6cm。2は、白磁の皿である。体部内面には、印花文がみられる。豊付から内側は、露胎となる。3～5は明代の染付である。全面施釉した後、豊付を削って、露胎とする。4の外面には、青磁釉を施している。6は、青磁の鉢である。

### 311号遺構・312号遺構

第2面、I—4～6、J—4・5区より検出した遺構である。第2面上において、縫を配したL字形の溝状遺構として311号遺構を考えた。311号遺構の内側には、灰白色粘土が広がっており（312号遺構）、この粘土と311号遺構との関係を把握する為、トレンチを入れたところ、両者は一連のもので、基壇状の遺構であることが確認された。



Fig. 65 311号・312号遺構（北より）

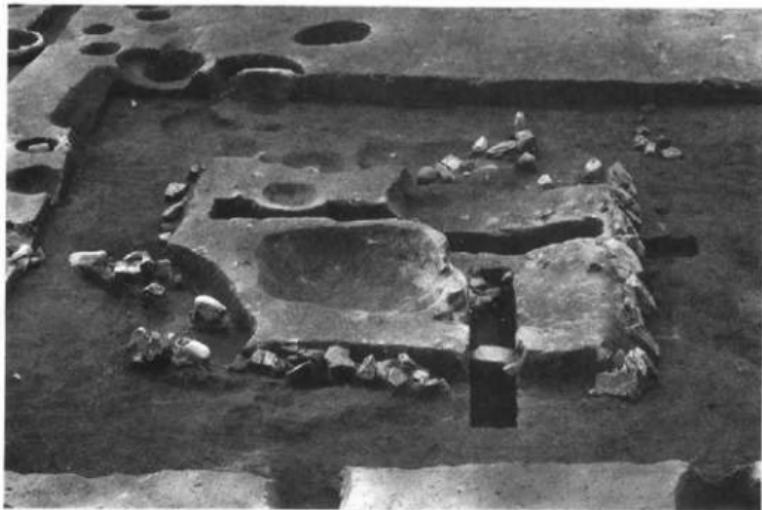


Fig. 66 311号・312号遺構（東より）

基壇状遺構は、正方形に盛られた粘土と、その各辺に置かれた貼り石とからなる。灰白色粘土は、上端 $2.5 \times 2.6$ m、下端 $2.7 \times 2.9$ m、高さ $0.25$ mのほぼ正方形、台状に敷かれている。方位は、N— $56^\circ$  Eにとる。ただし、南西辺は、第2面の遺構のため、全く残っていない。また、南東辺も、第2面上の遺構のため、一部擾乱されている。礫は、北西辺では、扁平な板石を、北東辺では小礫を、粘土傾斜面に沿って並べる。南東辺は、礫を全く可能性もある。扁

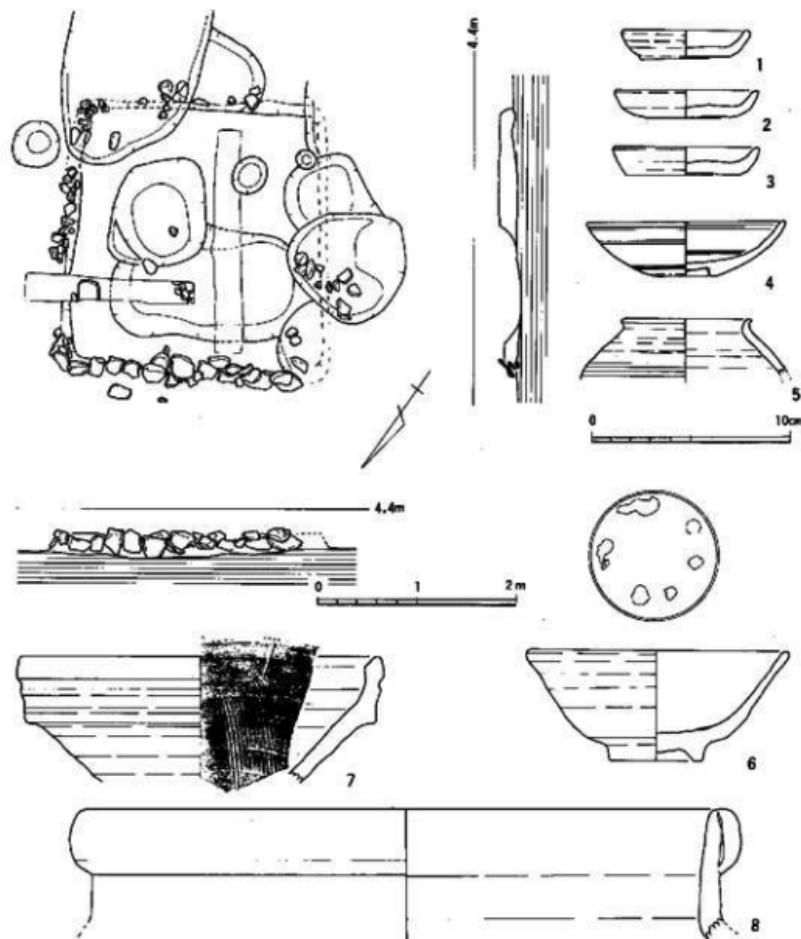


Fig. 67 311号・312号遺構実測図 (1/60) 出土遺物実測図 (1/3)

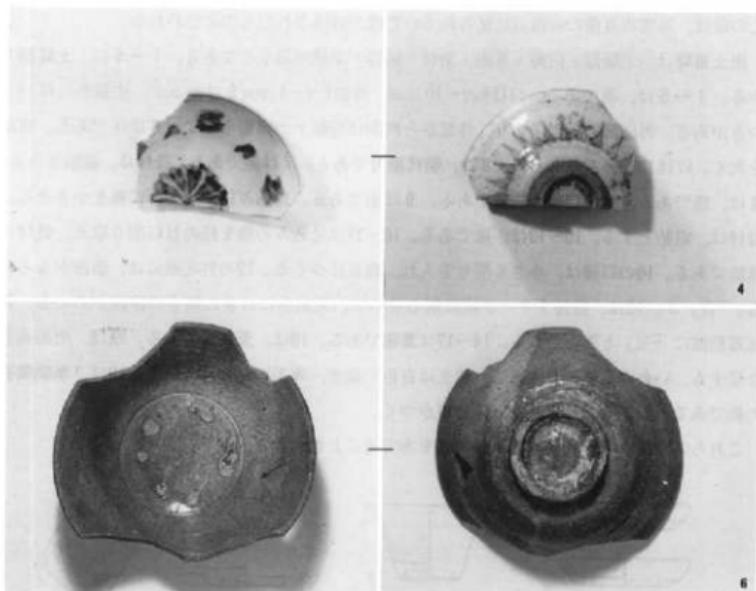


Fig. 68 312号遺構出土遺物

平な板石を重複なく配している点からみて、基壇状遺構の正面は、北西側にあると考えられる。なお、この基壇状遺構に伴う可能性のある柱穴等は、検出されなかった。

出土遺物は、土師器・青磁・白磁・明代染付・李朝陶器・備前陶器・鉄滓などである。1～3は、土師器の皿である。口径6.6～7.5cm、器高1.4cmをはかる。外底部は回転糸切り、体部は回転ナデ。内底部はナデ調整する。4は、明代の染付である。皿で、底部は基筒底につくる。墨付けは、露胎となる。5・6は、李朝の陶器である。5は盃で、肩部に白象嵌した沈線を2条めぐらす。6は碗である。見込みと疊付に、砂目痕がつく。7・8は、備前陶器である。7はすり鉢である。8は、壺である。口縁は、折り返して玉縁につくる。

これらの遺物から、16世紀代の遺構と考えられる。

### 314号遺構

第2面1—4区より検出した土壤である。長径1.25m、短径1.15mの不整円形を呈し、深さは、30cm前後をはかる。前述した基壇状遺構（311号遺構・312号遺構）の南西辺を切る遺構のうち、切り合い関係からみて、最も新しい遺構である。土壤内の北側に礫がちらばっているが、

この跡は、基壇状遺構の南西辺に貼られていた跡が破壊されたものと思われる。

出土遺物は、土師器・白磁・青磁・染付・陶器・李朝陶器などである。1～6は、土師器である。1～5は、皿である。口径6.9～10.2cm、器高1.4～1.9cmをはかるが、法量的にはバラつきがある。外底部は回転糸切り、体部から内面は回転ナデ調整を施す。6は坏である。底部を欠く。11径12.2cmである。7・8は、明代染付である。7は碗である。疊付は、露胎となる。8は、皿である。9～13は、白磁である。9は盃である。見込みは、蛇ノ目に釉をかきとる。疊付は、露胎とする。10～13は、皿である。10・11は見込みの釉を蛇の目に削り取る。疊付は露胎である。10の口縁は、小さく削りを入れ、輪花につくる。12の外底部には、墨書きがみられる。「古」か。13は、骨付をアーチ状に削るもので、見込みには重ね焼きの痕跡がのこる。外底露胎部に「正」と墨書きされる。14～17は青磁である。18は、天目片である。釉は、明茶褐色を呈する、いわゆる柿天目である。胎土は白色で緻密、薄手に作られている。19は、李朝陶器の碗である。見込みと外底部に、砂目痕がつく。

これらの遺物から、16世紀後半の時期をあてることができる。

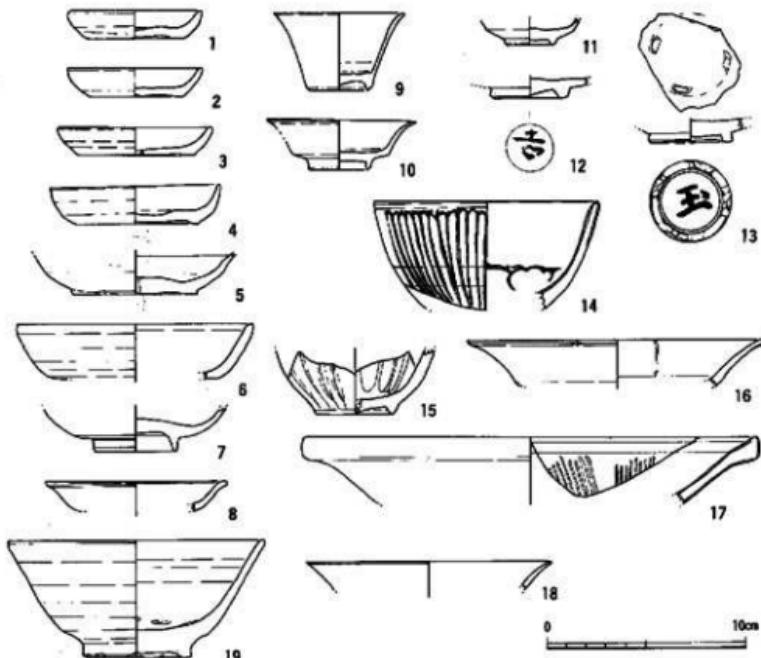
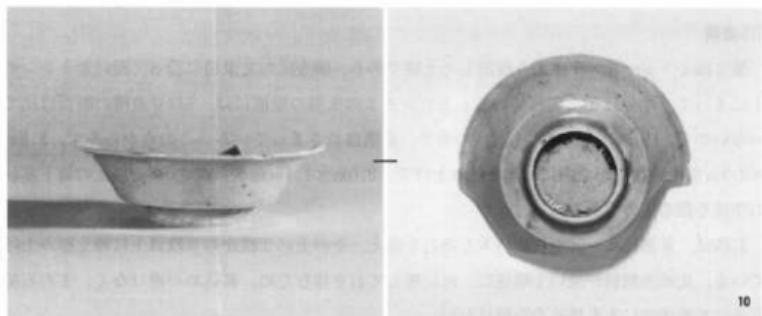


Fig. 69 314号遺構出土遺物実測図 (1/3)



8

7

19

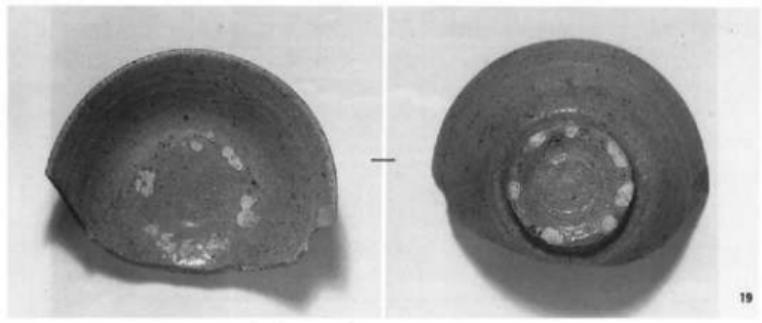


Fig. 70 314号遗構出土遺物

### 315遺構

第2面I・J—6・7区より検出した土壙である。調査区の北東辺に沿って設けたトレンチ1によって、半分ほどを失っている。トレンチ1の東側の壁面には、317号遺構の断面は出ていないので、トレンチの幅(1m)の中で、遺構はおさまっている。この点からみて、2.8m×2.3m前後の掘りかた内に、礫を積み上げて、2.0m×1.4m前後、高さ0.8m以上の地下室状の空間を作るものである。

石積は、基部に40~50cm程度の大形の石を据え、その上に2段から3段以上に礫を積み上げている。比較的傾斜が強い土壤壁に、直に接して石を積むため、裏込めの礫ではなく、また石積背後にも意図的に土を填めた跡はない。

土壙の床面は、ほぼ平らであるが、中央部分で1m×0.8m深さ8cm程の浅い凹みがみとめられる。

出土遺物は、土師器・青磁・白磁・明代染付・陶器・瀬戸天目・瓦などである。土師器を除けば小片ばかりで、実測にたえなかった。1~10は、土師器の皿である。法量からみれば、3種にわかれ。1は、ひときわ小形のもので、口径7.4cm、器高1.7cmをはかる。2は、これよりやや大きめで、口径7.5cm、器高1.7cmをはかる。3~10は、口径9.8~10.5cm、器高1.5~2.05cmで、もっとも大きい一群である。6・8の口縁部には、油煙が付着しており、灯明皿として用いられたことを示している。おおむね、16世紀代の遺構であろう。



Fig. 71 315号遺構（東より）

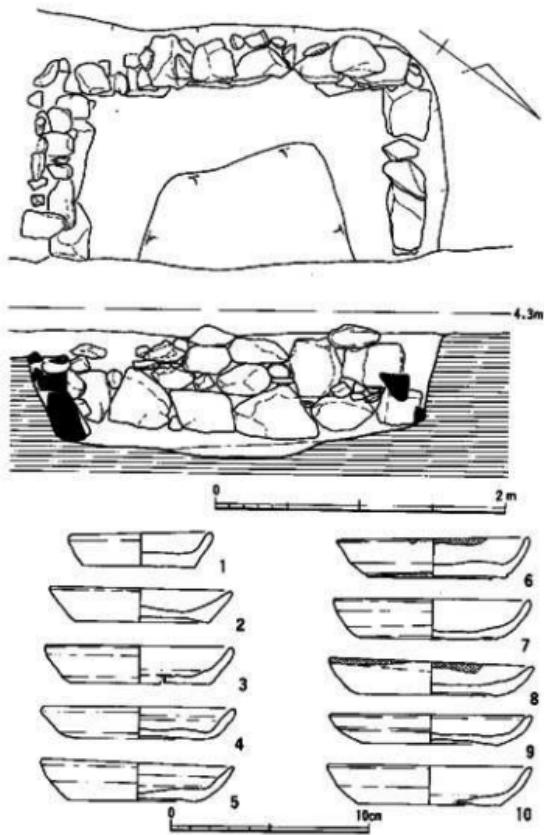


Fig. 72 315号遺構実測図 (1/40) 出土遺物実測図 (1/3)

### 318号遺構

第2面J—5区より検出した土壤である。先述した基壇状遺構の、南東辺を切る遺構のひとつである。317号遺構に切られ、半分程しか残っていない。

出土遺物は、土師器・土師質土器・青磁・白磁・明代染付・李朝陶器・備前陶器・鉄滓などである。1～7は、土師器の皿である。法量から、3種にわかれる。1～4は、小形品で、口径5.8～6.8cm、器高1.25～1.65cmである。4の口縁部は、油煙が付着しており、灯明皿として用いられたことを示している。5・6は、やや大きめのもので、口径8.4cm、8.5cm、器高1.9、1.5cmをはかる。7は、最も大きいもので、口径9.6cm、器高1.9cmである。これらは、すべて

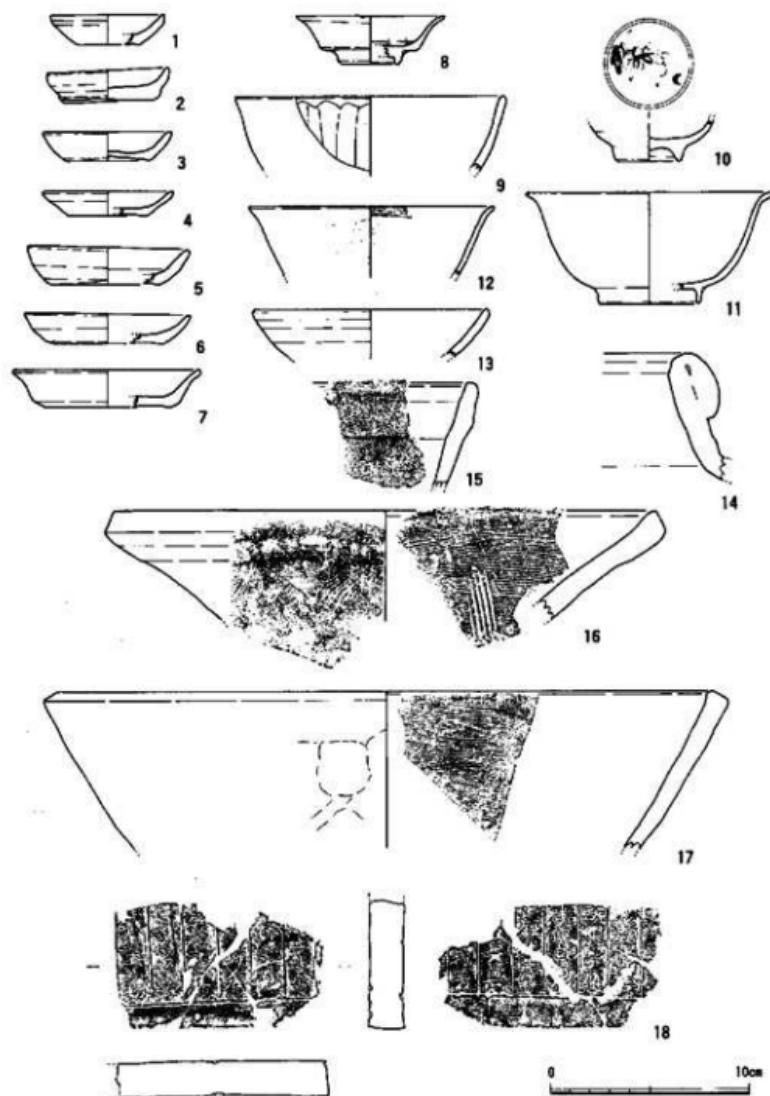


Fig. 73 318号遺擲出土遺物実測図 (1/3)

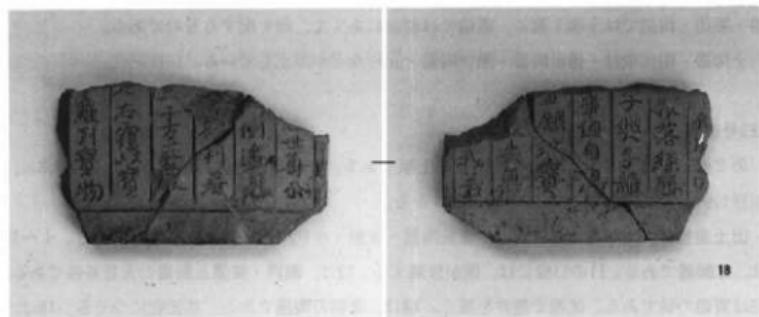
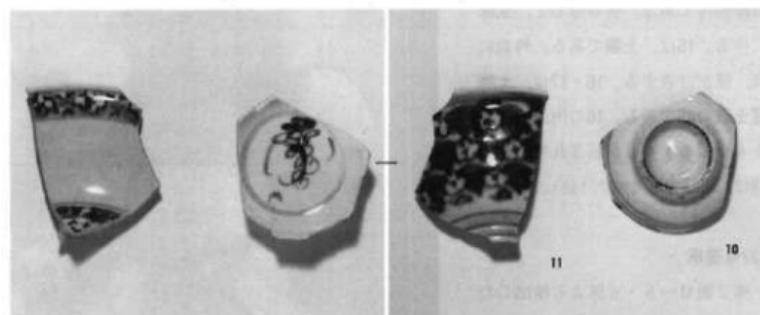
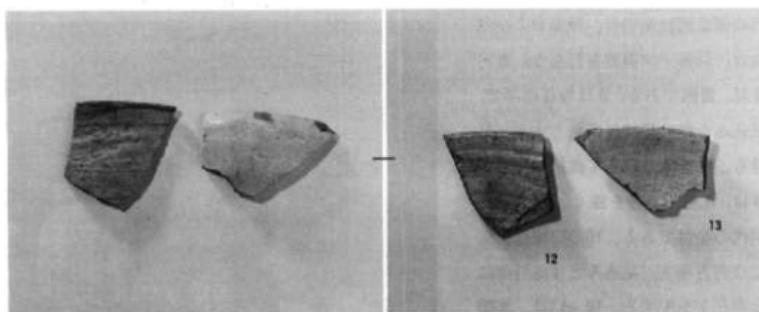


Fig. 74 318号遺構出土遺物

外底部を回転糸切り、体部および内面は、回転ナデ調整を行なう。8・9は、青磁である。8は輪花の坏で、見込みを蛇の目状に露胎とする。豊付も、脚を削り取って露胎とする。9は、沈線で蓮弁を描く。10・11は、明代の染付である。10の口縁部内面には四方捺文、見込みと体部外面には梅花文を配する。12・13は、李朝の粉青沙器である。14は備前陶器の口縁部片である。折り返して、玉縁に作る。15は、土鍋である。外面には、煤が付着する。16・17は、土師質土器の鉢である。16の内面には、5本単位のすり目が刻まれている。18は、瓦経である（P. 148）。

#### 422号遺構

第2面M—5・6区より検出した土壤である。長辺1.3m、短辺0.5～0.7m、深さ35cm前後の土壤の、北辺・東辺・南辺では土壤上端に、西辺では壁面にあてて、疊を配するものである。土師器・明代染付・備前陶器・瀬戸陶器・瓦片などが出土している。16世紀代。



Fig. 75 422号遺構（東より）

#### 423号遺構

第2面L・M—6・7区より検出した土壤である。一部は調査区外に出るが、長径2.3m、短辺1.9mの楕円形で、深さ92～98cmをはかる。

出土遺物は、土師器・瀬戸陶器・備前陶器・青磁・李朝陶器・タイ陶器などである。1～10は、土師器である。11の口縁には、煤が付着する。12は、瀬戸・美濃系陶器の天目茶碗である。13は青磁の碗である。沈線で蓮弁を描く。14は、李朝の陶器である。基筒底につくる。16は、備前陶器のすり鉢である。16は、タイ陶器である。無釉の焼き締め陶器である。底部を半球状につくる蓋で、中央には宝珠形の高いつまみがつく。胎土は粗く、明褐色を呈する。

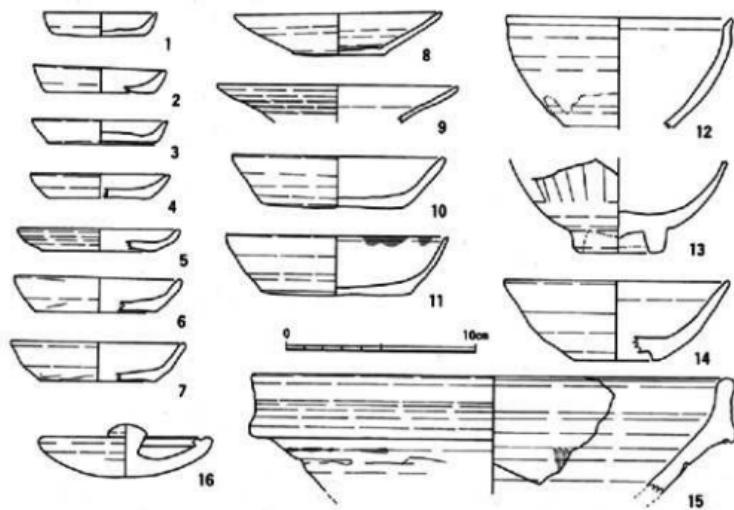


Fig. 76 423号遺構出土遺物実測図 (1/3)

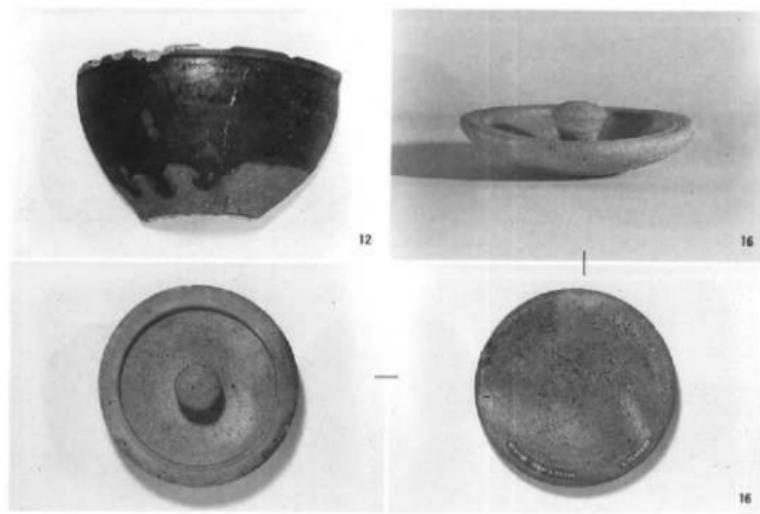


Fig. 77 423号遺構出土遺物

#### 424号遺構

第2面M・N—6・7区より検出した土器である。2.2×1.8mの隅丸長方形を呈し、床面は二段掘り状となり、深さ65cm、90~102cmをはかる。

出土遺物は、1~29…土師器、30・31…土鍋、32…瓦質土器、33…白磁、34~36…青磁、37~38…明代染付、39~45…李朝陶器、46~51…ルツボである。土師器の皿は、形態・法量から4タイプにわかれれる。1~4は小形品で、口径6.25~6.6cm、器高1.4~1.6cmをはかる。3・4の口縁部には、煤が付着する。5・6・8~16は、中形品で、口径7.0~8.1cm、器高1.1~1.8cmである。14の口縁部には、煤が付着する。7は、ひときわ器高が高いもので、口径7.2cm、器高2.0cmである。17は大形で、むしろ壊の小形品とすべきか。口径10.0cm、器高5.4cmをはかる。

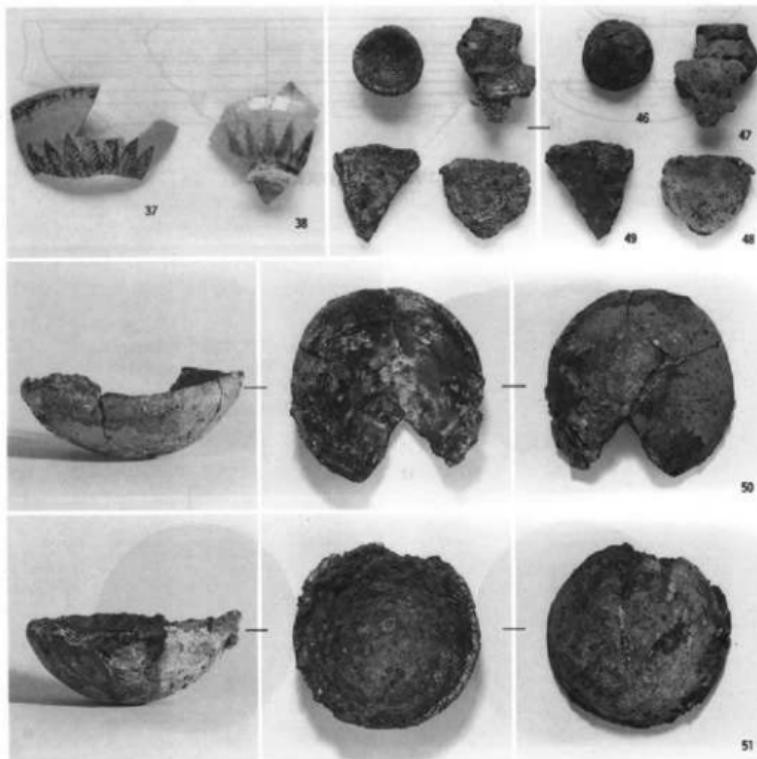


Fig. 78 424号遺構出土遺物

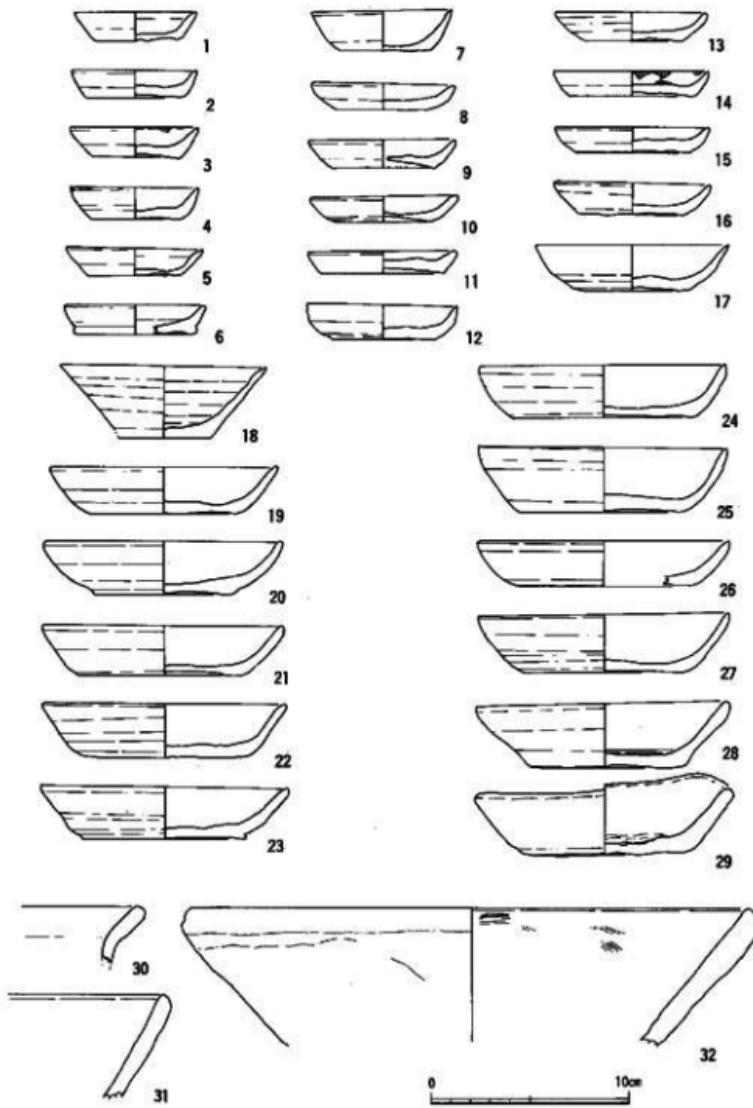


Fig. 79 424号遺構出土遺物 1 (1/3)

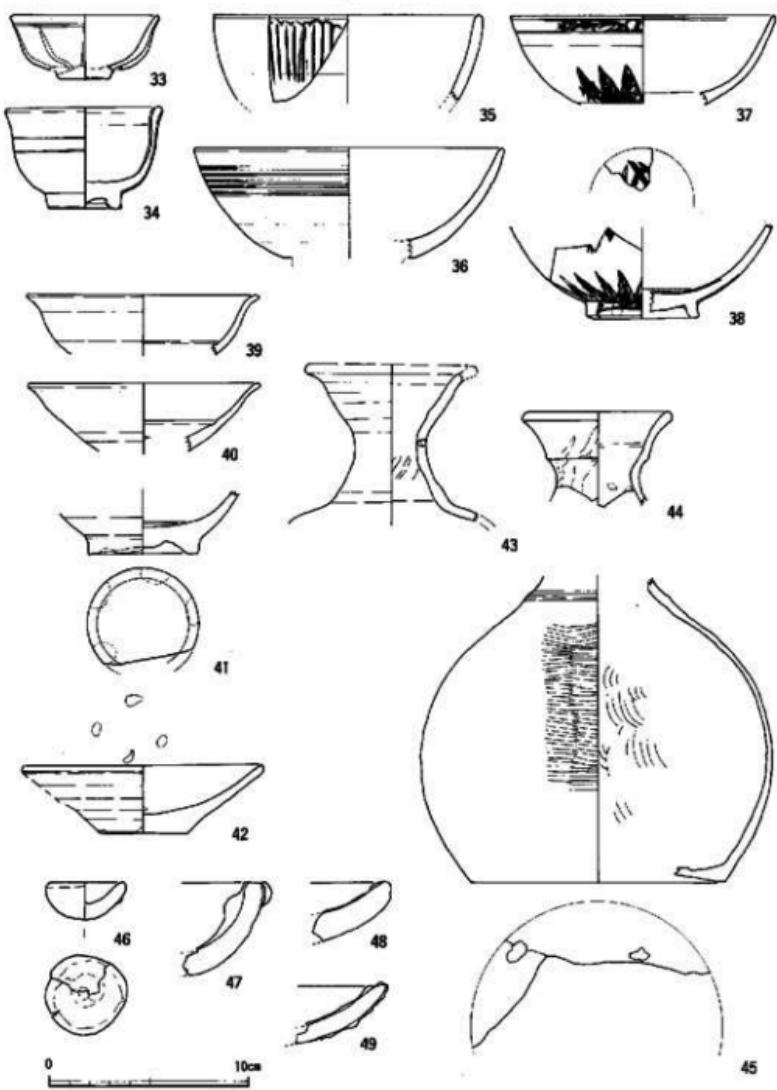


Fig. 80 424号道情出土遗物实测图 2 (1/3)



Fig. 81 424号遺構出土銅錢 (1/1)

すべて外底部は回転糸切り、体部・内底部は回転ナデ調整するが、3・13は、内底部にナデ調整を施す。坏は、形態を異にする2タイプがみられる。18は、小さい底部から体部がラッパ状に開くもので、器高も高い。口径10.6cm、底径4.8cm、器高3.65cmをはかる。体部に施された回転ナデは、こまかい凹凸を作っている。19～29は、口径11.8～13.5cm、器高2.3～3.25cmをはかる。いずれも、外底部は回転糸切り、体部・内底部は回転ナデ調整するが、22・23には、内底部にナデ調整がみられる。33の白磁小碗は、型造りで、縦位の隆起線をつくり出している。34の青磁小碗は、体部に2条の沈線をめぐらす。豊付から高台内側は、露胎である。41の豊付、42の見込みと外底部には、砂目痕が並ぶ。46～51のルツボ片には、銅滓および溶解した銅が、厚く付着している。51は完形品である。口縁の一部を、U字形に削り、片口に作る。土師質の塊形土器であるが、熱によってかたく焼きしまる。胎土には、刻み薙が、苟として入れられている。その他、Fig. 81に示した銅錢が出土している。



Fig. 82 511号遺構 (北より)

### 511号遺構

第2面T・U—5区より検出した土壙である。長径1.55m、短径1.0mの梢円形を呈し、深さは、58cmをはかる。

土壙の南東部の壙底から壁面にかけて、青磁香炉（11個）が出土した。香炉がすべて同一タイプであり、完形品である点、11個の内7個が入れ子の状態で重ねられていた点などから見て、廃棄されたものとは、考えがたい。意図的に納置されたものであろう。

出土遺物は、上述した青磁香炉の他、土師器・陶器・備前陶器などである。1・2は、土師器である。法量は、それぞれ、口径7.2cm、12.6cm、器高1.3cm、2.6cmをはかる。底部は、回転糸切りである。3は、青磁である。其筒底の皿である。4～14（Fig. 85・86）は、土壙床面から出土した青磁香炉である。小形・中形・大形品、体部中位に沈線を入れるだけのものと、中位を筋状に隆起させ、その上に沈線を持つもの、底部のアーチ状高台に刻みを入れるものと入れないもの、といった小差はあるが、法量的にも形態的にも顕著な差ではなく、同一タイプと言ってよからう。釉は、黄緑色の透明釉で、体部内面上半から体部外面にかけて、たっぷり

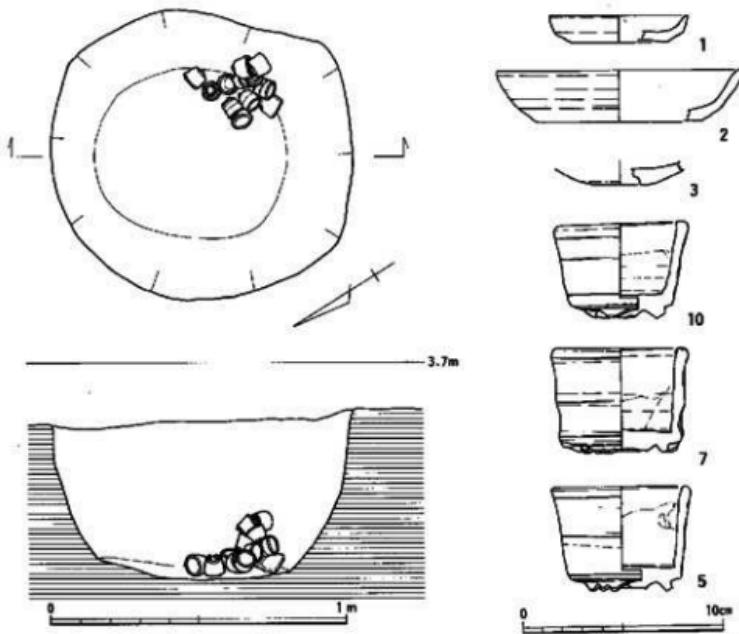


Fig. 83 511号遺構実測図（1/20）出土遺物実測図（1/3）



Fig. 84 511号造構造物出土状況



Fig. 85 511号造構出土遺物 1

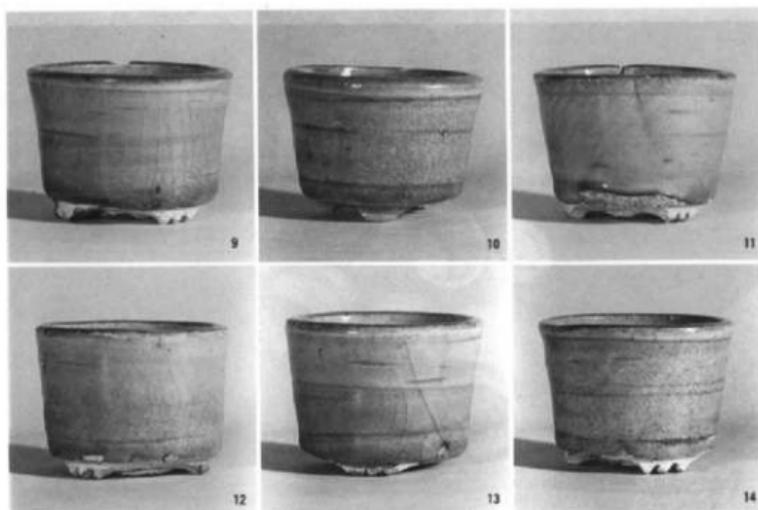


Fig. 86 511号道構出土遺物 2



Fig. 87 517号道構（西より）

と施される。外底部は露胎である。中央部を丸く削り残して高台とし、その外側に、アーチ形に抉り込んだ脚を削り出す。口径は、6.5~7.3cm、高台径4.4~5.1cm、器高4.7~5.6cmをはかる。

### 517号遺構

第2面V—4区より検出された土壙である。掘りかたは、明瞭に検出しえなかつたが、長辺1.6m、短辺1.3mの長方形の土壙と推測され、深さは62~68mをはかる。掘りかたの内側には、3辺に礫を積み上げ、他の1辺には板材をあてて、約1.2×0.85mの枠形をつくり出す。北西壁の板材は、内側に杭を打って押さえている。板材の背面には、土壙底部に、礫が2段積まれている。一方、北西辺の上部には、板材と掘りかたの間の埋土上に礫が配されており、板壁を

立てた段階では、板壁の背面は埋めたものと思われる。おそらく、本来はこの壁も石積によるものであり、その後、石積を抜き取ったのち、石積の基部に乗せる様な形で板材を立てて壁にしたものであろう。

出土遺物は、Fig. 89-1~5…土師器、6…李朝陶器、7…中国陶器、8…備前陶器、9…瓦質土器、10~12…土鍋、13…褐釉陶器である。土師器には、厚手の体部が内湾気味に立ち上るもの(1・3・4)と、薄手で、ラッパ状に開くもの(2・5)とがある。とりわけ、2は、白色の精良な胎土で、体部の回転ナデ痕も強く細かい凹凸をつくる。搬入土器であろう。6は、白釉をかける。10~12の外面には、

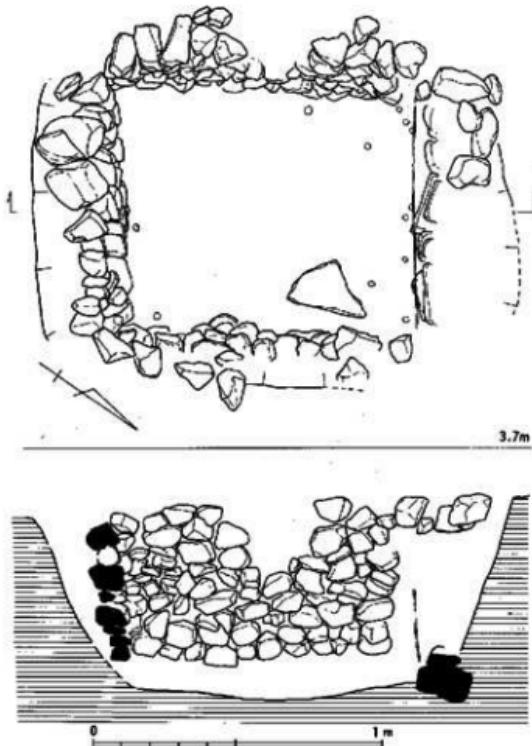


Fig. 88 517号遺構実測図 (1/20)

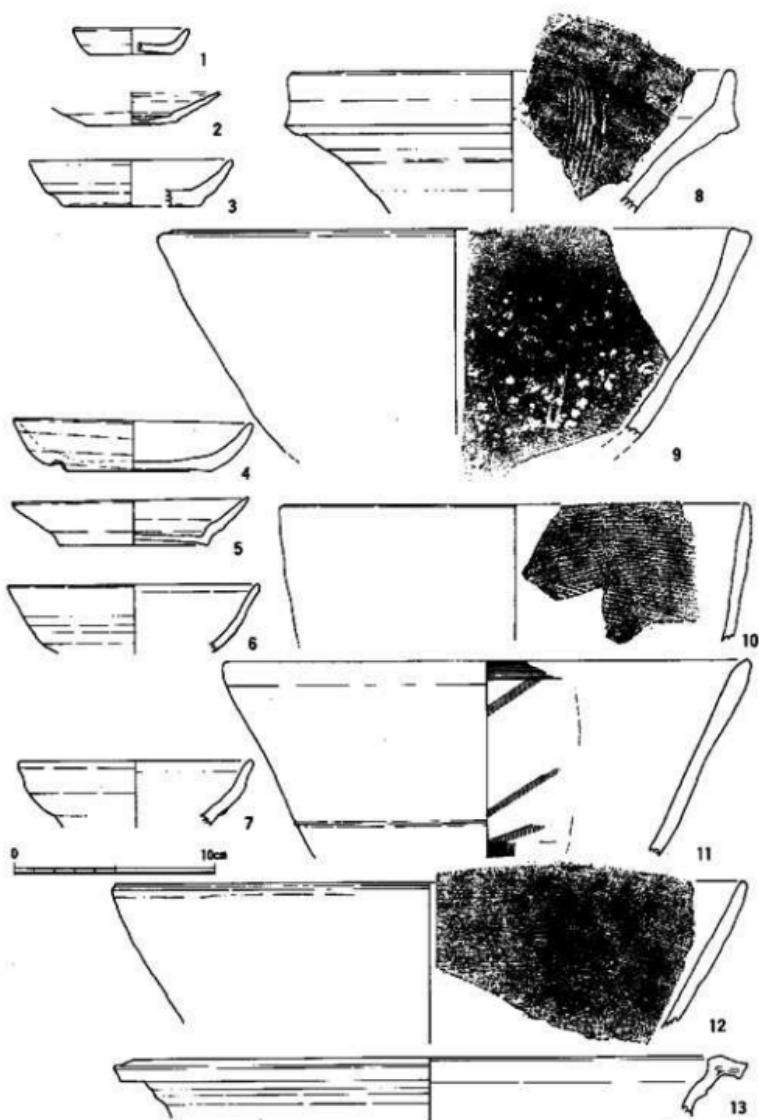


Fig. 89 517号道橋出土: 遺物実測図 (1/3)

煤が付着している。

出土遺物から見て、15世紀代の遺構であろう。

#### 534号遺構

第3面B—6区より検出した土壙である。長軸1.6m、短軸1.2mの不整梢円形を呈し、深さは、26~33cmをはかる。径25~30cm程の礫が、数個落ちこんでいた。

出土遺物は、土師器・白磁・青磁・青釉陶器・天目などである。1~6は、土師器である。1~3は皿で、口径7.4~7.8cm、器高1.3~1.4cmをはかる。外底は回転糸切りで板目压痕がつき、内底にはナデ調整がなされる。4~6は壺である。4・5は、口径12.6、13.5cm、器高2.2、2.5cmをはかる。6は、口径18.2cm、器高3.3cmをはかり、ひときわ大きい。底部は、回転糸切

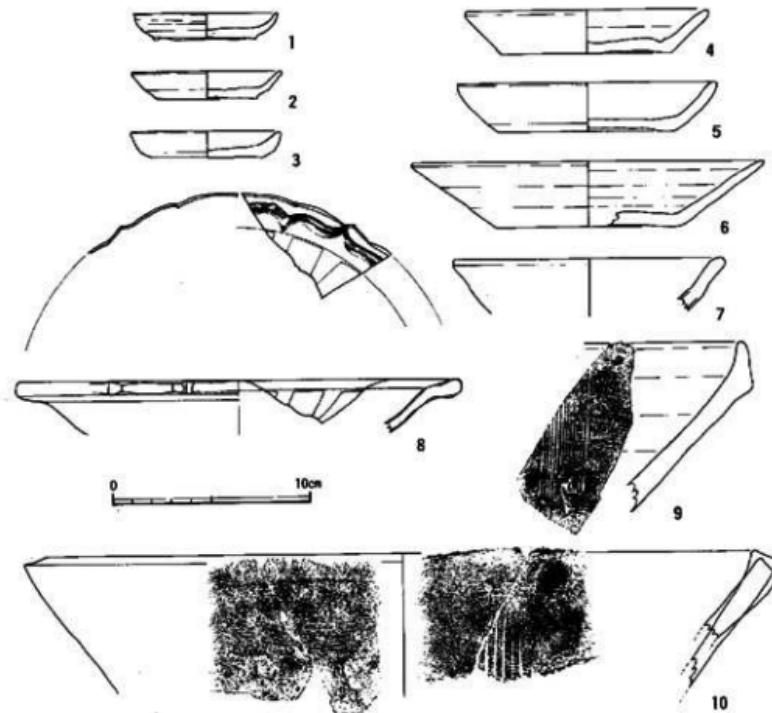


Fig. 90 534号遺構出土遺物実測図 (1/3)

りする。4には、板目压痕と内底部のナデ調整がみられる。7・8は、青磁である。龍泉窯系。9は、備前陶器のすり鉢である。内面の下半は、使用のため磨滅している。10は、瓦質土器のすり鉢である。

534号遺構の年代は、出土遺物からみて、15世紀代にあてるのが妥当であろう。

#### 573号遺構・575号遺構・596号遺構・680号遺構

第3面E—3—5, F—5, G—2—4, H—4, I・J—3・4区より検出した集石列である。溝状の掘りかたに礫を充填したもので、建物の基礎にあたると考えられる。573号遺構と575号遺構は、L字形の集石を、596号遺構・680号遺構は、コ字形（調査区外に出るため、方形に巡る可能性もある）の集石を形作る。L字形列石は、 $3.7 \times 3.7$ mで、幅50~60cmをはかる。コ字形列石は、 $6 \times 4.3$ m以上で、幅50~70cmをはかる。両者の間に、前後関係、切り合い関係があるかどうかは、確認できなかった。両遺構ともに、N—37°—Wをとる。

礫にまじって、土師器・瓦質土器・青磁・白磁・天目・陶器などの小片が出土しているが、これらからみて、15世紀代の遺構と考えられる。

#### 633号遺構

第3面G・H—6区より検出した土壌である。一部を、644号遺構に切られる。長径1.6m前後、短径1.25mの楕円形を呈し、深さ20cm前後をはかる。



Fig. 91 573号遺構石列断面（南より）



Fig. 92 573号・575号・596号遺構（東より）



Fig. 93 575号・596号遺構（西より）

出土遺物は、土師器・瓦質土器・青磁・陶器・李朝陶器・石製品などである。1～9は、土師器である。1～6は皿である。1・2・4～6は、口徑7.9～9.0cm、器高1.2～1.6cmをはかる。外底部は回転糸切りで、2を除いて内底部をナデ調整し、外底部に板目圧痕がつく。3は、器高が高いもので、口徑8.2cm、器高2.1cmをはかる。底部は回転糸切りで、内底部にナデ調整を行なわない。7～9は壺である。7・8の体部は、ゆるく内湾する。口徑12.1、12.8cm、器高2.6、2.5cmをはかる。9は、直線的に開く体部を持つ。口径13.0cm、器高2.2cmである。底部は、

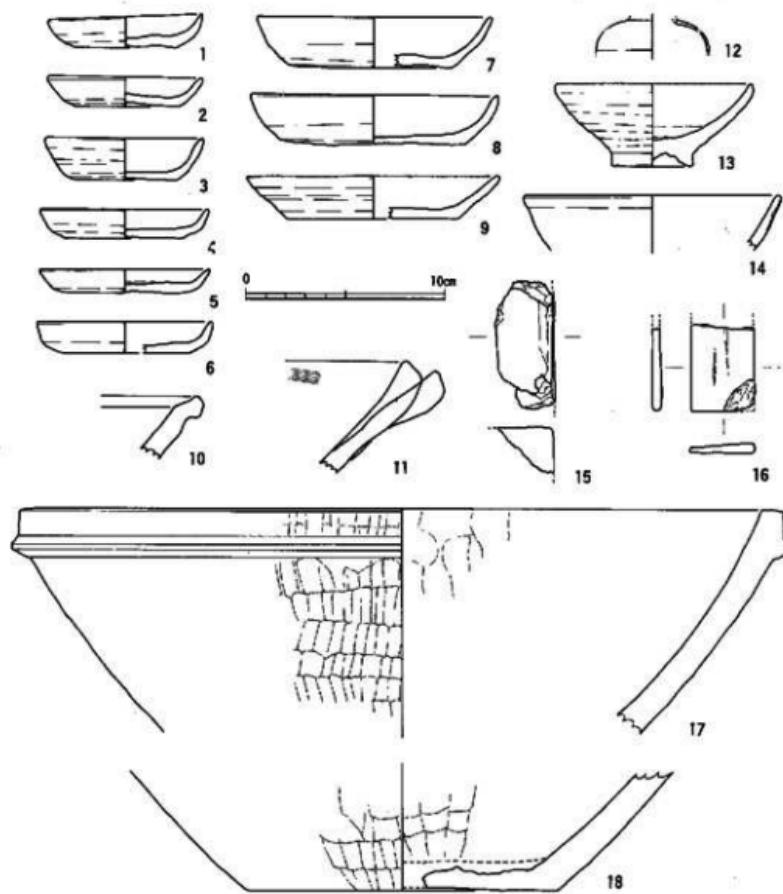


Fig. 94 633号遺構出土遺物実測図 (1/3)

回転糸切り、8は内底部をナデ調整し、外底に板目圧痕がつく。10は、瓦質土器の鉢である。11は土師質土器の鉢で、内面の下端部分は、使用のため磨滅する。12は、褐釉陶器の茶入である。13は李朝陶器の碗である。灰色釉をかける。見込みは、蛇の目状に釉をかきとる。13は、青磁の碗である。15・16は、砥石である。粘板岩製。17・18は、石鍋である。滑石製。17の内面は、丁寧に削りこんでおり、平滑になっている。18の外底部は、煤と火熱のため、黒変している。

#### 701号遺構

第3面P—6区より検出した土壙である。長軸1.3m、短軸1.1mの卵形を呈し、深さは、35～38cmをはかる。

出土遺物は、土師器・青磁・天目などである。1～10は、土師器である。1～4は、皿である。口径6.9～7.3cm、器高1.25～1.9cmをはかる。外底部は、回転糸切りする。体部および内面は、回転ナデ調整される。5～10は、壺である。5・7・8は、比較的薄手の体部が、やや外反気味に開く。口径12.0～12.5cm、器高2.3～2.5cmをはかる。6・9・10は、厚手の体部が、内湾気味に立ち上がるるものである。口径12.0～12.9cm、器高2.0～2.3cmである。壺はすべて、外底部を回転糸切りし、体部および内面は回転ナデ調整する。なお、5・9の口縁部には、油煙が付着しており、灯明皿として用いられたことを、示している。11は、青磁の碗である。口縁部は、端反りにつくる。12は、天目茶碗である。暗褐色の釉をかける。体部外面の下位から外底部は、露胎である。13は、土師質土器の鉢である。片口につくる。体部内面は、横位の刷毛目調整、口縁部外面は、横ナデ調整する。口縁部外面の屈曲部から下には、指頭圧痕がならぶ。

これらの出土遺物から、15世紀前後の時期が推定できよう。

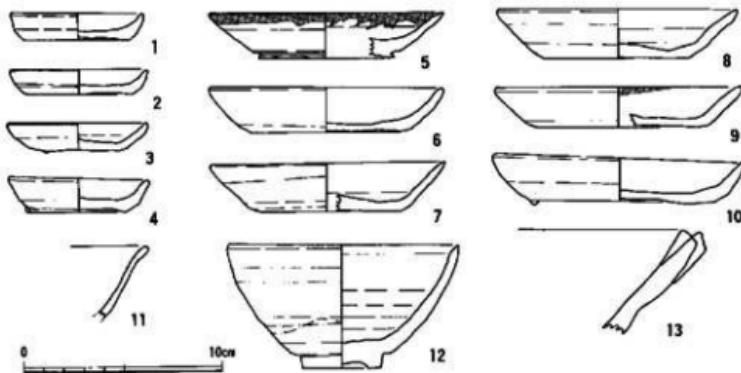


Fig. 95 701号遺構出土遺物実測図 (1/3)

### 709号遺構

第3面R—5区で検出した土壌である。径約210cm、深さ約55cmのほぼ円形を呈する土壌で、床面には礫が10数個ころがっていた。

出土遺物は、土師器・青磁・白磁・褐釉陶器・天目・瓦質土器などである。1～15は、土師器である。1～11は皿である。汎量的には、11径7.2～9.0cm、器高1.1～1.6cmと、ばらつきがあるが、口径8.2～8.6cmのものが最も多い（4～10）。底部は、すべて回転糸切りを行なう。体部および内面は、回転ナデ調整するが、8と10にのみ内底部のナデ調整がみられる。12～15は壺である。比較的底径が小さく体部が開き気味にのびる12・13と、体部が急角度で立ち上る14・15の2タイプがある。口径11.3～13.5cm、器高2.35～3.0cmをはかる。底部は、すべて回転糸切りし、体部および内面には回転ナデを施す。16は、褐釉陶器の茶入である。外底部には、回転糸切り痕がみられる。17は、黒褐色釉を施した天目茶碗である。18・19は、白磁である。19は、いわゆるビロースクタイプに該当する皿であろう。20～22は、青磁である。21は、全面施釉した後、外底の高台内側を蛇ノ目状に釉をかきとる。22は、疊付のみ露胎となる。23は、瓦質土器の火舍である。24～27は、土師質土器の鉢である。27には、スリ目がつけられていない

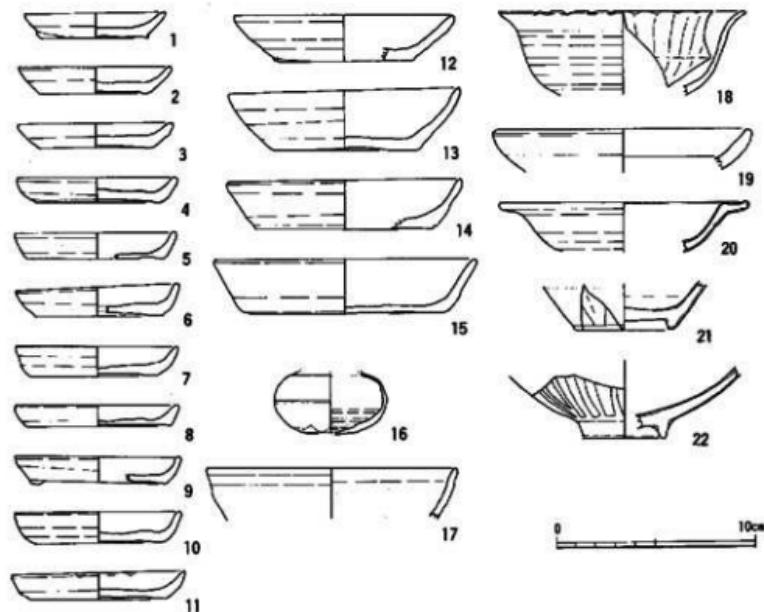


Fig. 96 709号遺構出土遺物実測図1 (1/3)

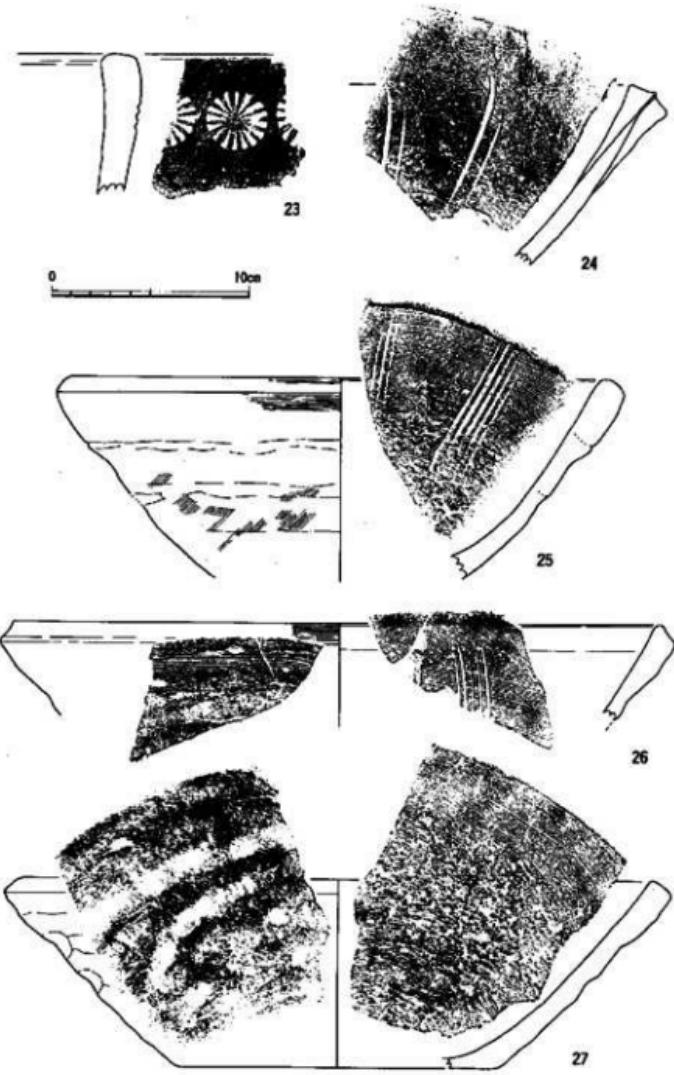


Fig. 97 709号墓出土遺物実測図 2 (1/3)

い。いずれも、内底部近くは使用のため磨滅している。

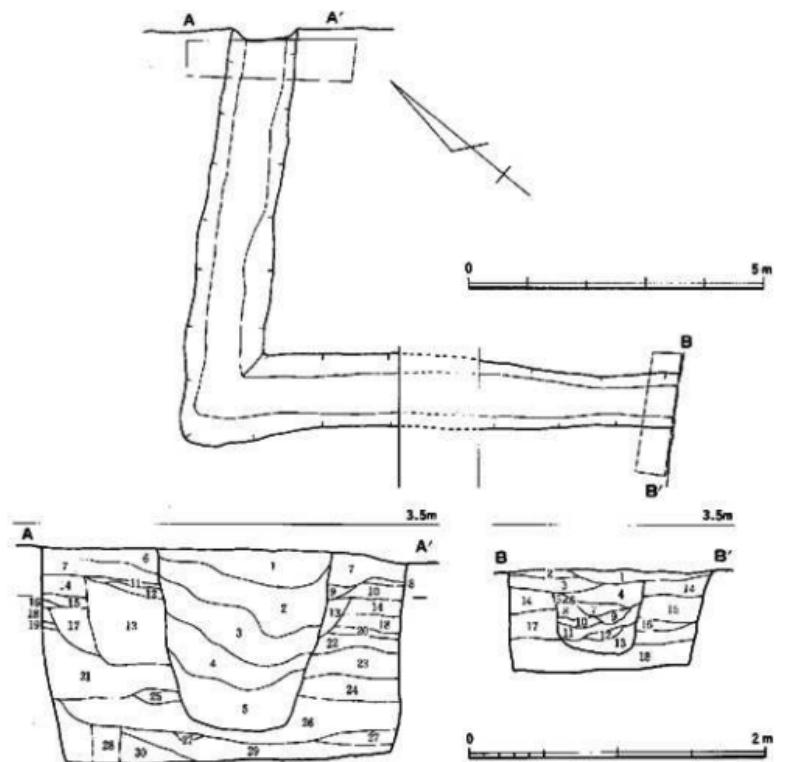
### 735号遺構

第3面、U—4—6、V—4—7、W・X・Y—4区で検出した溝である。丁度、鍵の手に折れまがった角部分を調査している。調査区東壁付近で、幅1.15m、深さ1.4m、屈折部で幅1.3m、深さ1.0m、調査区南壁付近で、幅0.6m、深さ0.5mをはかる。それぞれで溝床の標高をとると2.1m、2.2m、2.65mと、東壁側から屈折部をへて南壁側へと、次第に浅くなっている。しかし、土層断面の観察からは、この溝底を水が流れたという形跡は、みとめられなかつた。

屈折部分は、約84°をはかり、やや鈍角に曲がっている。この角部分が、何らかの地割の隅にあたることは明白で、双方の溝が角をなし、直線的に抜けていないことを考えれば、屋敷地の周囲に掘られた溝とするのが妥当であろう。しかし、第3面遺構全体図(Fig. 9)をみれば、この溝の外側に、道路等を推定するのは不可能である。本来の溝の掘り込みのレベルは、調査区東壁面でみると、標高3.5~6mのところにあり、第3面よりもやや上位から掘られたものである。それにしても、第2面においても道路と考えられる要素はなく、735号遺構の外に道路を想定するのは、やはり無理であろう。この点からすれば、屋敷地をめぐる溝とするには、若干難があるとせざるをえない。ここでは、ひとつの可能性として、溝の北側は屋敷地が連続しており、西側はやや間をおいて道路に面していた(調査区外)ものと考えたい。



Fig. 9b 735号遺構（北西より）



- |                |                           |                  |                      |
|----------------|---------------------------|------------------|----------------------|
| 1. 明褐色土、炭まじり   | 16. 灰色砂                   | 1. 底褐色土、<br>炭まじり | 14. 明灰色砂質土、<br>やや粘性有 |
| 2. 極褐色土、炭まじり   | 17. 灰色土、砂粒まじり             | 2. 灰色土、炭まじり      | 15. 暗灰色砂質土           |
| 3. 褐色土、炭まじり    | 18. 暗灰色土                  | 3. 底褐色土、<br>炭まじり | 16. 灰色土              |
| 灰色粘質土、粒まじり     | 19. 灰白色砂                  | 4. 底褐色土、炭まじり     | 17. 底褐色土、<br>やや粘性有   |
| 4. 暗褐色土、炭まじり   | 20. 赤茶色焼土                 | 5. 底褐色土          | 18. 暗灰色土             |
| 5. 暗褐色土        | 21. 黑灰色砂質土                | 6. 底褐色土          |                      |
| 6. 明褐色土        | 22. 灰色土、炭まじり              | 7. 底褐色土          |                      |
| 7. 極褐色土        | 23. 混褐色燒土、炭・壁土・<br>粘土粒まじり | 8. 底褐色土          |                      |
| 8. 灰色砂         | 24. 灰色土、炭まじり              | 9. 底褐色土          |                      |
| 9. 極褐色土        | 25. 黄褐色砂質土                | 10. 底褐色土         |                      |
| 10. 明灰黄褐色土、粘性有 | 26. 黑灰色砂質土                | 11. 灰色土          |                      |
| 11. 灰色土、砂まじり   | 27. 赤褐色燒土                 | 12. 灰色土、粘質       |                      |
| 12. 明灰黄褐色土     | 28. 黑色土、やや砂質              | 13. 底褐色土         |                      |
| 13. 底褐色土       | 29. 混灰色砂                  | 14. 暗灰色土         |                      |
| 14. 暗灰色土       | 30. 淡黄色砂、地山               | 15. 黄灰色砂         |                      |

Fig. 99 735号造橋火測図 (1/100) 土層断面図 (1/40)

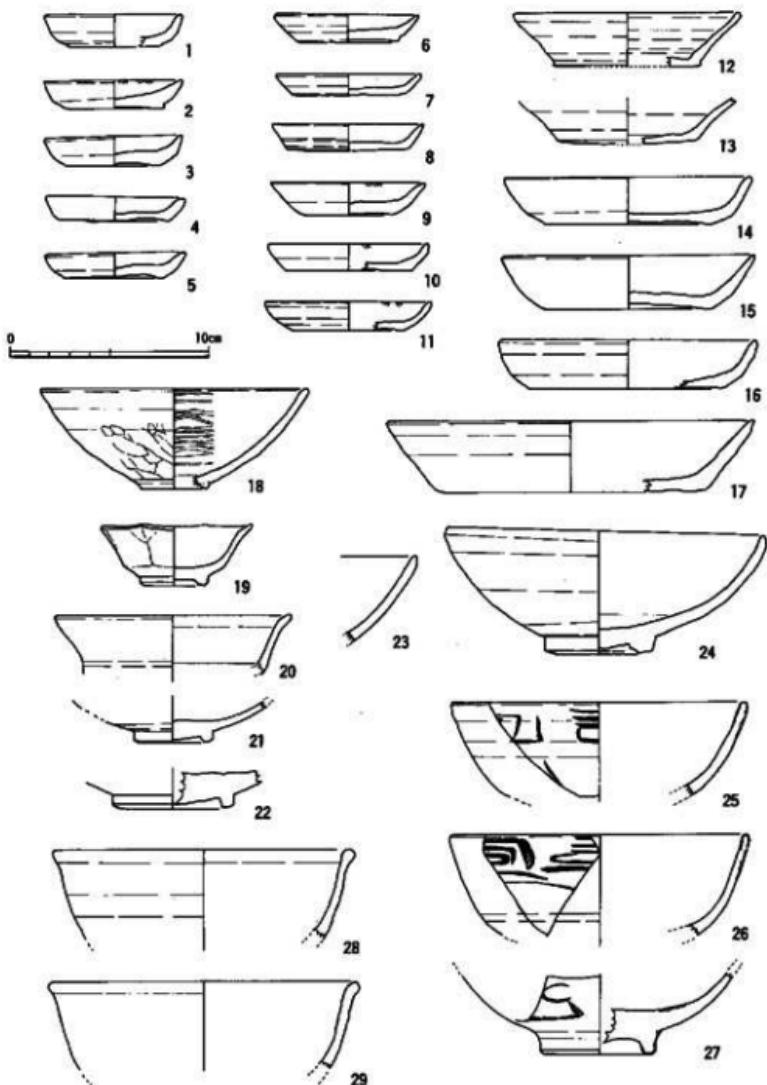


Fig. 100 735号遣拂出土遺物実測図 1 (1/3)

出土遺物は、土師器・瓦器・土師質土器・瓦質土器・瀬戸陶器・備前陶器・中国製青磁・白磁・陶器・李朝陶器・石製品・銅錢等である。1～17は、土師器である。1～11は皿で、口径7.0～8.6cm、器高1.1～1.65cmをはかる。外底部は、回転糸切りで切り離す。体部と内面は、回転ナデによって調整するが、7・8には、内底部にナデ調整を施している。なお、2・9～11の口縁部分には、油煙が付着しており、灯火器として使用されたことを示す。12～17は、壺である。形態・法量から、3タイプにわけられる。12・13は、扁平な底部から外反気味に体部が立ち上り、やや内湾して口縁をおさめるもので、外底は回転糸切りに板目圧痕がつき、体部は回転ナデ、内底部はナデ調整を施す。12は、口径11.7cm、器高2.7cmをはかる。全体的に器肉が薄く、均一である。14～16は、やや肉厚で、丸味を持っている。外底は回転糸切り、体部および内面は回転ヨコナデするが、16の内底部にはナデ調整が施されている。口径12.7～13.3cm、器高2.4～2.7cmをはかる。17は、ひときわ大きいもので、口径18.9cm、器高3.6cmをはかる。外底部は回転糸切り、体部は回転ナデ調整する。次に述べる瓦器壺とともに、前代の遺物が混入した可能性を考えたい。18は瓦器の壺である。高台は、小さめで断面三角形を呈する。内面には、細くするどいヘラミガキが施される。嵌入品であろう。前代の遺物が混入した



19



68



24

Fig. 101 735号遺構出土遺物 1

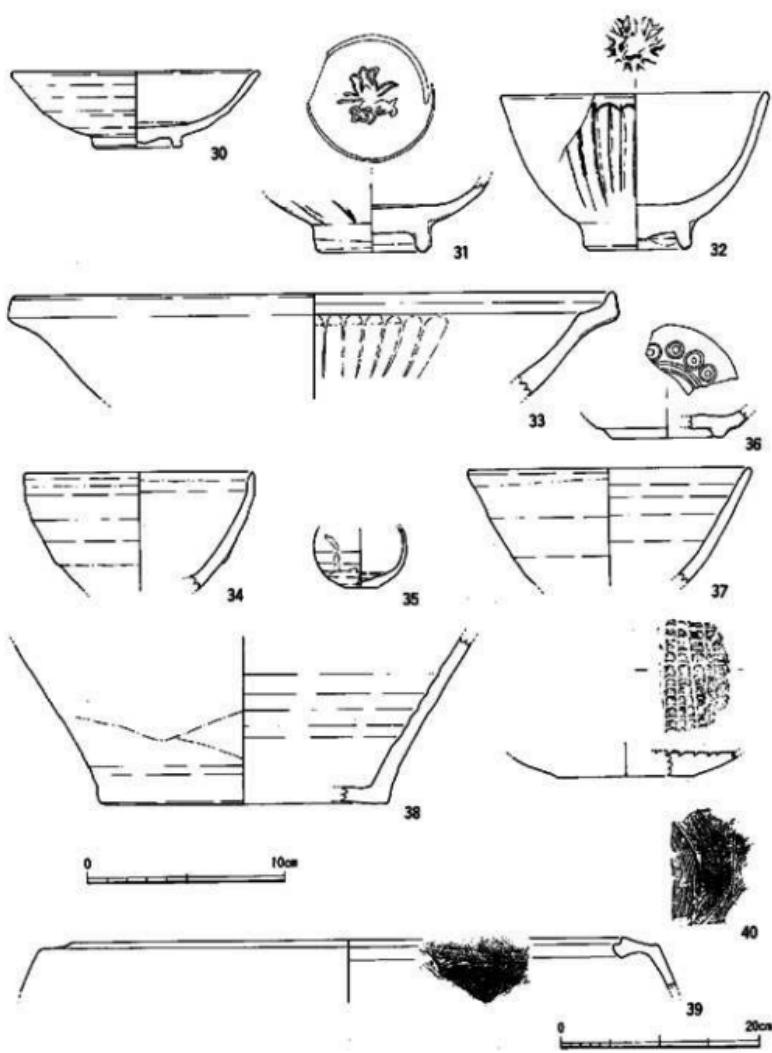


Fig. 102 735号追捕出土遗物实测图 2 (1/3, 1/6)

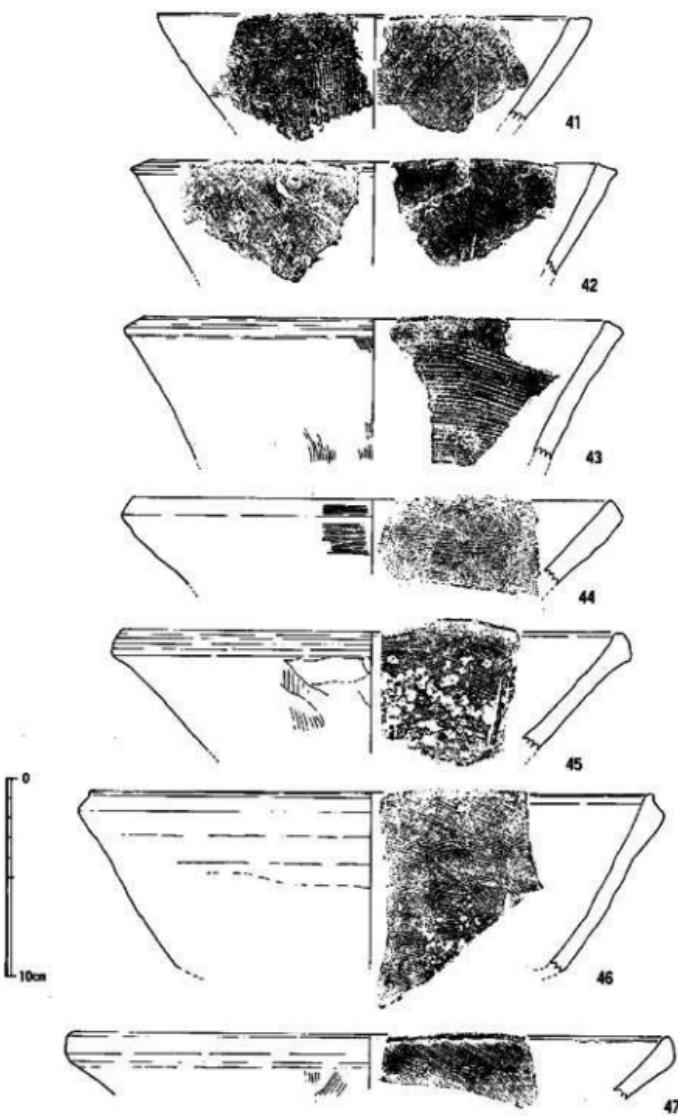


Fig. 103 735号道桥出土遗物实测图 3 (1/3)

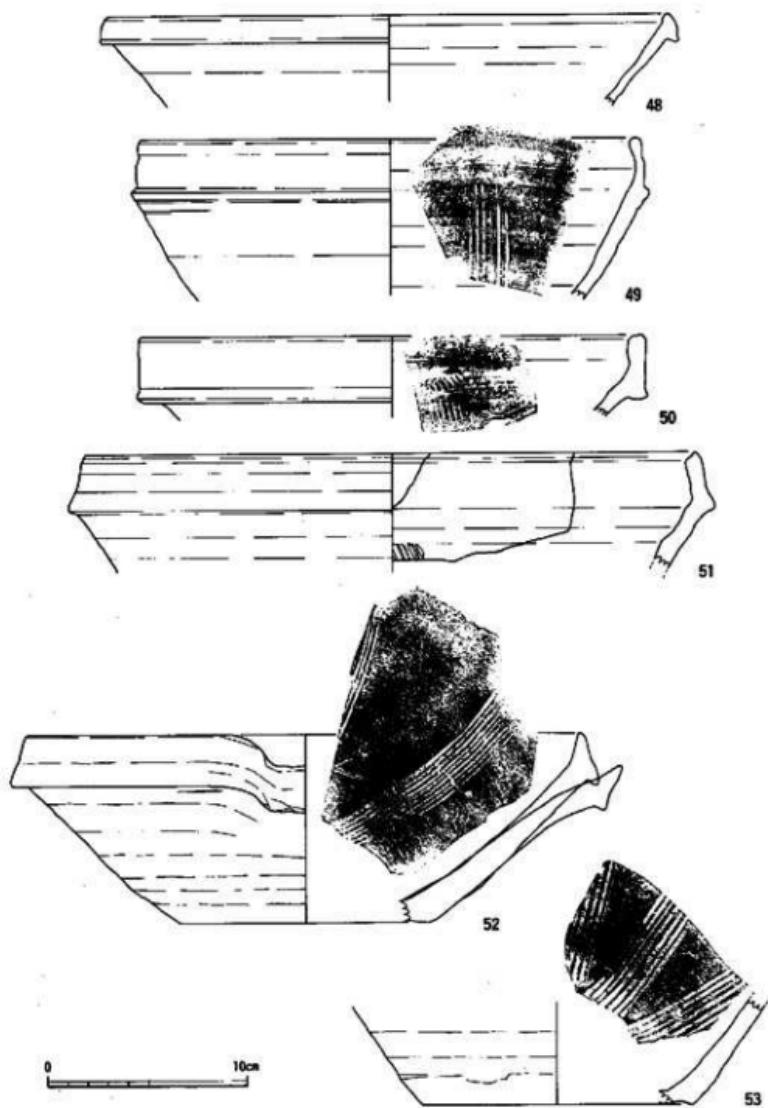


Fig. 104 735号遺構出土遺物実測図 4 (1/3)

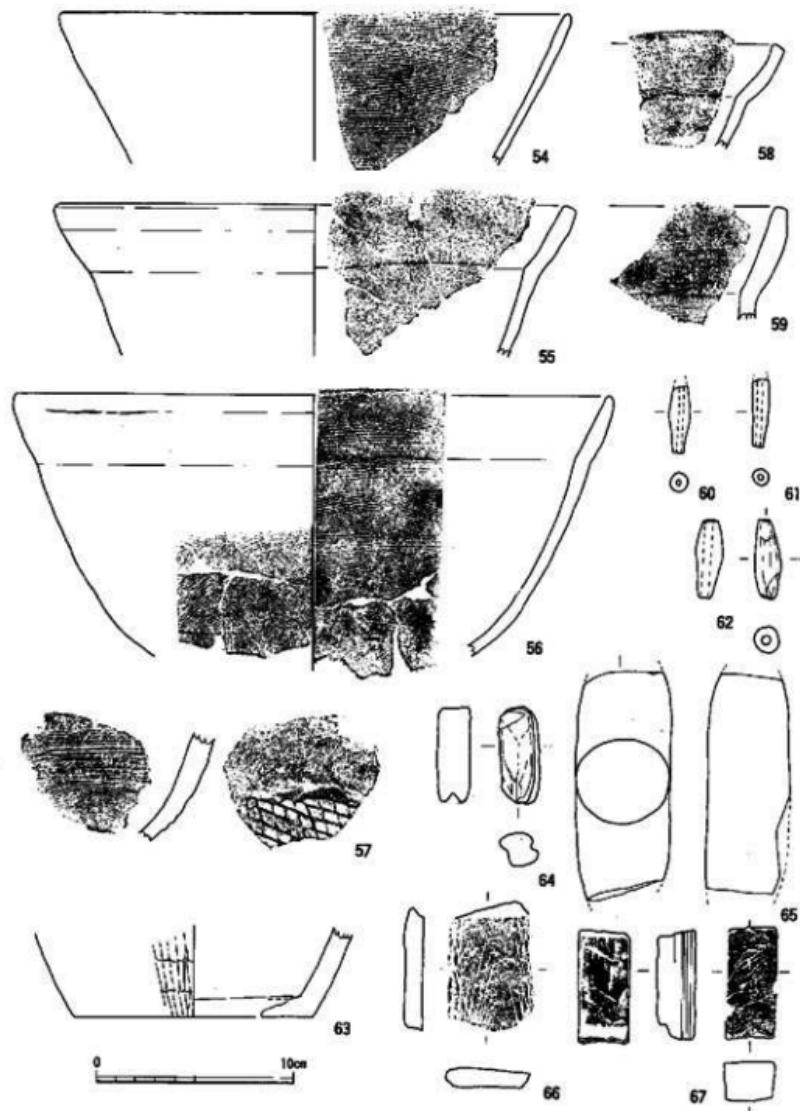


Fig. 105 735号墓出土物実測図 5 (1/3)

ものである。19~24は、白磁である。19の見込みには、目痕がみられる。23・24は、ピロースクタイプの碗である。25~33は、青磁である。25~27は、口縁部外面に雷文帯がつく。28の内面には、印花文が施されている様であるが、ほとんど識別できない。30は、見込みの釉を円形にかきとるものである。34は、天目茶碗である。体部下位は、露胎となる。35は、黒褐釉陶器の茶入である。外底部には、糸切り痕がみられる。36は、李朝の象嵌青磁である。37・38は李朝陶器である。40は、瀬戸・美濃陶器のおろし皿である。外底部には、糸切り痕がのこる。41~45は、土師質土器の鉢である。41・42・45には、すり目がみられる。46・47は、瓦質土器の鉢である。48は、東播系須恵器の鉢である。口縁部は、黒変している。49~53は、備前陶器のすり鉢である。54~59は、土鍋である。外面には、煤が付着している。60~62は、土鍤である。63は、滑石製の石鍤である。外面には、煤がつく。64は滑石製の石鍤である。65は磨り石であろうか。断面は、梢円形を呈する。周囲は、磨耗してなめらかになっている。擦痕は、石の長軸方向に対して直角方向についている。66・67は、粘板岩製の砥石である。

Fig.107に示したのは、735号遺構を掘り上げるに先立って設定したトレンチからの出土遺物である。1~21は、土師器である。1~5は皿で、形態と法量から3タイプにわかれる。1は口径6.0cm、器高1.6cmで、体部は丸味をもつ。口縁部には、煤が付着している。2・3は、丸味の強い体部が浅く立ち上るもので、口径7.1, 7.4cm、器高1.4, 1.5cmをはかる。4・5は、体部がやや外反しつつ直線的にのびるもので、口径6.7, 7.2cm、器高1.5, 1.55cmをはかる。6~20は、壺である。形態・胎土から、3タイプにわかれる。6~12は、丸味を持った体部が、内済気味に立ち上るもので、口径10.7~13.4cm、器高2.0~3.0cmをはかる。法量的には、ばらつきがみられる。13~16は、外反気味に立ち上った体部が、内済して開くもので、口径11.2~12.2cm、器高2.4~2.6cmをはかる。17~20は、小さめの底部から、直線的にラッパ状に開く体部をもつ。体部および内面の回転ナデは、細かい単位で強く施されており、強い凹凸がみられる。胎土は、きめが細かく精良

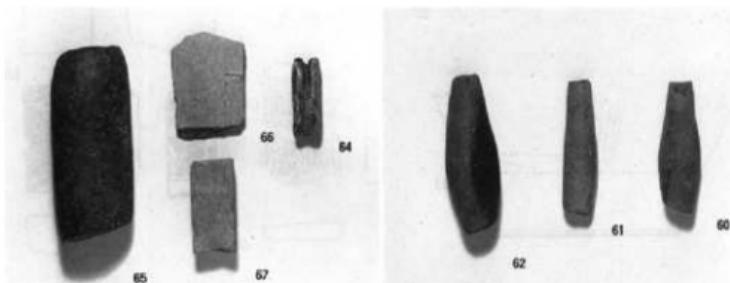


Fig.106 735号遺構出土遺物

である。口径10.8~12.0cm、器高は18で2.1cmをはかる。皿・杯ともに、外底部は回転糸切りで切り離す。体部および内面は、回転ナデを施すが、12・13には、内底にナデ調整がみられる。21は、高台付の杯である。高台内側は丁寧にナデ調整を行なっているが、高台の外側にわずかに糸切り痕がみられ、杯部分が回転糸切りされていることを示している。口径18.0cm、高台径12.8cm、器高6.8cmをはかる。22は、東播系須恵器の鉢である。23は、李朝の雜釉陶器の壺である。

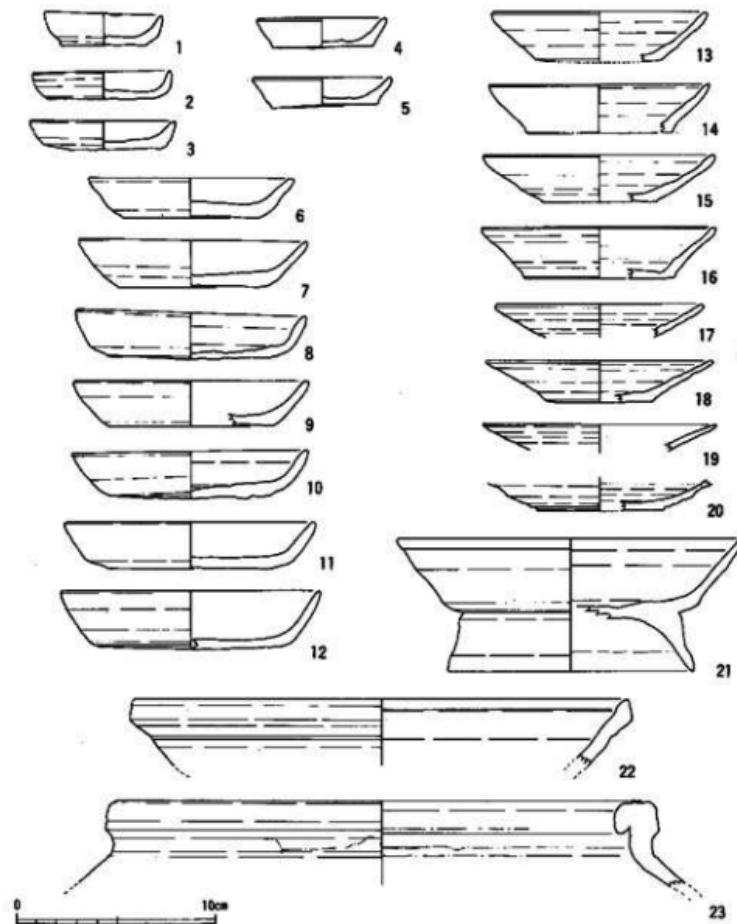


Fig. 107 735号造構トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

### 751号遺構

第3面Y—7, Z—7区で検出した土壙である。二段据りの円形を呈し、一段目径約1.1m, 深さ約13cm, 二段目径約65cm, 深さ約54cmをはかる。

出土遺物は、土師器・瀬戸陶器・青磁・明代染付・李朝陶器などである。1～4は、土師器である。1・2は皿で、口径7.6cm, 8.1cm, 器高1.4cm, 1.5cmをはかる。外底部は、回転糸切り、体部および内面は、回転ナデ調整を施す。3・4は壺である。口径10.8cm, 11.6cm, 器高2.55cm, 2.0cmである。外底部は、回転糸切り、体部および内面は、回転ナデ調整を行なっている。5は、瀬戸・美濃窯系陶器の高台付皿である。体部に施釉されている。釉は、緑色透明で、釉中に気泡が多くみとめられる。6・7は、李朝陶器である。濃青灰色不透明の釉をうすく施す。6には、疊付から高台内面にかけてと、見込みに、目痕がついている。

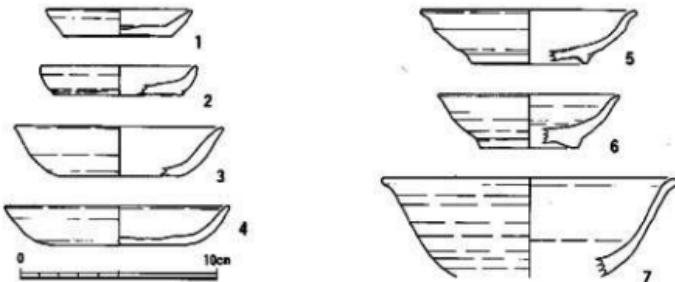


Fig. 108 751号遺構出土遺物実測図 (1/3)

### 852号遺構

第4面B—5区より検出した不整梢円形の土壙である。長軸約1.8m, 短軸約1.4m, 深さ約40cmをはかる。

出土遺物は、土師器・白磁・青磁・土鍋・土錐などである。土師器を除いて、小片のため図示できなかった。1・2は土師器の壺である。口径12.3cm, 12.4cm, 器高2.5cm, 2.4cmをはかる。外底部は、回転糸切りを行ない、体部と内面は回転ナデ調整する。3～5は、土錐である。

この他、青磁には鎧蓮弁文の破片が含まれていた。



Fig. 109 852号遺構出土遺物実測図 (1/3)

### 906号遺構

第4面D—6・7区より検出した土壤である。隅丸長方形を呈するものと思われる。調査した部分で、長辺1.7m、短辺1.5m、深さ0.47mをはかる。遺物は、埋土中位より出土した。

出土遺物は、土師器・白磁・青磁・陶器・瓦質土器・石製品等である。1～39は、土師器である。1～28は皿である。28のみが底部をヘラ切り離しするが、これは混入品であろう。1～27は、外底部を回転糸切りし、体部と内面は、回転ナデ調整する。2・4・5・10・11・18・21・24・25には、内底部にナデ調整が施されている。口径は

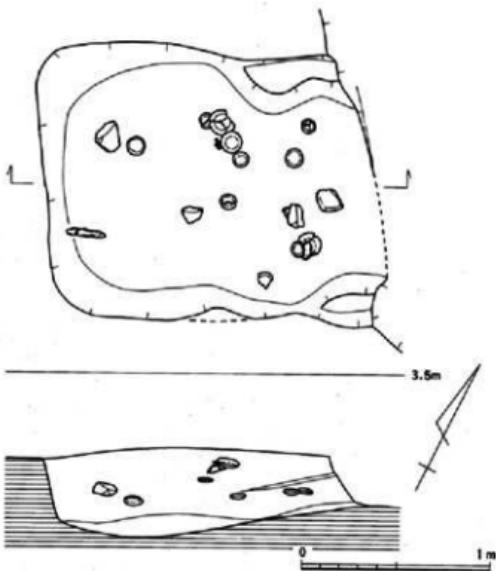


Fig. 110 906号遺構実測図 (1/30)



Fig. 111 906号遺構（西より）

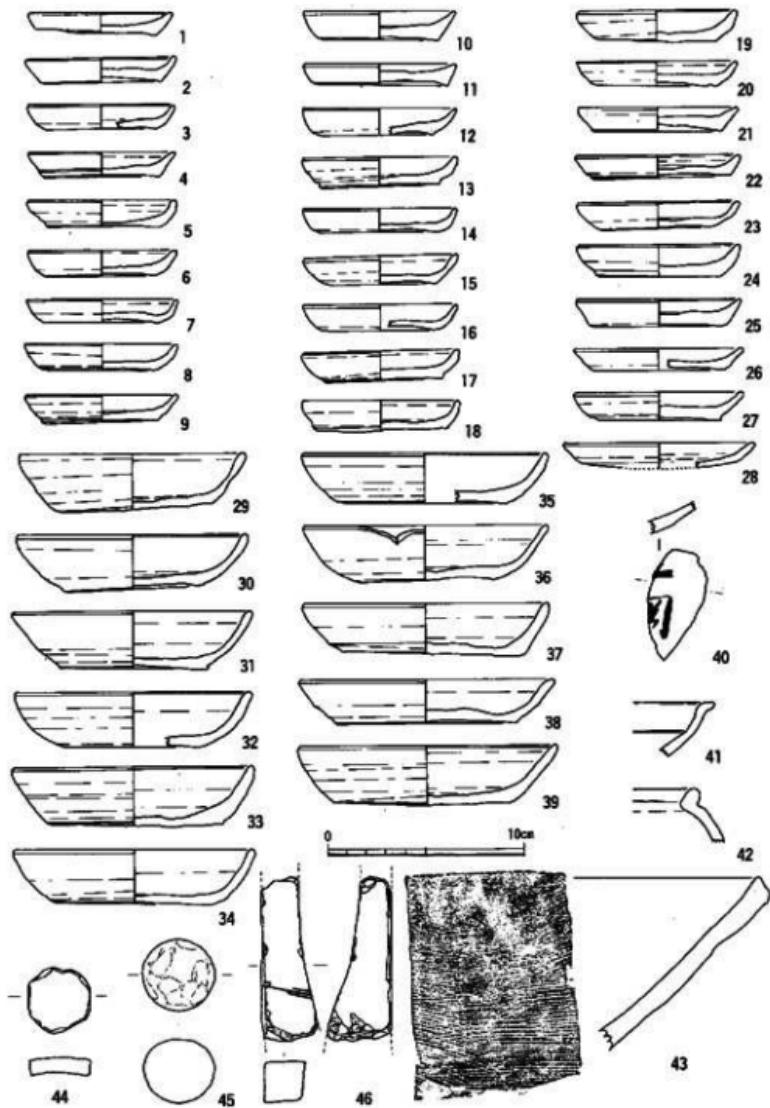


Fig. 112 906号遺物出土遺物実測図 (1/3)

7.4~8.8cm, 器高は1.1~1.6cmをはかる。法量的には、特に集中する傾向はなく、ばらつきがみられる。28は、外底部をヘラ切りし、体部は回転ナデ調整、内底部にはナデ調整を施している。口径9.7cm、器高1.3cmをはかる。混入品であろう。29~39は、坏である。外底部は回転糸切りで切り離す。体部および内面は、回転ナデ調整を施す。29~31・34・37には、内底部にナデ調整が施されている。36の口縁部は、1ヶ所に刃子の刃先状のもので切れ込みを入れ、やや外方にひねり、片口状に作っている。しかし、外側への突出はほとんどなく、片口としての機能は果たさないものと思われ、片口を意図したものではなかろう。坏は、口径11.2~13.5cm、器高2.25~3.1cmをはかり、法量的にはばらつきがみられる。40は白磁の小片である。体部下位の底胎部分に墨書きがなされている。二字文と推定される。一字目は下の横一棒がみえるのみで字体不明、二字目は、旁のみで「岡」とみえる。他の例を考えれば「綱」であろう。41は、青磁の小片である。同安窯系。42は、褐釉陶器おそらく壺の口縁部であろう。43は、瓦質土器の鉢である。すり目はみられない。内面の下部は、使用のために磨滅している。44は、瓦質土器片の周囲を打ち欠いた円盤である。45は、毬球玉である。砂岩製。46は砂岩性の砥石である。

この他、鉄製の短刀片が出土している。

#### 907号遺構

第4面D—5・6区で検出した土壤である。土層断面でみると、土壤掘りかたの内側には直立した壁面がみられる。特に木質の遺存はみられなかったが、内側の壁面の直立の様子からみて、板敷等が作られていたとみるべきであろう。

掘りかたは、長辺2.1m、短辺1.15mの不整長方形を呈する。内壁は、北東壁0.98m、南西壁0.85m、南東壁1.7m、北西壁1.8mで、北東壁側にやや開いてはいるが、ほぼ長方形を呈している。南西壁は、掘りかたと一致しており、この面には板壁が立てられた形跡がない。したがって、三辺を板壁か何かで囲っていたものと考えられる。

土層の堆積状況をみると、掘りかたと内壁との間には複数の土層が存在せず、一時に埋められたものである。内壁内側の土層は、次第に土が流れこんで埋まつたことをうかがわせ、この内壁内が、開放された状態で長期間放置されていたものと考えられる。

埋土上には、70×110cmの範囲で集石がみられる。集石は、辺をそろえている様にもみられ、検出当初は、この集石と内壁のプランから木棺墓を想定した。しかし、上述した土層観察の所見から墓とは考えられないので、集石は本來の遺構に伴うものではないと思われる。遺物の出土が埋土上層に多い点もあわせて、集石は、907号遺構が廃棄されてその埋積がかなり進んだ段階で、まだ埋り切っていなかった間に捨てられた（置かれた？）ものであろう。

**出土遺物**は、土師器・瓦質土器・備前陶器・青磁・白磁・天目等である。造構埋土上層を主に出土しており、量的には多くない。1～3は、土師器である。1・2は、皿である。口径8.0cm。器高はそれぞれ1.2cm、1.1cmである。外底部は回転糸切りで、体部と内底は回転ナデ調整を施している。3は壺である。口径12.3cm、器高2.5cmをはかる。外底部は回転糸切りで、体部と内面は、ナデ調整でととのえる。4は、天目茶碗である。黒色で光沢の強い釉が、たっぷりと施されている。5・6は青磁である。5は、高台置付を露胎とする。6は、脅付から高台内を露胎とする。7は、瓦質土器のすり鉢である。口縁の一帯をひすませて、片口につくる。体部内面は横位の刷毛目調整を全面に施す。外面には指頭圧痕がみられるが、部分的に刷毛目がみ

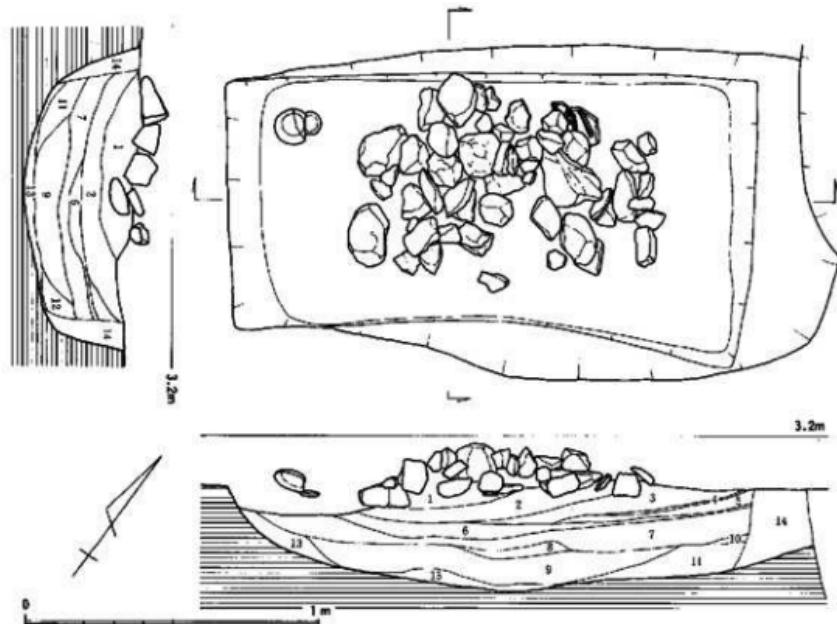


Fig. 113 907号造構実測図

- |             |              |               |
|-------------|--------------|---------------|
| 1より上層、黒色灰層  | 5、黄灰色粗砂      | 10、灰色土        |
| 1、茶色焼土      | 6、暗茶褐色土      | 11、灰白色粗砂      |
| 2、黒褐色上、やや粘質 | 7、灰白色粗砂      | 12、黄褐色砂質土     |
| 3、灰白色粗砂     | 8、暗褐色土、粗砂まじり | 13、黄茶色砂       |
| 4、暗褐色土      | 9、暗灰色土       | 14、灰色砂、擦りかた埋土 |



Fig. 114 907号遺構検出状況（南より）

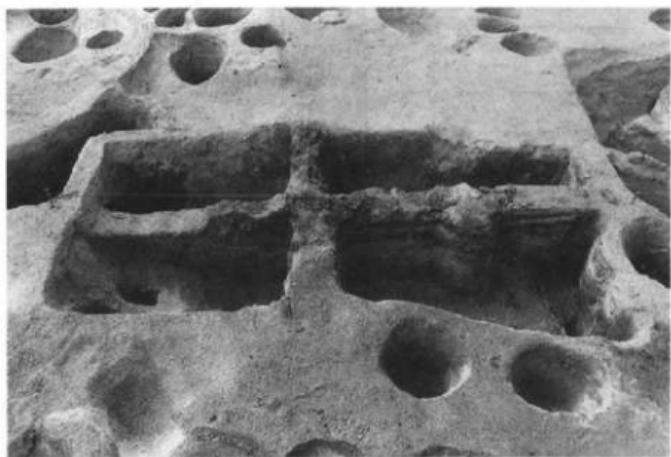


Fig. 115 907号遺構土層堆積状況（南より）

られる。8は、備前焼きのすり鉢である。片口部分は、欠損する。備前焼き編年のⅢ期終り頃に属す。

前述したように、これらの遺物のほとんどは、907号遺構の埋土上層から出土したものであり、907号遺構が廃棄された後の年代を示すものである。出土遺物から見た年代観は、14世紀後半を示すものであり、907号遺構が開放された状態のまま一定期間放置されていたものとすれば、907号遺構が營まれたのは、遅くとも14世紀中頃であろう。

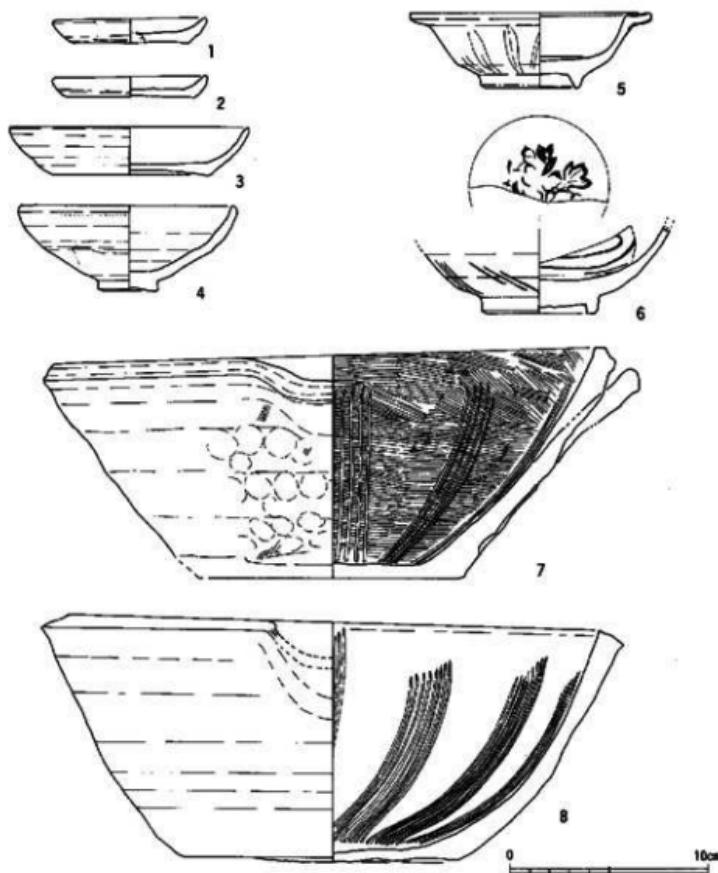


Fig. 116 907号遺構出土遺物実測図 (1/3)

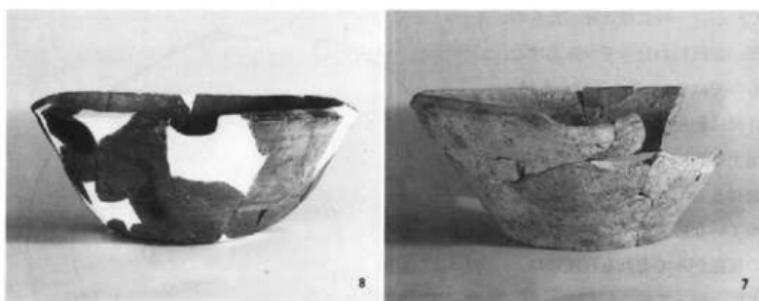


Fig. 117 907号遺構出土遺物

#### 965号遺構

第4面G—5区、G—6区より検出した井戸である。ほぼ円形の掘りかたに、掘りかたの中央からやや東に寄って、円形の井側が検出されている。

掘りかたは、径3.04~3.28mのほぼ円形を呈し、約2.2mまで掘り下げている。この段階で井側を検出し、以下は井側を損わない様に井側周囲を掘り残したので、掘りかたの最下部は確認していない。

井側は、第4面上でその位置をおさえることはできたが、井側に伴う石列が出土した第4面マイナス2.2m以下について、調査を行なった。石列は、井側を約半周する形で並べられてい



Fig. 118 965号遺構（南より）

た。石は一段に横に並べたもので、数段にわたってつみあげたものではない。石の下位からは、井側に転用された木桶の木質が出土した。かなり風化しており、板材としての実態は、全くとどめていない。しかし、一枚一枚の板幅がみてとれる程度には、痕跡が残っていた。

井筒は、径約60cmで、深さは55cm以上をはかる。これ以上は、湧水のためにくずれ、確認できなかった。また、石列は、桶の板の丁度真上にあたる。この位置関係からみて、石列は、桶と桶との間にはさまれていたと思われる。

出土遺物は、土師器・東播系須恵器・青磁・白磁・陶器・骨製品・銅鏡などである。1~7は土師器である。1~3は皿で、口径7.7~9.8cm、器高0.85~1.2cmをはかる。回転糸切り削しで、いずれも内底部にナデ潤製を施している。4~7は壺である。口径12.4~14.0cm、器高2.35~2.9cmをはかる。外底部は回転糸切り、体部には回転ナデを施す。8~10は、白磁である。8の皿は見込みを蛇ノ目に袖をかき取る。9は、いわゆる口ハゲである。11~13は青磁で

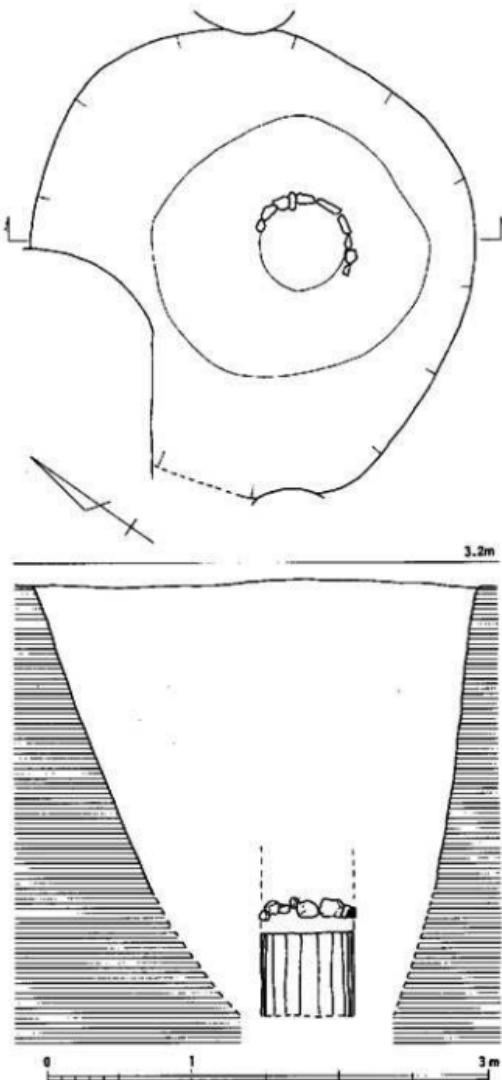


Fig. 119 965号遺構実測図 (1/40)

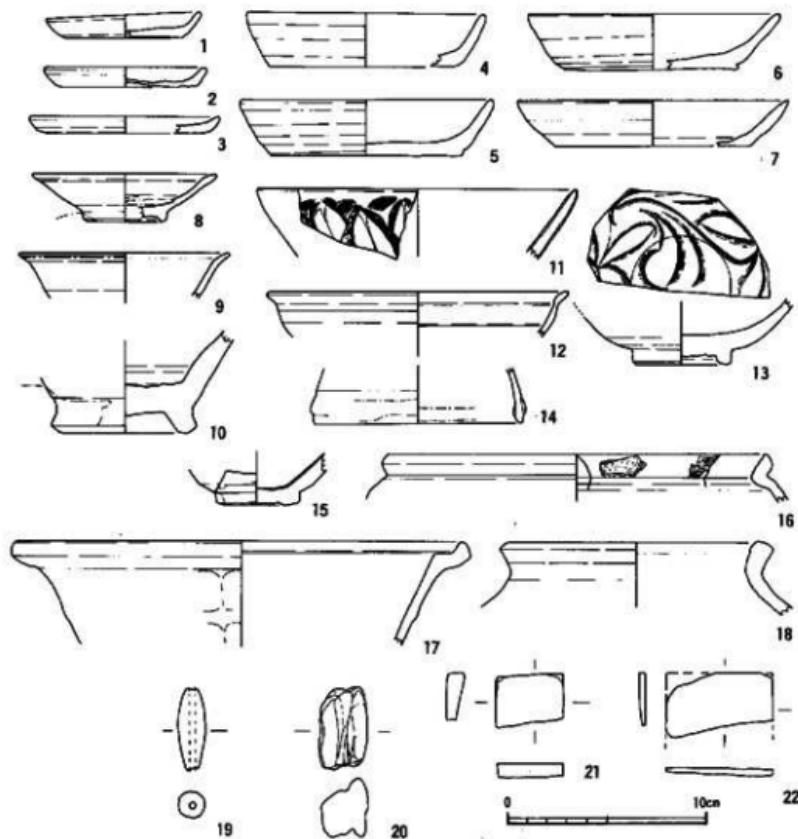


Fig. 120 965号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Fig. 121 965号遺構出土銭 (1/1)

ある。14は青白磁、15・16は陶器である。17・18は瓦質土器。19・20は滑石の錘。21・22は粘板岩の砥石である。

#### 1094号遺構

第4面R—7区より検出した小土壙である。長軸54cm、短軸43cmの小判形を呈し、深さは5~11cmをはかる。埋土中より、完形品の土師器壊と青磁皿が各1枚出土した。

出土遺物は、この他に、陶器片、瓦片が少量あるにすぎない。1は、土師器の壊である。外底部を回転糸切りで切り離し、体部および内面には回転ナデ調整を施す。口径12.6cm、器高2.65cmをは

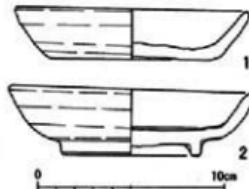


Fig. 122 1094号遺構遺物実測図 (1/3)



Fig. 123 1094号遺構 (南より)

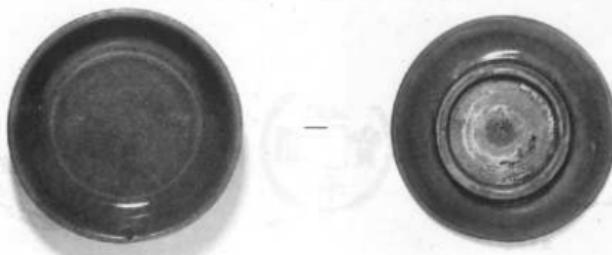


Fig. 124 1094号遺構出土遺物

かる。2は、青磁の皿である。全面に施釉した後、外底の高台内側だけ蛇ノ目状に釉をかきとる。釉色は、濃深緑色で、透明感に欠け、にぶい光沢を持つ。口縁に1ヶ所欠けがあるが、施釉前のものである。龍泉窯系である。

#### 1117号遺構

第4面S-5・6区より検出した土壙である。長軸110cm、短軸92cmの小判形を呈し、深さは84cmをはかる。

出土遺物は、土師器・黒色土器・青磁・白磁・瓦・土錐である。1・2は、土師器である。1は皿である。口径8.0cm、器高1.05cmをはかる。底部にゆがみがある。外底部には、回転糸切り痕がみられる。2は、环の口縁片である。3~5は、土錐である。3は、管状につくる。4・5は、断面正方形につくり、相対する二面に、棒状の工具の先端で溝を切る。

1117号遺構の出土遺物には、鎌蓮弁文の青磁片がみられるなど、混入の要素がみられる。

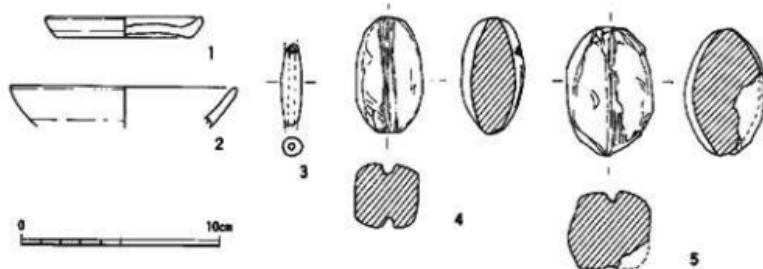


Fig. 125 1117号遺構出土遺物実測図 (1/3)

#### 1139号遺構

第4面O-6・7、P-6・7区より検出した地下室状の土壙である。隅丸長方形の掘りかたに板材を立てて壁をつくるもので、3隅には、礎石がおかれていた。

掘りかたは、一部で砂が崩れて形を損なっているが、おむね長辺215cm、短辺165cmの脇がふくらんだ隅丸長方形をとり、構底は、160×148cmの長方形につくる。深さは95cm程で、床面は平坦である。

壁は、掘りかたの床面の四辺にそって、深さ10cm程の溝を切り、そこから板材を立てるものである。板材は、痕跡がわずかにみられたのみなので、具体的な様子はわからないが、埋土を掘りあげる段階で、土壙壁の中位や上方においても木質の遺存を確認しており、本来は土壙上端まで壁を立てていたものと推測される。壁の板材は、木質部分よりうかがわれた木目が縱方向に通っていたので、立て並べられていたものと思われる。なお、前述した様に、土壙掘りか

たの壁には、一部に崩落があり（砂に掘りこまれているので、きわめて崩れやすい）、傾斜がゆるくなっている。したがって、土塙掘りかたの壁は、本来、より垂直に近いものであり、壁の板材は、これに立てかけられたものであろう。また、検出された木質の下端は不揃いで、板材の幅が広くはなかったことを示している。板幅は、20cm前後と推定される。

床面の東・西・南の角には、扁平な石が平らに置かれていた。石は、壁材のラインの上にかぶさる様におかれている。床の四辺の小溝中に残る木質も、石の下ではみられず、壁材は石に接するまで並べられると、石の上に乗せて置かれたものと思われる。北角では、壁材は直交するので、石が置かれていないかったと考えられる。石の上面には、銅鏡「宣和通寶」がおかれ、さらにその上に柱が立てられていた。柱は、朽ちて径4~5cm程の木質となっていた為、本来の太さはわからない。この柱が、上部構造にかかわることは相違ないであろうが、1隅を欠くこと、銅鏡が全く破損せず、大重量がかかったとはみられない点などから、直接に屋根組みなどを受けるものではなかったと考える。したがって、1139号遺構は、建物内部に設けられた地

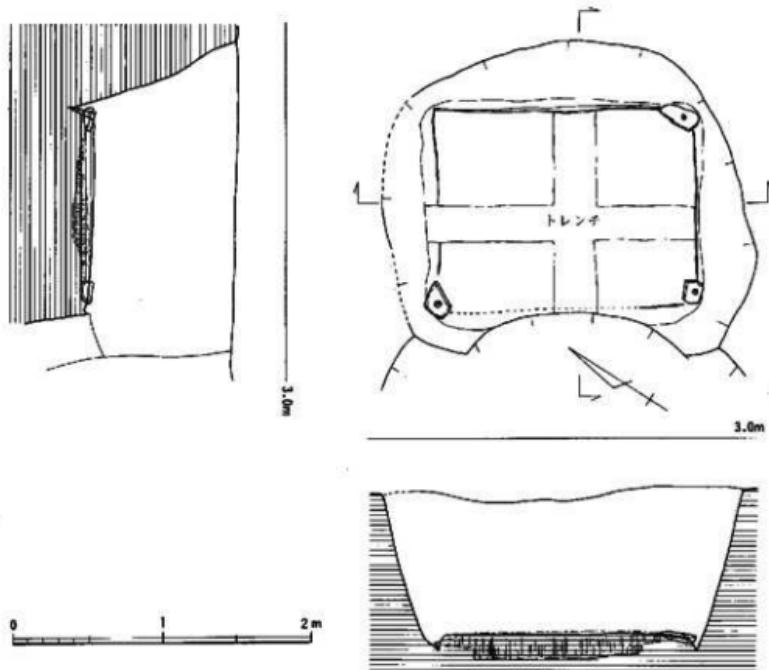


Fig. 126 1139号遺構実測図 (1/40)



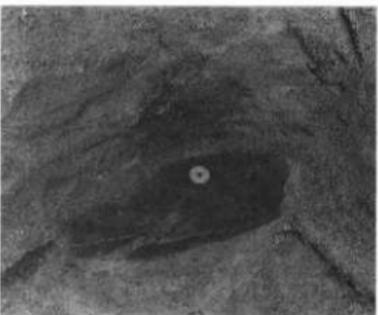
(1) 1139号遺構(北より)



(2) 1139号遺構(西より)



(3) 東壁木質遺存状況(西より)



(4) 南東隅磚石、銅錢出土状況(北より)



(5) 北西隅磚石、銅錢出土状況(東より)



(6) 南西隅磚石、銅錢出土状況(西より)

Fig. 127 1139号遺構

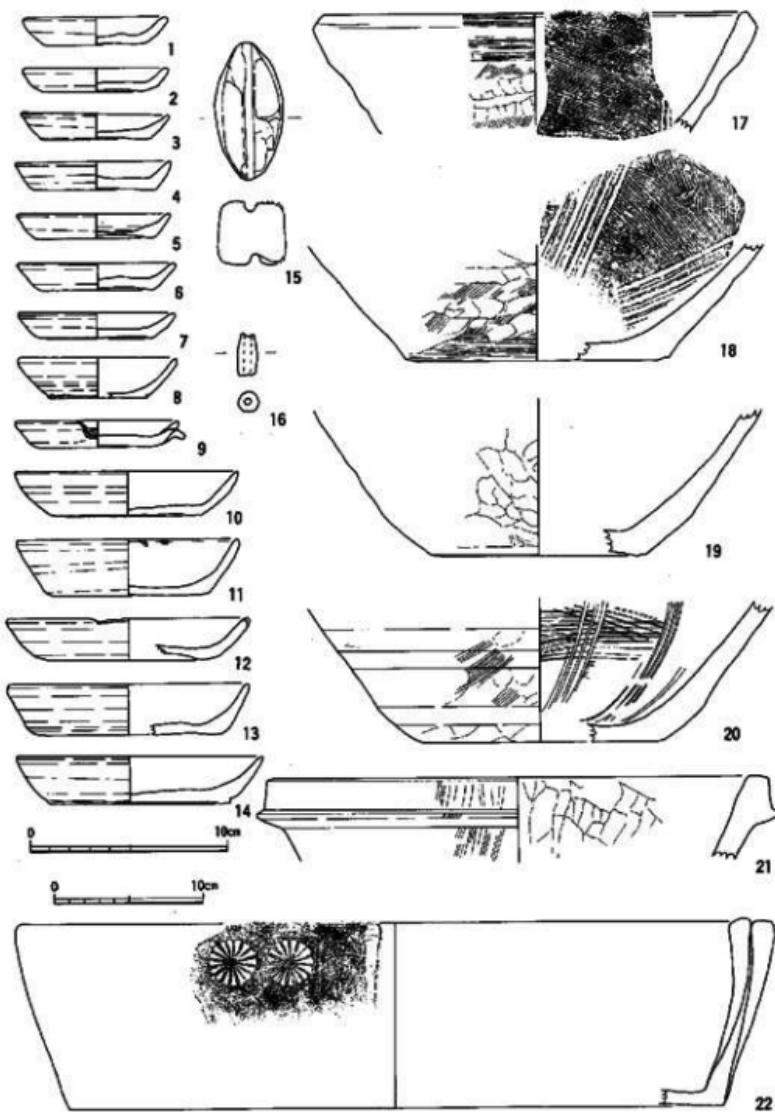


Fig. 128 1139号遺構出土遺物尖測圖 1 (1/3 22……1/4)

下室であったとみられる。

出土遺物を、Fig. 128-130に示す。1~14は、土師器である。1~9は皿で、口径7.3~8.5cmをはかる。9は、口縁の一部を外方へひねり出し、片口につくる。この部分には、油煙が付く。10~14は壺である。口径11.5~12.7cmをはかる。皿・壺は、すべて回転糸切りで、体部および内面は回転ナデをするが、8~11以外には内底部にさらにナデ調整が施される。15・16は土鍤である。17~20・22は、瓦質土器である。23は白磁の碗で、外底に「十」の墨書きがある。24~26は青磁である。27・28は、褐釉陶器である。28の口縁部上面には、目痕があり、少しへこん

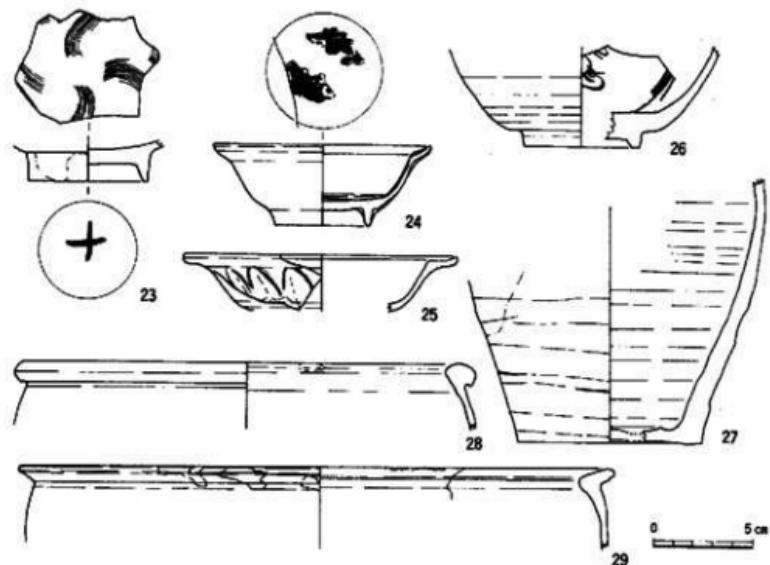


Fig. 129 1139号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)



Fig. 130 1139号遺構出土遺物実測図 3 (1/1)

でいる。29は黄釉陶器で、口縁端部から内面に施釉する。21は、石鍋である。30~34は、銅錢である。30~32は、礎石上におかれていた「宣和通寶」である。その他「皇宋通寶」「祥符元寶」五銭錢が出土している。

#### 1141号遺構

第4面U-7区より検出した土壤である。3分の1程度が、調査区外に出る。径約85cmの円形を呈し、深さは約50cmをはかる。埋土の中位に集中して、遺物が廃棄されていた。

出土遺物は、土師器・瓦質土器・備前陶器・白磁・青磁・銅錢等である。1~21は、土師器である。1~13は皿で、口径7.5~8.6cm、器高1.1~1.6cmをはかり、法量的なばらつきは少ない。すべて回転糸切り底で、体部・内面は回転ナデする。2・5・9~13には、内底部にナデ調整が施される。14~21は壺である。口径12.0~13.1cm、器高2.5~3.0cmで、やはりばらつきは小さい。底部は回転糸切り、回転

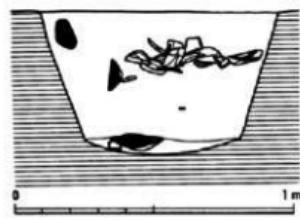
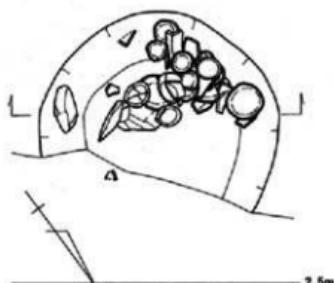


Fig. 131 1141号遺構実測図 (1/20)



Fig. 132 1141号遺構 (西より)

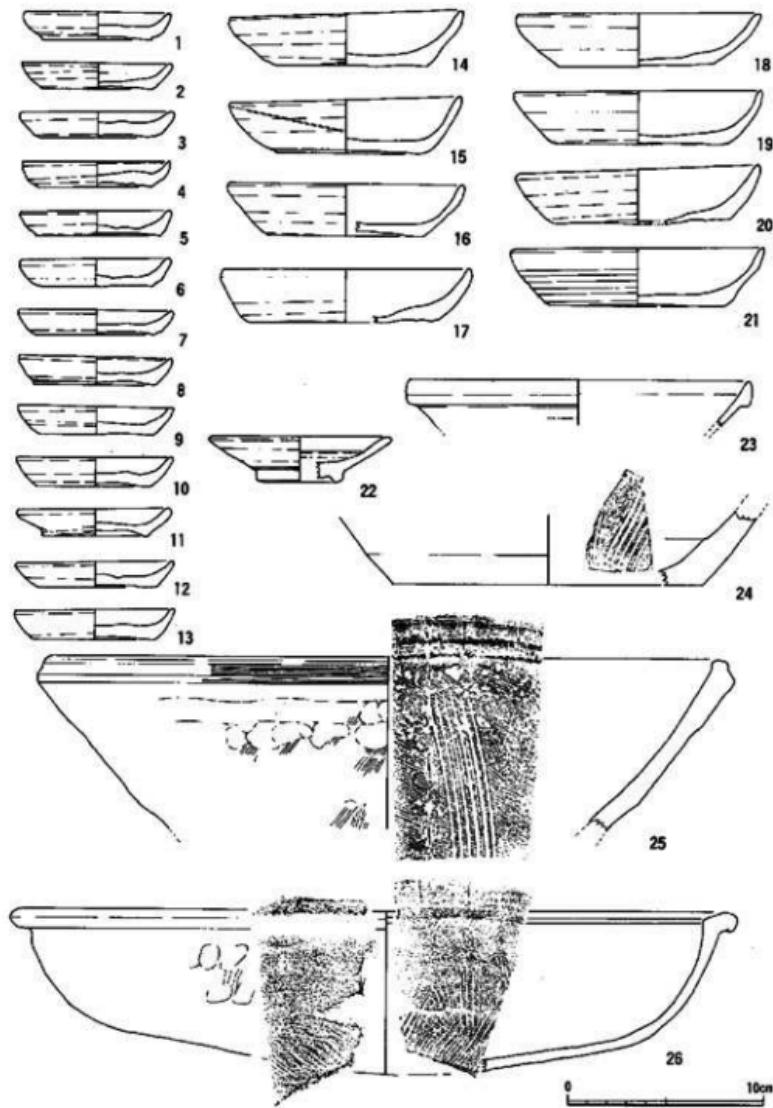


Fig. 133 1141号窯構出土遺物実測図 (1/3)

ナデで器面の調整を行なう。15・18～21の内底部には、さらにナデ調整が行われている。22・23は白磁である。22の見込みは、環状に軸をかきとる。24は、備前陶器のすり鉢である。25は、瓦質土器である。6本単位のすり目がつけられる。26は、土鍋である。内底部・外底部には、粗い刷毛目調整がなされる。体部外面には、煤が付着する。

この他、「天聖元寶」1枚が出土している。

#### 1157号遺構

第4面K-6区より検出した小土壙である。長軸61cm、短軸38cmの不整椭円形を呈し、深さは8～9cmをはかる。埋土上位より、青磁皿と褐釉陶器皿が重なって、やや離れて土師器皿が出土した。

出土遺物は、1が土師器皿、2が青磁皿、3が褐釉陶器皿である。1は、底部を回転糸切りし、体部は回転ナデ調整、内底部にはナデ調整を施す。外底部には、板目圧痕がみられる。2は、同安窯系の平底皿である。3は、内面の

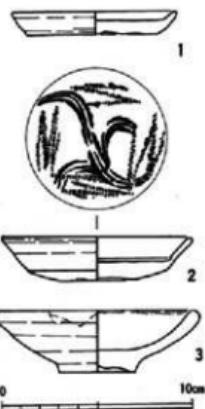


Fig. 134 1157号遺構出土遺物実測図 (1/3)

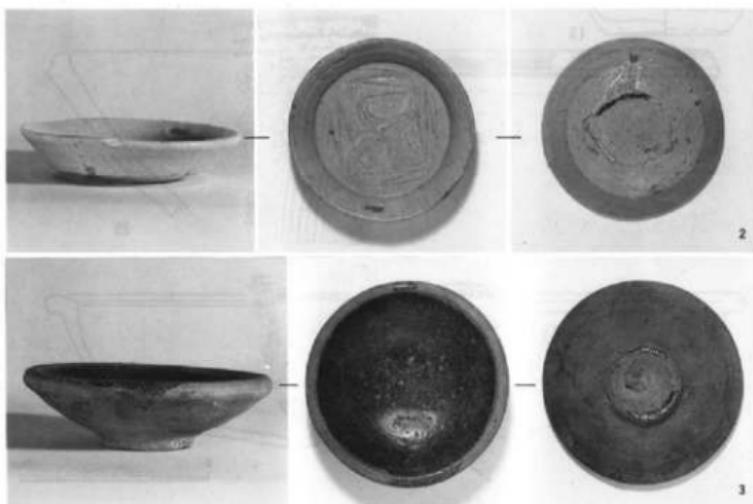


Fig. 135 1157号遺構出土遺物

口縁直下から見込みに施釉する。釉は緑褐色を呈し、うすいが、まんべんなく施されている。

#### 1343号遺構

第4面L・M—5区より検出した土壙である。長辺220cm、短辺110cmの隅丸長方形を呈し、深さ35~42.5cmをはかる。

出土遺物は、土師器・東播系須恵器・常滑陶器・青磁・白磁・石錘などが出上している。1・2は土師器である。土師器は、細片が多量に出土しており、図示できるものは2点にとどまった。口径8.6cm、9.2cm、器高0.8cm・1.3cmをはかる。外底部は、回転糸切り、体部は回転ナデ調整する。2の内底部には、さらにナデ調整を施している。3は土鍋である。4は、常滑陶器の堀口線である。5は、東播系須恵器の鉢である。6~8は白磁である。7・8は、いわゆる口ハゲの皿である。9・10は、青磁の碗である。龍泉窯系。青磁では、鑄造弁文の破片も出土している。11~14は、滑石製の石鍋片を再加工した石錘である。11は、おそらく木製品であろう。

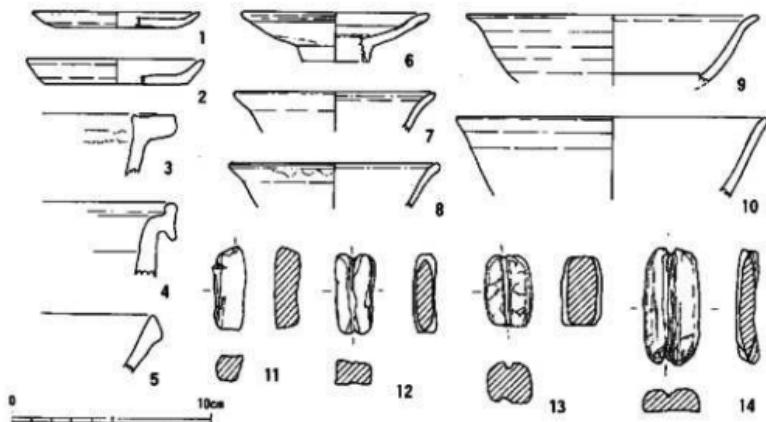


Fig. 136 1343号遺構出土遺物実測図 (1/3)

#### 1437号遺構

第4面P—5・6区より検出した集石土壙である。直径約110cm、深さ15cmほどの、円形皿形の土壙の内側に疊を敷いたもので、南から西へ3分の1周の部分には、2~3段に石が積まれている。敷石の下層には、炭や灰がうすく層をして堆積し、煤に焼けているものも見られたので、炉状の遺構と考えられる。ただし、これに係わる建物跡は、確認・特定できていない。

出土遺物は、土師器・白磁・青磁・土錘などである。1~4は、土師器である。1・2は皿で、11径7.4、8.1cm、器高1.4、1.4cmをはかる。外底部は回転糸切りで、体部・内面は回転ナ

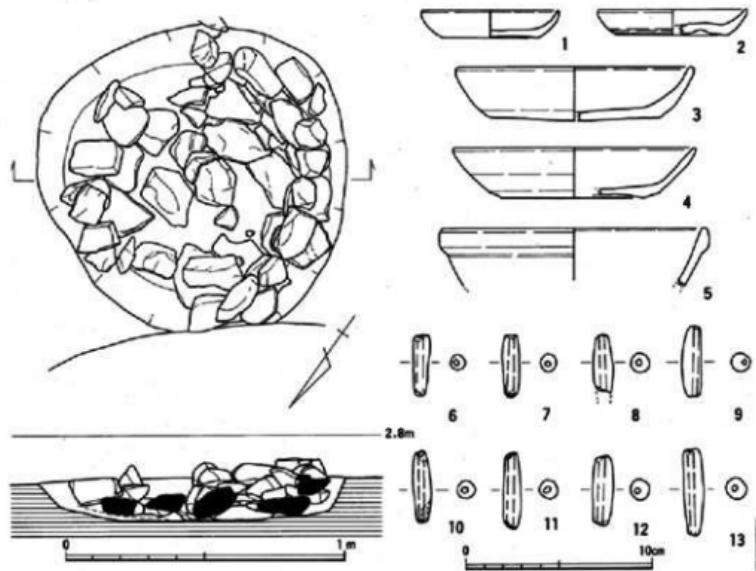


Fig. 137 1437号遺構実測図 (1/20) 出土遺物実測図 (1/3)



Fig. 138 1437号遺構 (東より)

デ調整、2はさらに内底部にナデ調整を施す。3・4は、坏である。口径12.8, 13.0cm, 器高2.9, 2.7cmをはかる。底部は回転糸切りで、体部及び内面は、回転ナデ調整する。5は、白磁の碗である。口縁を正縁状につくる。6～13は、管状土錘である。土師質だが、赤く焼け結っている。漁網用の錘であろう。

12世紀後半から13世紀の初めまでに営まれた遺構であろう。

#### 1453号遺構

第4面T—5区より検出した上壇である。長径0.9m, 短径0.8mの梢円形を呈し、深さは68cmをはかる。

出土遺物は、土師器・青磁・備前陶器・瓦質土器などである。1～8は、土師器である。1～4は皿である。1は小形品で、口径6.2cm, 器高1.35cmである。2～4は、口径7.7～8.2cm, 器高1.3～1.5cmをはかる。回転糸切り底で、内底部はすべてナデ調整を施す。5～8は、坏である。5～7は、口径12.3, 12.8cm, 器高2.3, 2.65cmである。8は、小さめの底部から大きく外反する体部を持つ。口径12.4cm, 器高3.3cm。回転糸切り底で、8にのみ内底部のナデ調整が行なわれている。9は、褐釉陶器である。10は、土鍋である。11・12は、土錘である。

#### 1465号遺構

第4面U—4～6区より検出した集石列である。建物の基礎であろう。4.8×1.5mのコ字形を

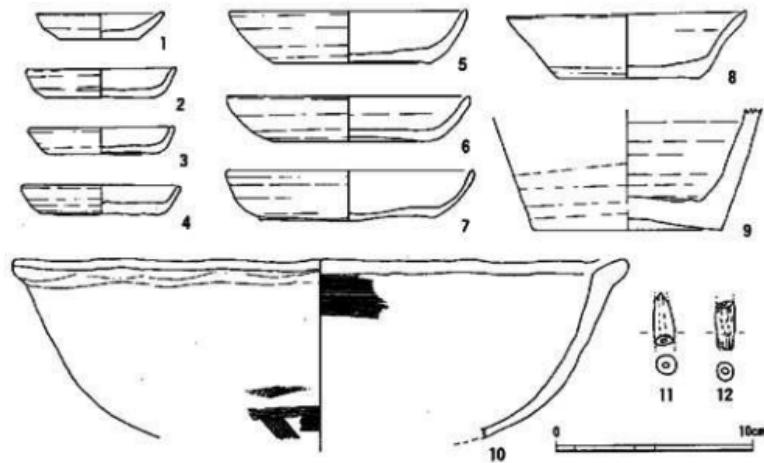


Fig. 139 1453号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Fig. 140 1465号遺構（南より）

呈する。幅は、60cmをはかる。集石上に、礎石と思われる大形扁平な石が4ヶ所見られる。

#### 1468号遺構

第4面S・T—6区で検出した木棺墓である。木棺の棺材は、朽ちて残っていないが、棺材をとめるのに用いられた鉄釘が、原位置をとどめるものがあった。掘りかたは、長辺187cm、短辺110cm、深さ50cm以上の隅丸長方形である。木棺は、長辺126cm、短辺は、北隣に上下に2本並んだ鉄釘を、長側板を小口板に留めたものとすれば52cm、深さは、20cm以上と復原できる。人骨は、右側臥屈葬で、棺幅いっぱいに葬られている（1号人骨）。柱穴による擾乱で、左前腕骨と骨盤の一部を欠く。頭部の左上方には、龍泉窯系青磁碗1点が副葬されていた。

出土遺物は、土師器・「て」の字状口縁土師器皿・黒色土器・陶器・土鍾などであるが、副葬品は図示した青磁碗1点のみである。



Fig. 141 1468号遺構（南より）



Fig. 142 1468号遺構人骨埋葬状況（西南より）

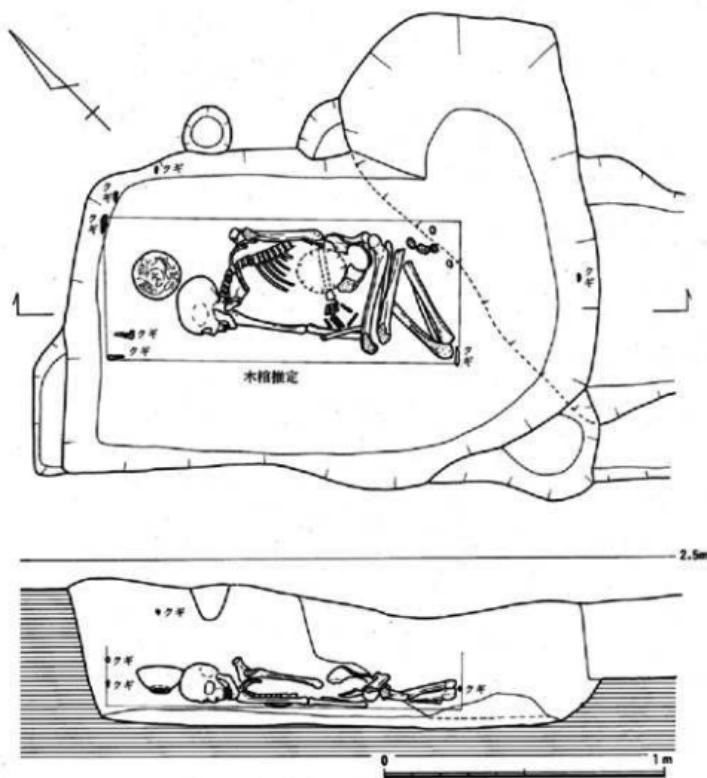


Fig. 143 1468号遺構実測図（1/20）

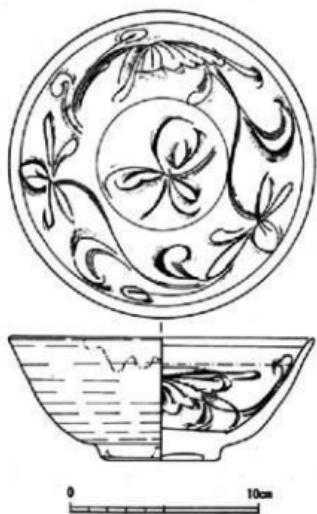


Fig. 144 1468号遺構遺物実測図 (1/3)



Fig. 145 1468号遺構出土遺物



Fig. 146 1500号遺構 (西より)

青磁碗は、龍泉窯系青磁碗で、内面に画花文を描く。12世紀後半頃のものである。

### 1500号遺構

第4面G 3・4区、H-3・4区より検出した井戸である。一部、調査区外に出る。長辺360cm、短辺推定320cmの不整四角形のほりかたの中心に、径80cmの円形の井戸をつくる。井側

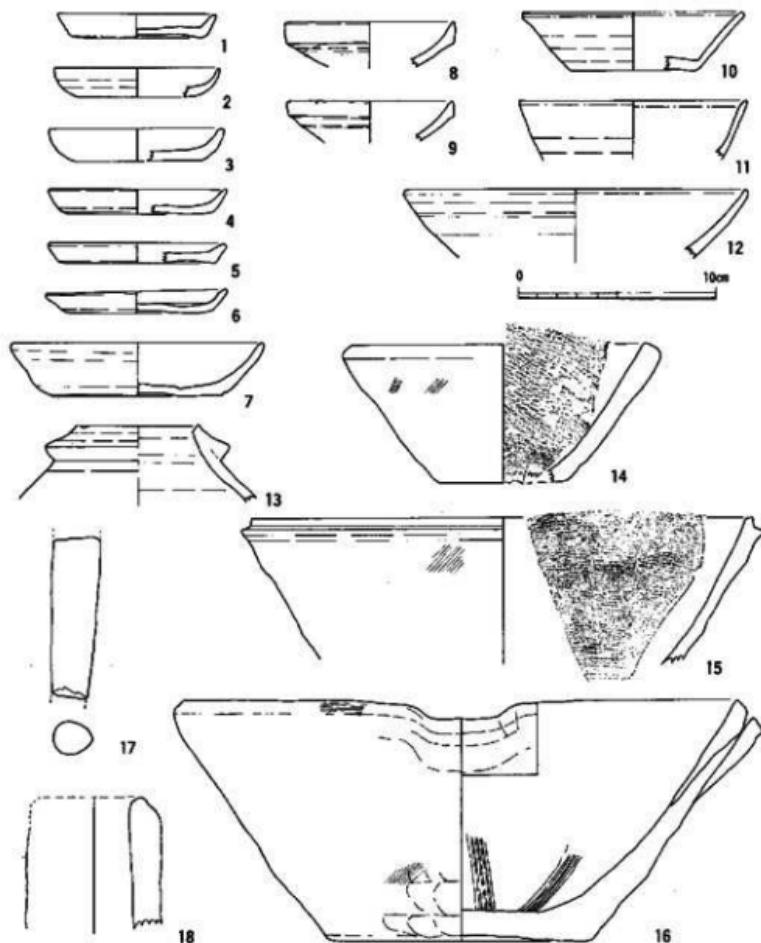


Fig. 147 1500号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

には、木桶を用いていた。井側は、最下部の一段の木質が、比較的よく残っていたにすぎない。木桶の高さは、74.5cm前後である。

1500号遺構は、第4面から深さ288cm、標高0.07mまで掘り下げて調査したが、標高0.1m付近から湧水が激しく、それ以下は十分に調査できなかった。

出土遺物は、土師器・瓦質土器・白磁・青磁・陶器・ふいご羽口・鉄滓・石製品などである。その内の一部をFig.147・148に図示した。1～7は、土師器である。1～6は皿で、口径8.1～9.3cm、器高1.05～1.65cmをはかる。外底部は、回転糸切り、体部・内面は回転ナデ調整を施し、1・3・4・6には、内底部にナデ調整がなされている。7は壊である。外底部糸切り、体部および内面は、回転ナデ調整する。口径13.0cm、器高2.8cmをはかる。8～12は、白磁である。8・9は玉縁口縁につくる皿である。10・11は、いわゆる11ハゲの皿であろう。13は、褐釉陶器の壺口縁である。14～17は、瓦質土器である。14～16は鉢で、16には4本を単位としたすり目が刻まれている。16は、11縁の一部を外方にひねり出して、片11につくる。17は、脚部の一部である。断面は、卵形を呈する。脚付鍋または釜の一部であろう。18は、土師質のふいご羽口である。端部は、熱のために焼けて、ボロボロになっている。内面には、細かい布目がついている。1500号遺構からは、この他に2個体分以上の羽口が出土している。19～22は、石製品である。19～21は、滑石製の石錘で、石錘の破片を転用して再加工したものである。19・20は、石錘のつば部分を用いている。22は、砂岩製の砥石である。上面に砥石面を残す他は、折損している。

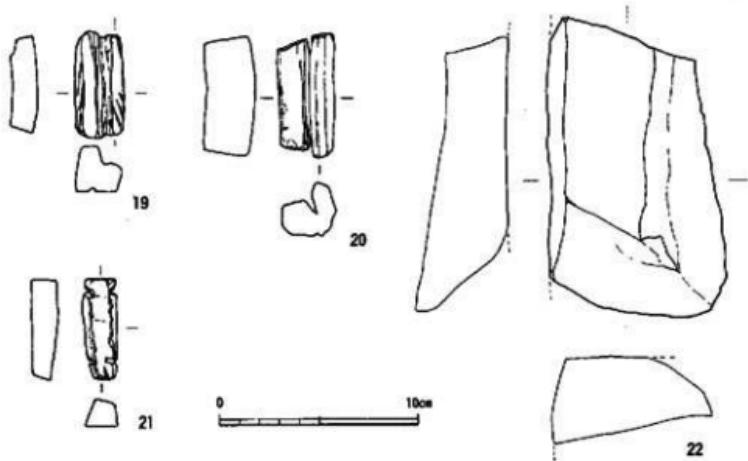


Fig. 148 1500号遺構出土遺物実測図2 (1/3)



Fig. 149 1566号遺構（南より）

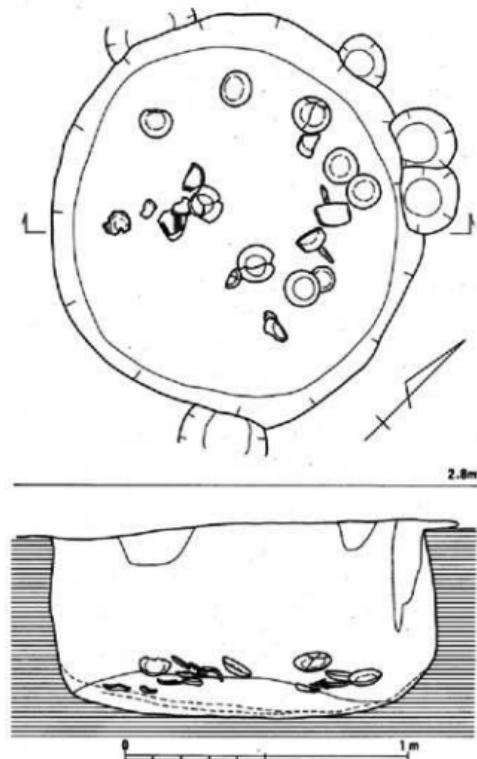


Fig. 150 1566号遺構実測図（1/20）

### 1566号遺構

第4面Q—4区より検出した土壇である。長径150cm、短径134cmの椭円形を呈し、深さは約70cmをはかる。

埋土下位より、遺物が出土した。

出土遺物は、土師器・瓦質土器・青磁・土錐・石硯等である。1～26は、土師器である。1～7は、皿である。1は、口径がひときわ小さいのに対し、器高は高い。口径6.8cm、器高1.5cm。

2～7は、口径7.5～8.5cm、器高1.2～1.5cmをはかる。8～25は、壺である。口径12.0～13.0cm、器高2.5～3.1cm。皿・壺は、すべて回転糸切りで、体部・内面は回転ナデを行なう。2・5・6・10・13・14・20の内底部には、さらにナデ調整が行われる。27・28は、青磁である。龍泉窯系の鎬蓮弁文碗である。29～31は、瓦質土器の鉢である。29には、7本単位のすり目が刻まれている。32～34は土錐である。32の表面には、指頭圧痕・掌紋が残る。35は、粘板岩製の硯片である。陸の部分は、使用のために若干へこんでいる。

1566号遺構の年代としては、13世紀前半を考えたい。

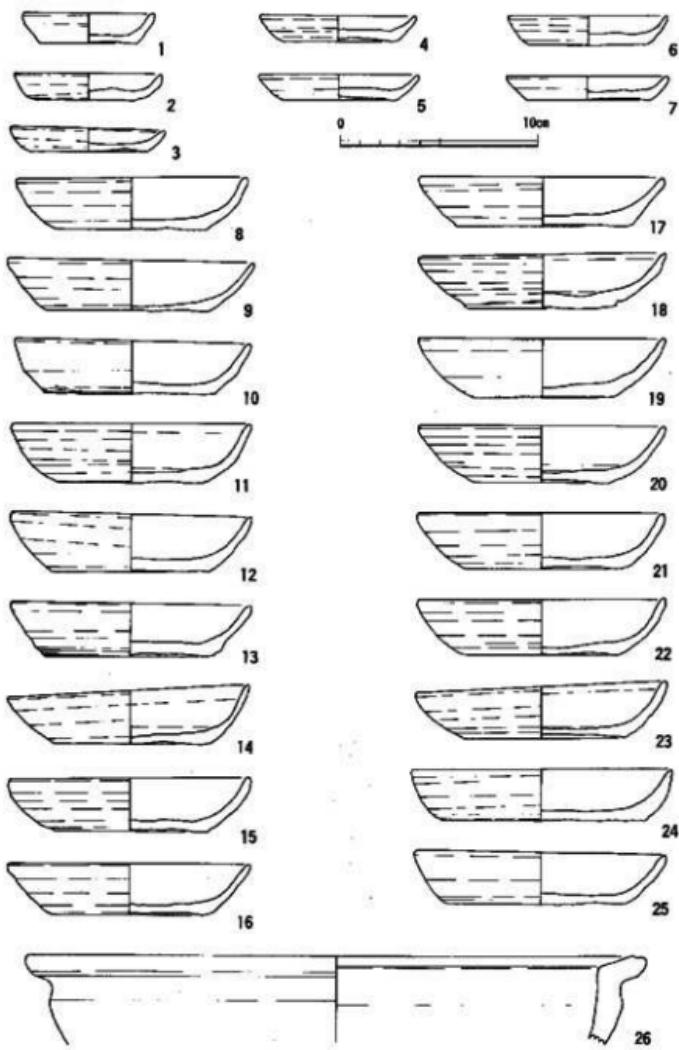


Fig. 151 1566号造構遺物実測図 1 (1/3)

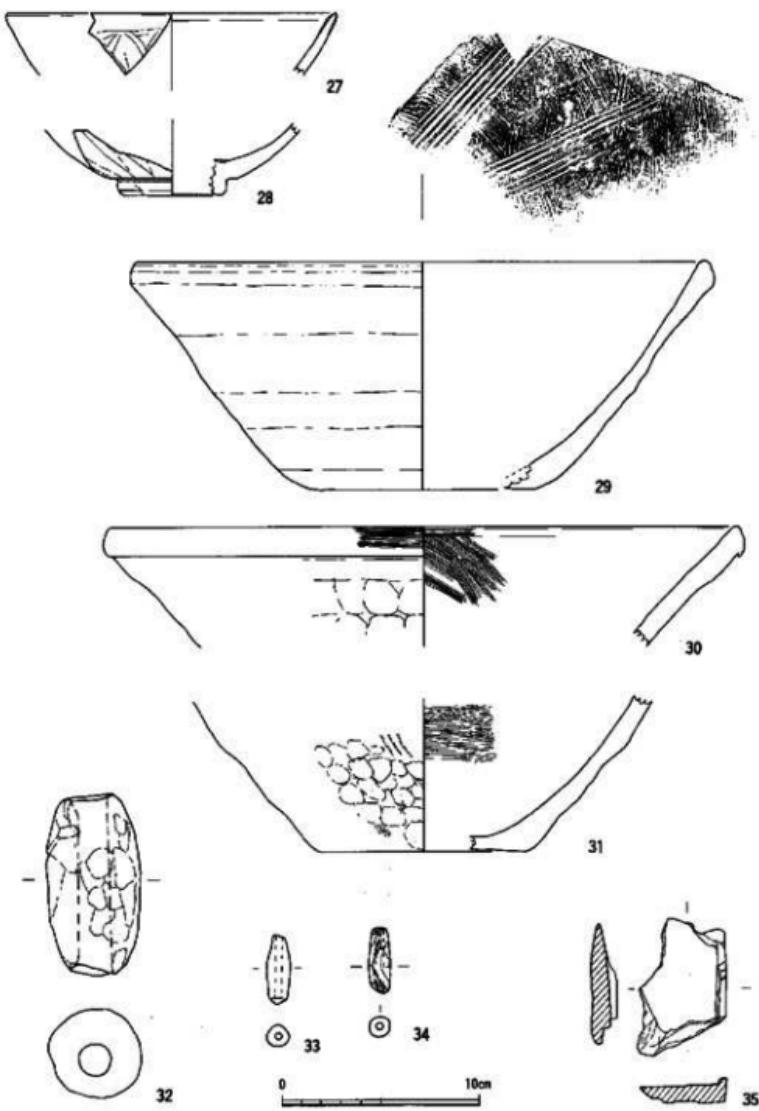


Fig. 152 1566号墓出土遺物圖 2 (1/3)

### 1567号遺構

第4面R—4区より検出した土壤である。長軸98cm、短軸90cmの橢円形のプランに、深さは24cmをはかる。土壤埋土の下位から中程にかけて、遺物が出土している。

出土遺物は、土師器・青磁・白磁・楠葉型瓦器片等である。楠葉型瓦器塊片は、Ⅰ期のもので、混入品である。1~10は、土師器である。1~5は皿で、形態から、2タイプがある。1・3・4は、比較的薄手の体部が、内湾しつつ高く立ち上るもので、口径7.4~8.3cm、器高1.4~1.9cm。2・5は、肉厚の体部を持つ浅皿型のもので、口径8.1~8.7cm、器高1.2~1.4cmをはかる。6~10は壺で、口径12.2~13.2cm、器高2.4~2.8cmをはかる。すべて糸切り。1・8のみ内底をナデる。11は、口ハゲの白磁である。



Fig. 153 1567号遺構（北より）

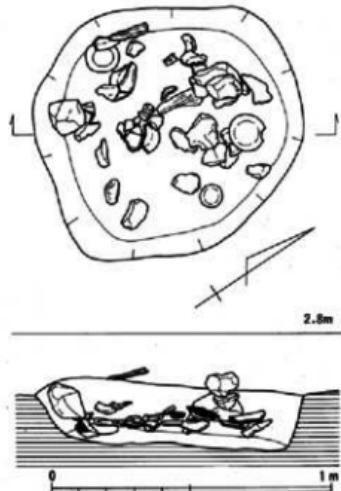


Fig. 154 1567号遺構実測図（1/20）

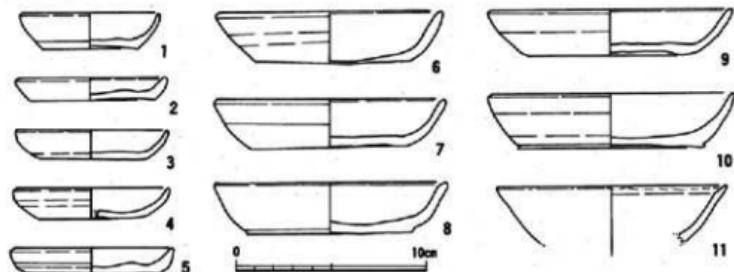


Fig. 155 1567号遺構出土遺物実測図（1/3）

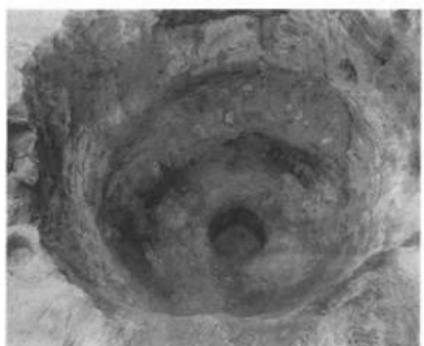


Fig. 156 1606号遺構 (南より)

### 1606号遺構

第4面N-4・5区より検出した井戸である。径約3mの円形の掘りかたに、径約50cmの木桶をおいて、井側とする。

出土遺物は、1…土師器、2…土錠、3～5…白磁、6～10…青磁、11～13…青白磁、14～15…褐釉陶器、16～18…瓦質土器、19～20…東播系須恵器である。

1の底部は回転糸切りする。4・9の高台内側には墨書きがみられる。同一の花押であろう。5は口ハゲにつくる。

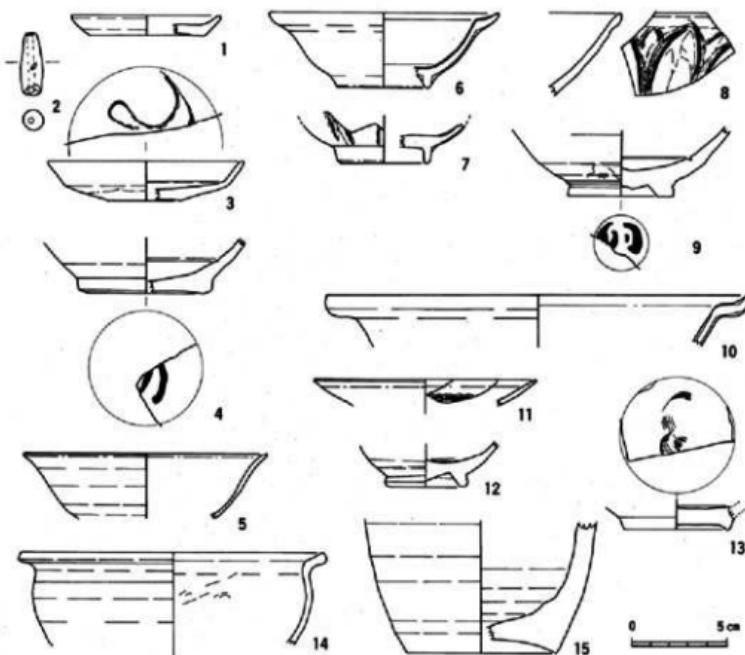


Fig. 157 1606号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

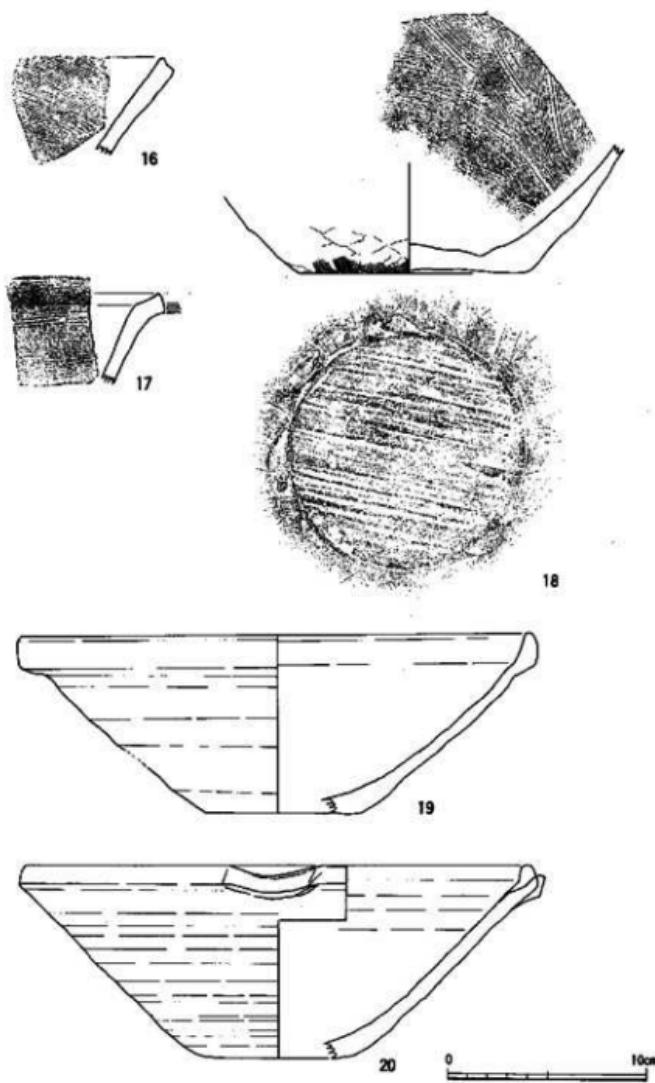


Fig. 158 1606号墓出土遗物实测图 2 (1/3)

### 1611号遺構

第4面S-3・4区より検出した土器である。大半は調査区外に出ると思われる。長軸方向で約1.5mを調査している。短軸は約1.2m、深さは73cm前後をはかる。

出土遺物は、土器・青磁・白磁・須恵質土器・ふいご羽口等である。1~6は、土器である。1~4は皿で、口径7.4~8.4cm、器高1.3~1.5cmをはかる。5・6は、壊である。それぞれ、口径12.0、13.2cm、器高2.15、2.55cmをはかる。底部はすべて回転糸切りで、体部・内面は、回転ナデ調整を施す。3・4・6の内底部は、さらにナデ調整される。7~10は、青磁である。10の底部には墨書があるが、字画の下半を欠き、判読不能。11は、ベトナム産青磁である。高台は蛇目状に作り、高台際まで施釉する。見込みには、ツメの土が付着している。12・13は土鍋である。14・15は瓦質土器の鉢である。15には、すり目が刻まれる。

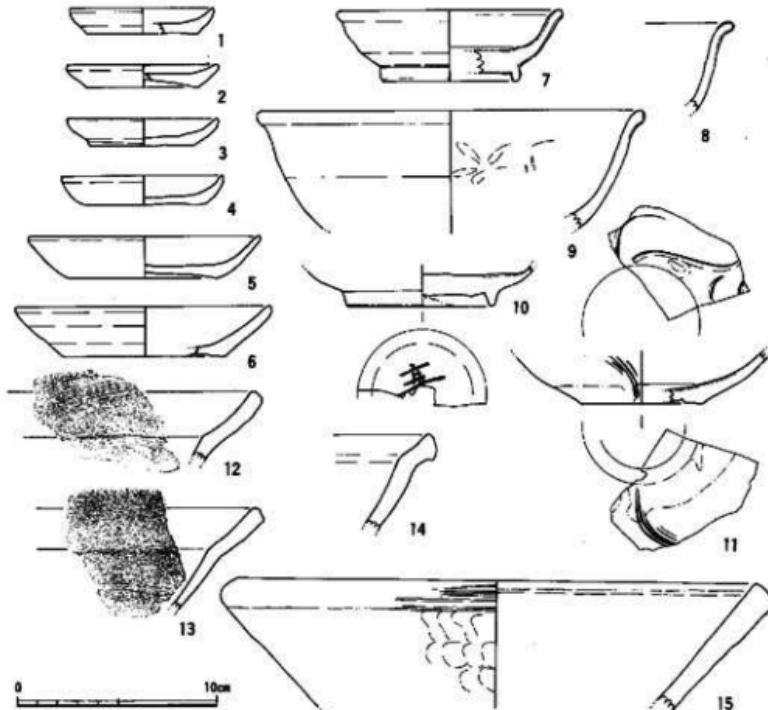


Fig. 159 1611号遺構出土遺物実測図 (1/3)

### 1760号遺構

第5面X—5区より検出した井戸である。長径155cm、短径125cmの卵形を呈する掘りかたに、径約70cmの井側をおく。

井側は、木桶である。

出土遺物は、土師器・須恵質土器・黒色土器・白磁・青磁等である。土師器の皿・坏は、外底部を糸切りする。おおむね、12世紀後半におかれるものである。



Fig. 160 1760号遺構（南より）

### 1832号遺構

第5面U—5区より検出した井戸である。長軸290cm、短軸190cmの不整椭円形の掘りかたに、径約70cmの木桶を置いて井側とする。

出土遺物は、土師器・黒色土器・須恵質土器・瓦質壇・白磁・青磁等である。

12世紀後半の遺構であろう。

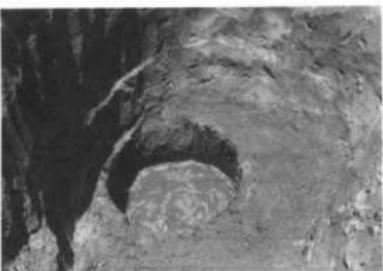


Fig. 161 1832号遺構（東より）

### 1834号遺構

第5面X—4区より検出した木棺墓である。半分以上が調査区外であったが、この部分のみ調査区を拡張して、掘りあげた。

掘りかたは、長辺200cm、短辺80cmの隅丸長方形を呈し、深さは16cm以上はあったであろう。木棺は、木質は完全に腐朽して残っていないが、棺材を留めたと思われる鉄釘が、原位置を留めて点々と出土しているので、大方は推定できる。それによると、長辺約145cm、短辺約45cmの長方形である。深さは不明。この場合、木棺の南東隅は、掘りかたにくい込んでしまうが、これは、掘りかたの検出ミスによるものであろう。

人骨は、脚をかるくまげた仰臥伸展葬である（2号人骨）。曲げた右脚の丁度内側から、別個体の頭骨片が出土した（4号・5号人骨）。2号人骨そのものとは全く重複しないが、推定される木棺の位置などから考えると、1834号遺構に先行するものであろうか。

棺内の左上腕横に鉄製短刀1本(Fig. 164—7)、棺外に龍泉窯系青磁碗1口(6)、土師器皿5枚(1～5)が副葬されていた。皿は、外底を回転糸切り、内底部をナデ調整するものである。

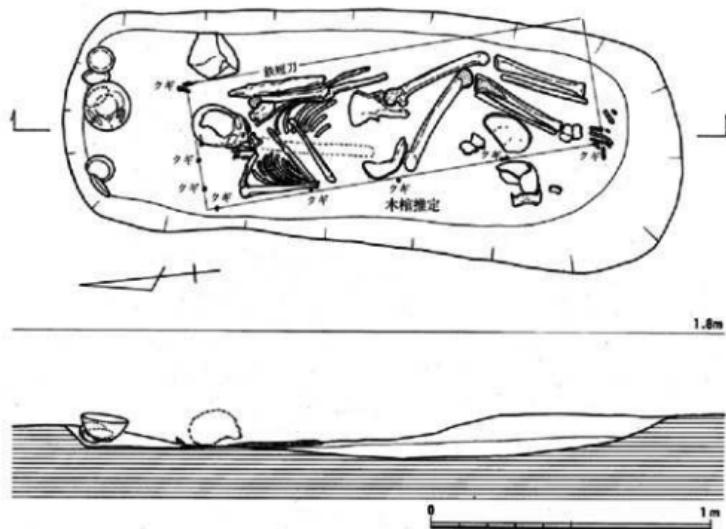


Fig. 162 1834号遺構実測図 (1/20)



Fig. 163 1834号遺構 (南西より)

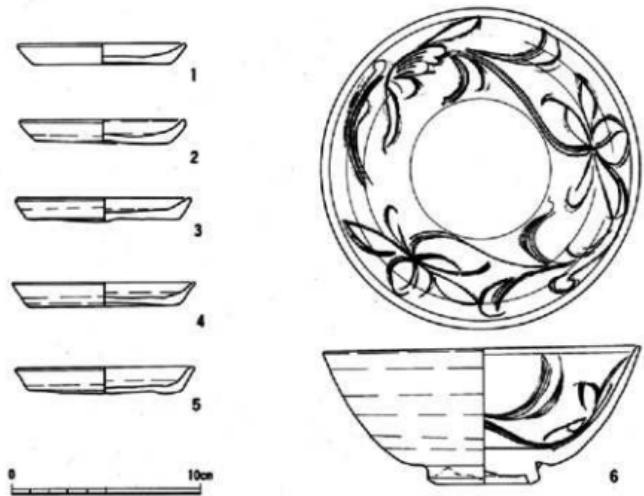


Fig. 164 1834号造構出土遺物実測図 (1/3)

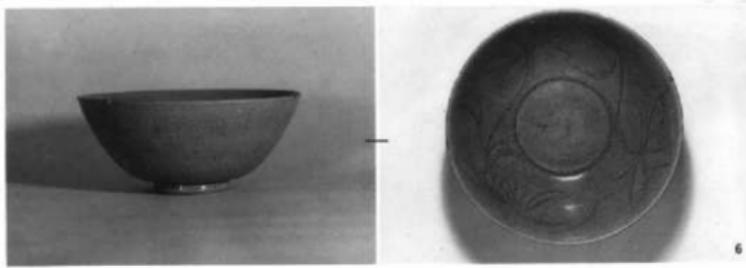


Fig. 165 1834号造構出土遺物

## 6. 古代の遺構・遺物

### 1135号遺構

第4面S・T—7区で検出した、不整形の土壙である。深さ約25cmをはかる。

出土遺物は、土師器・「て」の字状口縁土師器皿・白磁・瓦等である。1は「て」の字状口縁土師器皿である。手探ねによるもので、淡橙色を呈する。2は白磁である。

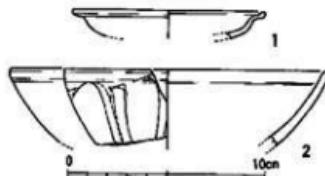


Fig. 166 1135号遺構出土遺物実測図 (1/3)

### 1688号遺構

第6面R—6区で検出した柱穴である。

出土遺物は、土師器・内黒土器・黒色土器・土錘である。土師器は、底部をヘラ切りする。1は、在地産の内黒土器である。体部内面は密にヘラ磨き。外面は横ナデする。2は、楕葉型黒色土器である。3は、在地産の黒色土器である。見込みは、ジグザグ状にヘラミガキする。4は、土錘である。

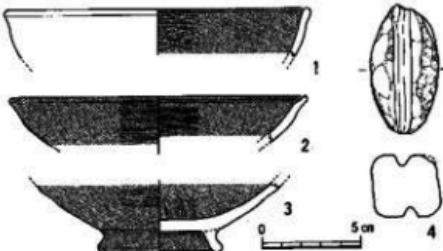


Fig. 167 1688号遺構出土遺物実測図 (1/3)

### 1700号遺構

第6面Q—6区より検出した柱穴である。

出土遺物は、内黒土器・黒色土器である。1は、内黒土器である。外面は分割ヘラミガキ、内面は体部を分割ヘラミガキ、見込みを平行ヘラミガキする。2・3は、黒色土器である。2の高台は高く、外方に張る。外底部には、ヘラ切り痕が残る。3の高台は、低平である。ヘラミガキの単位は細かい。

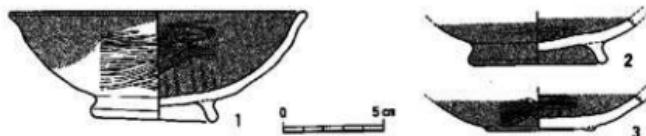


Fig. 168 1700号遺構出土遺物実測図 (1/3)

### 1740号遺構

第6面N—5区、O—4・5区より検出した地下室状の土壙である。他の遺構に切られ、全容はうかがえないが、長辺4m以上、短辺3.2m、深さ0.8mの長方形を呈する。底は、平坦である。出土遺物は、1～3…土師器、4…内黒土器、5…黒色土器、6・7…白磁、8…土鍾、9…石權である。1は皿で、底部はヘラ切りする。3の内面には、コテあてがなされる。4・5の内面は密にヘラミガキされる。5の高台内面の傾斜は、回転ヘラケズリで面取りされる。9は滑石製で、一部に煤がみられ、石鍋の再加工品とも考えられる。

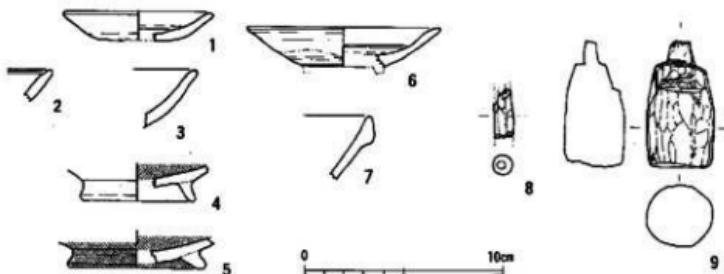


Fig. 169 1740号遺構出土遺物実測図 (1/3)

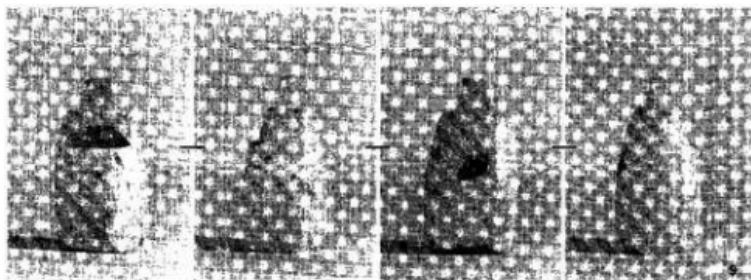


Fig. 170 1740号遺構出土遺物

### 1758号遺構

第6面I—4・5区で検出した人骨である(3号人骨)。人骨の周囲は、地山砂にわずかに汚れがみえ、一応土壙を想定して調査した。しかし、これを土壙(土壤墓)と考える根拠は全くみつからず、土壙の有無そのものもあいまいである。人骨は、腕を前に組む様にして、うつ伏せになっており、この点も埋葬遺構出土例とは異なる。一応、土壙かとした部分は、長軸2.2m、短軸0.74mの浅いくぼみ状を呈する。副葬品にあたる遺物の出土はない。

3号人骨周囲の若干汚れた砂（土壤？）から、ヘラ切りの土師器片、内黒土器片が出土した。この点から、3号人骨は11世紀代に置くのが妥当であろう。



Fig. 171 1758号遺構（東より）

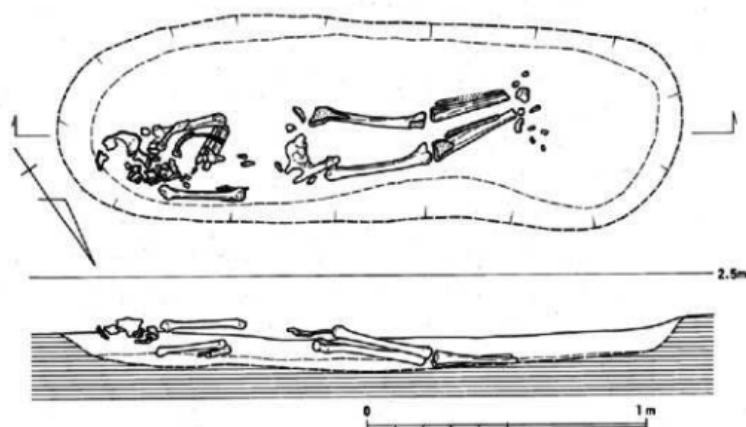


Fig. 172 1758号遺構実測図（1/20）

## 7. その他の遺物

前節までは、主要な遺構ごと、あるいは遺物のセットがある程度注目されるものを、遺構単位で、簡略ながら述べてきた。これにもれた遺物は多く、その中には重要なものも少くない。そこで、目についた遺物を中心に、若干の紹介を行なう。

1~4は、調査区東壁の南側の最下黑色泥層中に含まれていた土師器である。1はヘラ切りである。2・3は回転糸切りで、いわゆる豊前タイプの壺である。4は壺であるが、内面には、ヨコナデの上にヘラミガキがなされている。5は黒色土器である。6は、嵌入の土師皿である。白褐色の土器で、口縁を片口につくり、ここに煤が付着する。灯明皿として用いられたものである。7の土師皿は、山口県の大内館などで出土する皿と類似するが、色調は茶色で、器肉厚く、在地において作られた模倣品と考えたい。これに対して8は、色調は肌橙色で胎土が良く、器壁もうすい。大内タイプの嵌入品であろう。9~11は、灰釉陶器である。10・11の外底部には、回転糸切り痕が残っている。12~14は、瀬戸美濃系の陶器である。12は灰釉の小皿で、完形品。13は、鉄釉の天目茶碗である。体部下位の露胎部には、鉄化粧が施される。14は、灰釉の香炉である。15~19は、青磁である。15は、外底高台内を蛇の目状に釉切りする。17は、底

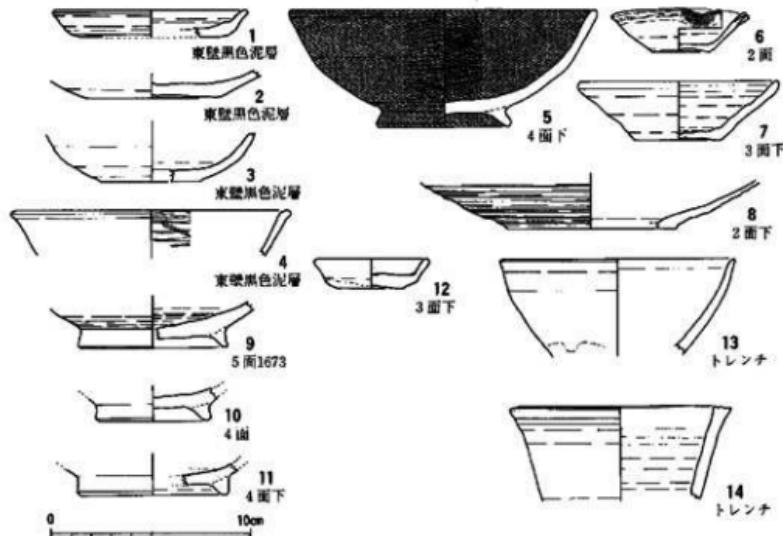


Fig. 173 その他の遺物実測図 1 (1/3)

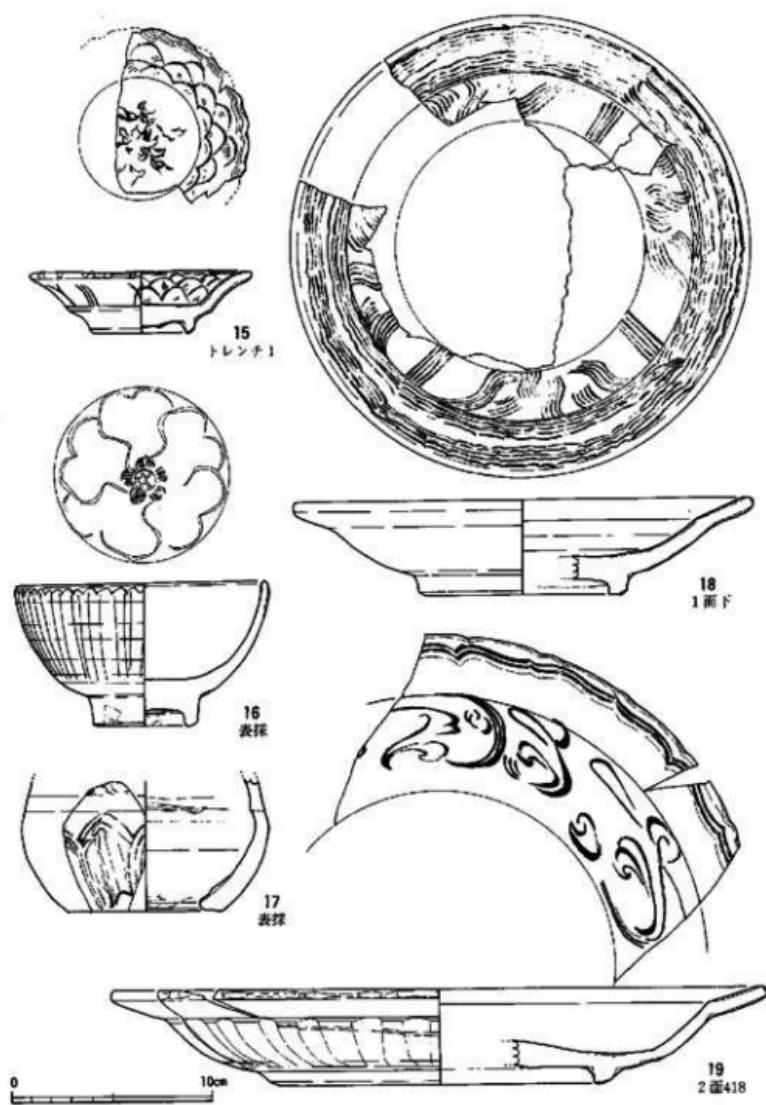


Fig. 174 その他の遺物・尖底図 2 (1/3)

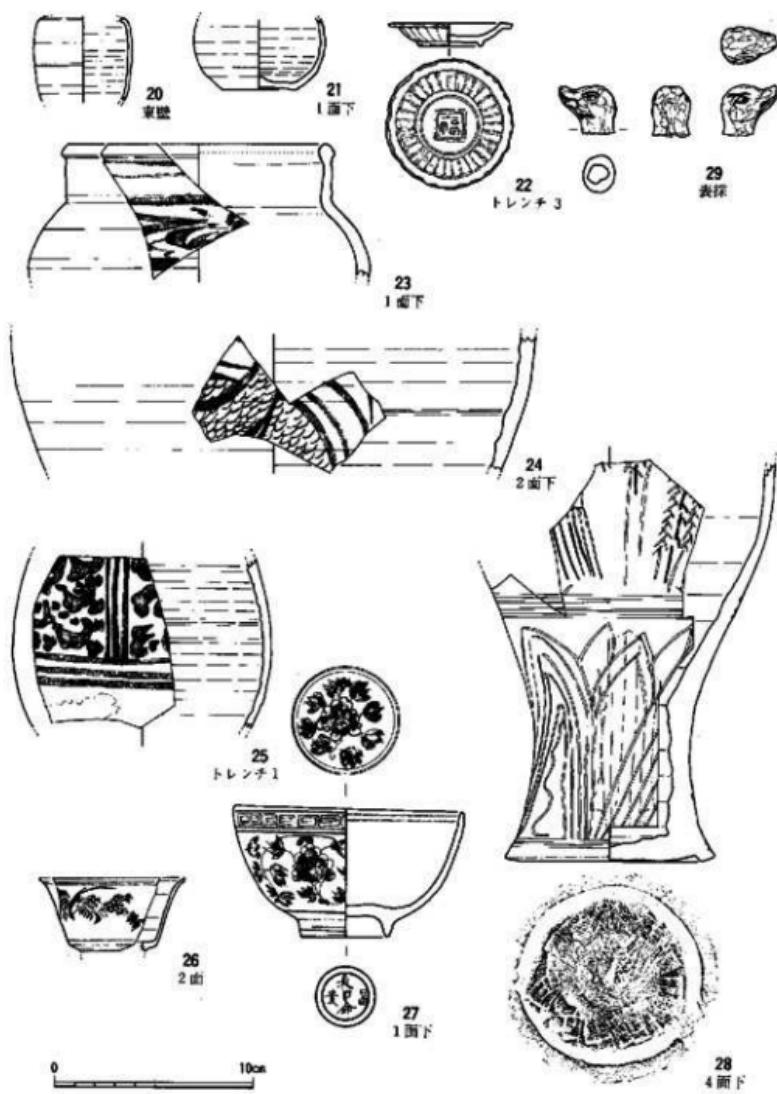


Fig. 175 その他の遺物実測図 3 (1/3)

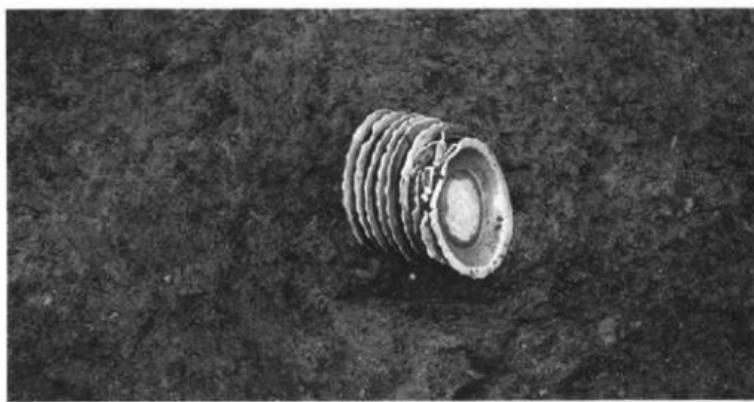


Fig. 176 青釉陶器皿出土状況（東西トレンチ）

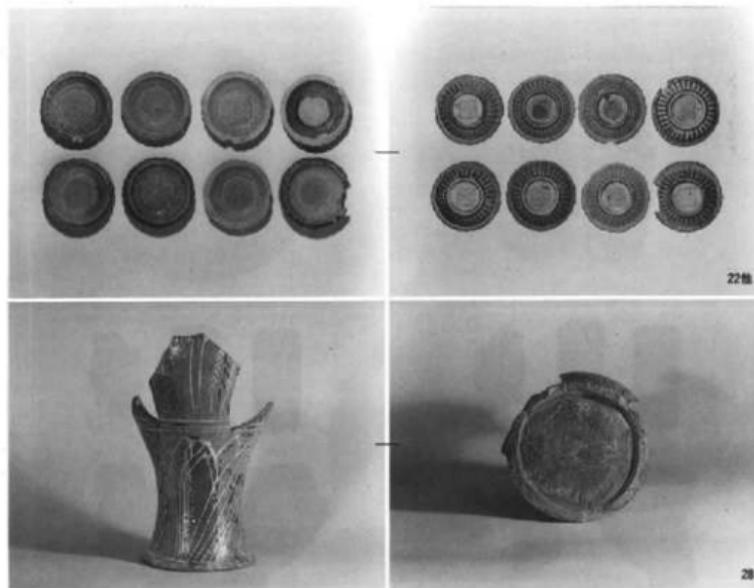


Fig. 177 その他の出土遺物 1

をつくらず、丸くおさめる。20・21は褐釉陶器の茶入である。22は、青釉陶器の小皿である。第1面において設定した東西方向のトレンチ内から出土した。13枚が重なって倒れており(Fig.176)、遺構中におかれていたものと推測される。同形の型造りだが、外底の「福」字に違いがあり、型からはすす際のひずみを考慮しているも、いくつかの型が用いられている(Fig.177)。23は、白釉鉄絵陶器である。24は、青釉鉄絵陶器の壺である。25は、タイ白釉鉄絵陶器の瓶である(Fig.178)。釉下には、白化粧を施す。26・27は、明代の染付である。28は、李朝の象嵌青磁の梅瓶である。外底部には、外底を削り込んだ際のノミ痕が明瞭に残っている。29は、華南三彩陶のアヒル頭部である。型造り。30(Fig.178)は、銅製の鏡である。径は11.15cm、縁部で厚さ0.63cmをはかる。31は、鏡の小札である。鉄製で、黒漆がかけられている。縁皮等はみられない点、小札があちこちに向いて銷びついている点から、鏡としては未製品である。小札頭部を丸く2つに分割した、基石頭の伊予札とよばれているものにあたる。小札の長さ6.55cm、頭部幅2.6cm、基幅2.4cmをはかる。武具・武器類では、この他、刀のはばき金具が出土している。銅製である。

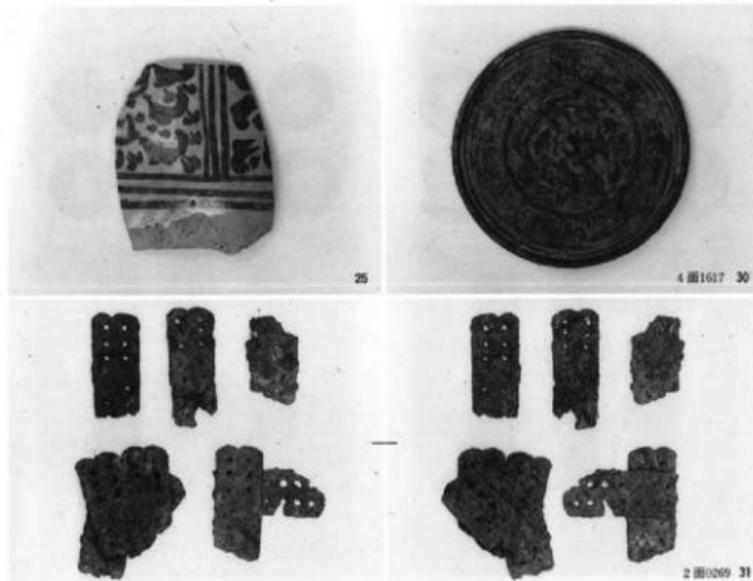


Fig. 178 その他の出土遺物 2

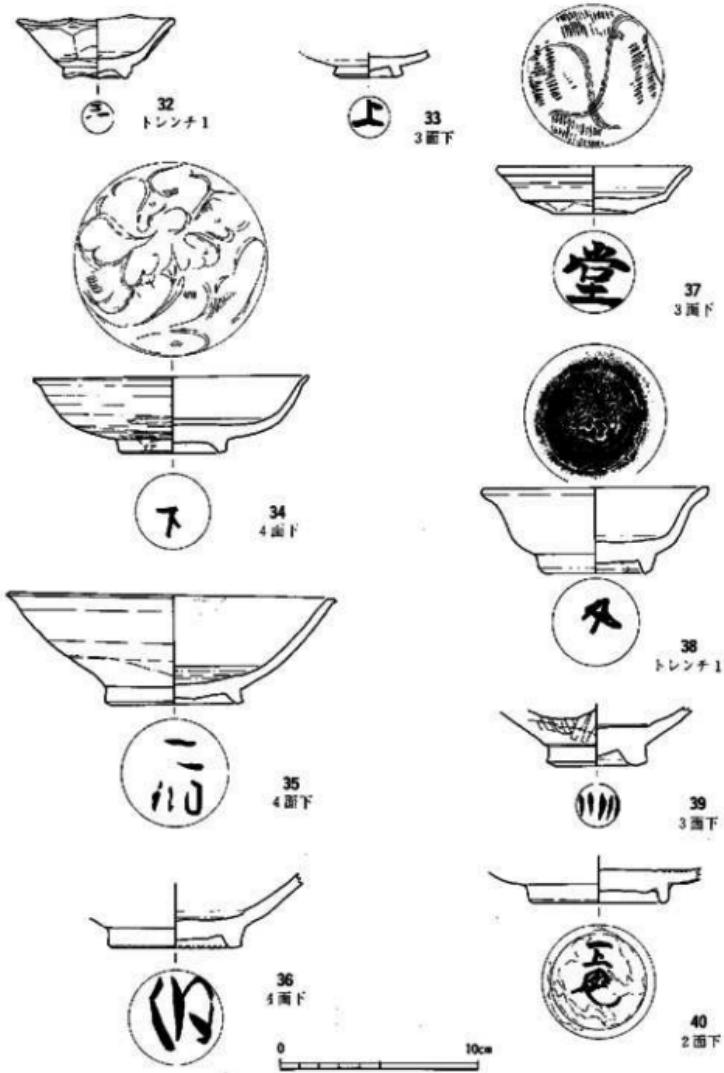


Fig. 179 その他の遺物実測図 4 (黒写) (1/3)

Fig.179に示したのは、墨書き陶磁器である。32～36は白磁、37～40は青磁である。32は、たて棒の有無がはっきりとは見えず、「三」または「下」、33は「上」、34は「下」、35は「二綱」、36は「綱」、37は「堂」、38は花押、39は横にたて棒が5本ならび五十か、40は「王」の下に花押をつづける。この他、墨痕はみえるが、判読不明のものがある。

### 銅錢

第42次調査では、全部で274枚の銭が出土した。この内、江戸時代以前の銅錢は271枚で、その約48%が銘文を解読できなかった。銘文が判読できた140枚についてその内訳をみると、北宋よりも以前の銭…8枚、北宋銭…102枚、南宋銭…2枚、明銭…17枚、江戸時代の日本銭…11枚となる。北宋銭が圧倒的に多いのは、博多遺跡群では共通の様相である。また、「五銖銭」が2枚出土しているのは、本調査地点からは11世紀以後の遺構・遺物しか検出されない点を考えれば、「五銖銭」もまた中世になって得来されたことを示すものであろう。

表1 出土銅錢一覧

銭貨名	時代	初鑄	数	銭貨名	時代	初鑄	数		
五銖銭	後漢	後	漢	2	元豐通寶	北宋	元豐元年	1078年	7
開元通寶	唐	武德4年	621年	5	元祐通寶	北宋	元祐元年	1086年	6
開通元寶	後周	顯德2年	955年	1	紹聖元寶	北宋	紹聖元年	1094年	7
太平通寶	北宋	太平興國元年	976年	8	元符通寶	北宋	元符元年	1088年	3
淳化元寶	北宋	淳化元年	990年	1	聖宋元宝	北宋	建中靖国元年	1101年	2
至道元寶	北宋	至道元年	995年	2	大觀通寶	北宋	大觀元年	1107年	2
咸平元寶	北宋	咸平元年	998年	1	政和通寶	北宋	政和元年	1111年	6
景德元寶	北宋	景德元年	1004年	2	宣和通寶	北宋	宣和元年	1119年	3
祥符元寶	北宋	大中祥符元年	1008年	8	紹定通寶	南宋	紹定年間	1228年	1
祥符通寶	北宋	大中祥符元年	1008年	3	景定元寶	南宋	景定年間	1250年	1
天禧通寶	北宋	天禧元年	1017年	3	洪武通寶	明	洪武元年	1368年	8
天聖元寶	北宋	天聖元年	1023年	6	永樂通寶	明	永樂6年	1406年	9
皇宋通寶	北宋	寶元2年	1038年	20	宣永通寶	江戸	寛永13年	1636年	11
至和元寶	北宋	至和元年	1054年	1	嘉慶通寶				1
嘉祐元寶	北宋	嘉祐元年	1056年	2	明治通寶	明治			2
嘉祐通寶	北宋	嘉祐元年	1056年	1	昭和通寶				131
治平元寶	北宋	治平元年	1064年	2					
熙寧元寶	北宋	熙寧元年	1068年	6					274
				総計					



五 銖  
第1面147



五 銖  
第4面1139



開元通寶  
第3面770



周元通寶  
第3面636



太平通寶  
第3面



太平通寶  
第4面1056



至道元寶  
第2面242



成元通寶  
第4面1477



淳化元寶  
第3面645



景德元寶  
第4面下



祥符元寶  
第3面下



天聖通寶  
第3面



天聖元寶  
第2面967



皇宋通寶  
第3面968



至和元寶  
第2面968



嘉祐元寶  
第2面966



聖宣元寶  
第3面970



昭聖通寶  
第5面1019



大聖通寶  
第4面



政和通寶  
第4面



政和通寶  
第4面下



紹定通寶  
第3面1067



(同左)  
聖通寶  
第2面



景聖通寶  
第2面1068



令聖通寶  
第2面1068

Fig. 180 銅錢拓本 (1/1)

表2 銅錢出土遺構一覽

檢出面	出土遺構	錢貨名數	檢出面	出土遺構	錢貨名數
I面	0003	祥符元寶 1 解說不能 1	II面	0314	洪武通寶 1 解說不能 2
	0083	祥符通寶 1 解說不能 2		0317	解說不能 1
	0112	寃永通寶 2		0333	太平通寶 1
	0128	解說不能 1		0423	開元通寶 1 解說不能 2
	0145	太平通寶 1 聖宋元寶 1 解說不能 1		0424	開元通寶 2 皇宋通寶 4 水樂通寶 5 解說不能 1
	0147	五銖 1 解說不能 2		0436	解說不能 1
	0156	寃永通寶 1		0438	解說不能 1
	0175A	寃永通寶 1		0445	解說不能 1
	0179	寃永通寶 1		0449	解說不能 1
	0182	解說不能 2		0451	皇宋通寶 1 解說不能 3
	0187	洪武通寶 1		0457	開元通寶 1 景定元寶 1 解說不能 4
	0192	洪武通寶 1		0463	天聖元寶 1 解說不能 1
	0217	天聖元寶 1 皇宋通寶 1 解說不能 1		0466	熙寧元寶 1 嘉祐元寶 1
	0237	模鑄錢 1		0477	解說不能 1
II面	0242	至道元寶 2 至和元寶 1 嘉祐通寶 1 治平通寶 1 元豐通寶 1 元祐通寶 2 解說不能 9	III面	0491	大觀通寶 1
	0257	元祐通寶 1		0500	解說不能 1
	0304	寃永通寶 1		0517	解說不能 3
				0518	解說不能 1
				0576	解說不能 1
				0580	祥符元寶 1

檢出面 III面	出土遺構	錢貨名數	檢出面 IV面	出土遺構	錢貨名數
	0596	解說不能 2		0770	政和通寶 2
	0599	皇宋通寶 1			永樂通寶 1
	0619	解說不能 2			解說不能 2
	0628	解說不能 1		0846	解說不能 1
	0629	解說不能 1		0905	皇宋通寶 1
	0630	天聖元寶 1		0914	解說不能 1
	0633	解說不能 2		0950	祥符元寶 1
	0636	周通元寶 1			景德元寶 1
	0645	淳化元寶 1			治平元寶 1
		解說不能 1			元豐元寶 1
	0682	解說不能 1		0965	政和通寶 1
	0688	洪武通寶 1			解說不能 1
	0690	解說不能 3			天祐通寶 1
	0691	聖宋元寶 1			解說不能 1
	0699	紹聖元寶 1		1056	太平通寶 1
	0703	皇宋通寶 1		1139	五銖 1
		解說不能 3			祥符元寶 1
	0710	開元通寶 1			皇宋通寶 1
		解說不能 2			宣和通寶 3
	0735	祥符元寶 1			解說不能 1
		天聖元寶 1		1141	天聖元寶 1
		紹聖元寶 1			解說不能 1
		解說不能 3			1309
	0755	解說不能 1			元祐通寶 1
	0767	紹定通寶 1			解說不能 1
	0769	解說不能 1		1465	皇宋通寶 1
	0770	開元通寶 1		1477	咸平元寶 1
		皇宋通寶 3		1481	解說不能 1
		熙寧元寶 2		1566	解說不能 1
		元豐通寶 1		1608	解說不能 1
		元祐通寶 1		1816	解說不能 1
				1819	元豐通寶 1

## 第3章 まとめ

博多遺跡群第42次調査の概要について、若干の遺構を中心に述べてきた。報告書の末尾にあたって、調査成果をまとめるとともに、これまで触れられなかった問題点について私見を述べておきたい。

### 調査成果の総括

1. 本調査は、いわゆる「息の濱」における最初の本格的な発掘調査であり、「息の濱」の内陸側の斜面が検出された。
2. 本調査では、11世紀前半から現代にいたる遺構が調査された。「息の濱」に初めて生活が営まれたのは、11世紀前半であるが、その後、全く遺構のみられない時期がある。継続して遺構が営まれ、「息の濱」が博多の街に取り込まれたと考えられるのは、12世紀後半以降のことである。
3. 鎌倉時代後半以降中世を通じて、本調査区では、N 37°45' - Wをとる町割りが行われていた。これは、従来の調査で確認されている道路遺構などの示す方向とは全く異なっており、砂丘を界にして、異なる町割りが取られていたことを示している。
4. 本調査では、14世紀から16世紀までの豊富な遺物が出土した。かつては、博多遺跡群においては、15世紀以後の遺物はほとんど出土しないと言わってきた。最近になって、市街地の再開発の進行とともに調査地点も増加・拡散し、この時期の遺構・遺物の調査例も蓄積されつつある。本調査区の位置する「息の濱」は、まさにこの時期に最盛期を迎えた地域であり、多彩な遺物は、そのことを物語っている。とりわけ、タイの無釉陶器には注目したい。これは、赤茶けた焼き締め陶器で、注意して見ないと見過ごしてしまいそうなものである。今後、類例は増加するものと考えられる。

### 第42次調査地点の立地および中世以前の状況

第42次調査地点の立地については、これまでに触れてきたところである。そこで、ここでは時代を追って、再整理をするとともに、本調査地点が、古代末～中世の貿易都市「博多」に組み込まれるにいたるまでの状況について、憶測をまじえてまとめてみたい。

「息の濱」がいつから砂丘として博多湾に頭を出していたのかは、今のところ不明である。前章で説明したE層は、砂丘背面の砂層で、高潮時には海水をかぶるような、湿地性の水つき層である。D層は、人為的な埋立て層の可能性が指摘されている。D層中には、10世紀後半か

ら11世紀前半と思われる遺物が、少量だが混入している。また、D層が砂丘傾斜面を上がって続いていると考えられる第6面では、11世紀前半の遺構が検出されている。この点から見て、10世紀後半以前には、「息の濱」は、海面上に姿を現していたものの、高潮のときには波に洗われるような状態であったことがわかる。第6面で調査された柱穴が、いかなる施設を意味するものかは不明だが、柱穴の大きさ、不規則な配列などからして、あまり大がかりな建物は想定できない。作業用の仮小屋程度のものであったと思われる。また、11世紀前半の遺構が、調査区のほぼ中程に限られていることは、この段階では、博多の市街が未だここまで及んでいなかったことを示している。さらに、第6面で遺構を検出しているのが、「息の濱」の内陸側の斜面に当ることに注目しておきたい。これは、砂丘前面に立地した際に予想される風害・水害を嫌ったためであろう。

なお、第6面で検出した柱穴からは、小片ではあるが、かなりの割合で楠葉型の黒色土器B類が出土している。時間的な制約から定量化していないが、柱穴出土遺物の5~6割は黒色土器B類で、そのうち4~5割は楠葉型である。また、10点には満たないが、「て」の字状口縁の土師器皿も出土している。これらは、近畿地方から搬入された土器であり、それが高い割合で出土するということは、この地点に近畿地方からの人間の移動があったことを示していると思われる。それは、おそらくは、瀬戸内海を通って物資の流通に携わった水運業者であったろうし、その舟を操った水手・船頭たちであったろう。博多を目指した彼等の舟が投錨したのが、直接に風濤を受けることのない、砂丘と砂丘の間の入り江であったことは想像にかたくない。また、商人・船頭はさておき、水手らが市街地内には入らず、博多の町と対照し、しかも自分たちの舟にはほど近い陸地に投宿したとしても不思議はない。こう考えると、先に作業小屋とした第6面検出の遺構は、実は、彼等水手が設営した一時的な宿泊のための仮屋と見ることもできるであろう。

第5面を乗せているC層は、風成砂層であり、C層が堆積した段階には、周辺には、砂がまつて堆積するのを妨げるものはなかったことを示している。また、第6面から第5面までの間に、遺構は全く見られない。したがって、11世紀前半に一時的に砂丘斜面の仮設の作業小屋がたてられた後も、第5面に遺構が當まるようになる12世紀後半まで、本調査地点には人間生活の営みはなく、放置されていたと考えられる。

第5面において検出された遺構は、柱穴・井戸・木棺墓などである。そのあり方は、当時すでに博多の市街を形成していた、内陸部砂丘上の遺構と変わりなく、12世紀後半には、すでに「息の濱」にまで博多の市街が拡大してきたことを示している。この12世紀後半の時期には、両砂丘の間に陸橋状の部分ができ、そこにも木棺墓や溝などが見られる。この陸橋の両側は、16世紀の末まで、湿地のまま残されたのだが、両砂丘がつながったことによって、「息の濱」

の開発が急激に進んだであろうことは、本調査地点の13世紀以後の遺構の密度を見れば容易に推測ができるのである。

### 中世の町割りについて

第42次調査で検出された遺構で、溝・列状集石などは、明かに共通する一定の方位を取っている。もちろん、若干のバラつきはあるが、おおむね N—37°45'—W を示している。ところで、これまでに60次以上の調査例を蓄積している。内陸部砂丘においては、砂丘を縦貫するメインストリートが検出されている。<sup>註2</sup> この道路は、13世紀末から16世紀末まで存続したもので、時代ごとに若干のふれはあるが、平均して、N—64°—W をとっていた。また、これに交差する同時期の道路は、N—48°—51°—E を示していた。<sup>註3</sup> この両者は直交していないのであるが、今回想定された町割りの方位は、これらのいずれとも全く異なるものであり、むしろ、「息の濱」の砂丘の軸線に平行していると思われる。内陸部砂丘でこれらの道路が通されたのは、13世紀末前後であり、この時点では、「息の濱」もすでに「博多」の一部となっているので、この方位の違いは、「息の濱」が遅れて市街に取り込まれたためではない。内陸部砂丘内の方位のずれとも合わせて考えると、この段階での町割りは、一定の基準に合わせたものではなく、それぞれの砂丘の地形に合わせて成されたものであると考えられる。あるいは、意図的なものというよりも、自然発生的な要素のほうが強いと見るべきかもしれない。

### 瓦経について

本文中で触れられなかったので、最後に瓦経について述べておく。第2面318号遺構から出土したもので、平成元年度に調査された隣接地（第60次調査）の包含層出土の瓦経片と接合することができた。66ページ、Fig.73に示した実測図で言えば、下端と断面両側の辺は、本来の小口面を留めている。胎土には、小砂粒を含み、須恵質に焼成され、明灰色を呈する。法華経卷第2—22の一部である。遺構の年代観に基づけば、16世紀の遺物ということになるが、それが直接的に瓦経の製作年代を示すかどうかは、不明である。

以上、博多遺跡群第42次調査の概要について述べてきた。膨大な量の出土遺物に対して、未だ整理作業すら完了してはいない。今回の報告は、かかる中途の段階での概要報告であることを改めてお断りしておきたい。

註1. 「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書、博多」福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集 福岡市教育委員会 1988

註2. 「博多12」福岡市埋蔵文化財調査報告書第177集 福岡市教育委員会 1988

註3. 「博多15」福岡市埋蔵文化財調査報告書第230集 福岡市教育委員会 1990

# 博多遺跡群第42次調査出土中世人骨

中橋孝博

九州大学医学部解剖第2講座

## はじめに

中世人については、鈴木尚による鎌倉材木座人骨の研究以来、若い長頭や低顎、強い齒槽性突顎といったその形態的特徴が、中世人の時代特性としてかなりの汎日本性を持っていることが次第に明らかにされてきた。しかしその一方で、地域や遺跡によってはかなりの変異もあることが知られ、博多でも少数ながらかなり高顎性の強い例が出土して、他とはやや異なる中世人の存在が示唆されている。

近世以降の急激な形質変化に、いわゆる「都市効果」といわれる生活環境による影響が想定されているが、博多という、商都、あるいは港町として長い歴史を持つ街の住人の特徴を探ることは、そうした文化要因が人間形質に与える影響を具体的に明らかにする上で、好個の事例になるものと期待される。

1989年春の福岡市教育委員会の発掘調査によって、また新たに4体の中世人骨が出土した。残念ながら今回の出土例は骨の遺存状況が非常に悪く、得られた知見も限られたものでしかなかったが、数少ない当地の中世人として貴重な追加例となるものであり、以下にその知り得たところを報告する。

## 遺跡・資料

1989年、福岡市綱場町（8丁目25番地）において、ビル建設に伴う発掘調査が実施され、計4体分の人骨が出土した（表1）。

表1. 博多第42次調査出土人骨

番号	性別	年齢	頭位	埋葬姿勢	時代	埋葬施設	副葬品
1	男	老年	北西	右側臥屈葬	12c 後半	木棺	青磁碗
2	男	老年	北	仰臥	12c 後半	木棺	青磁碗、土師皿、鉄刀
3	男	老年	南東	俯臥	11c 嘴	土壤？	なし
4	？	老年	（2号下肢右より出土）		12-13c？	-	-

木棺墓出土の2体はいずれも頭をほぼ北に向け、1号は右側臥屈葬、2号は仰臥位で見いだされた。共に青磁碗等の副葬品を伴っている。3号だけは、頭を南東にむけた俯臥位で見いだされ、副葬品は伴わず、墓壙も明確ではない。また、4号は2号人骨の右下肢近くから頭骨片だけ出土したものである。

所属時代は遺構の層位関係や伴出遺物から、ほぼ平安時代末期から鎌倉時代初め（12世紀後半—13世紀初め）にかけてのものと考えられている。

### 観察・計測結果

#### 1. 1号人骨（男性、熟年）

出土状況： 12世紀後半所属の木棺に埋葬されていた遺体で、体軸をほぼ北西に、顔面を西に向かって右側臥屈葬で見いだされた。右腕はまっすぐ下に伸ばし、左腕は肘をほぼ直角に曲げて、手を右前腕近くに置いている。下肢は共に強屈し、右に倒している。左前胸部に後世の攢乱の跡が見られるが、他はほぼ原埋葬位を保った状態と見なされる。なお、頭部に近接して青磁碗が副葬されていた。

性別・年齢： 骨盤形状、乳様突起を始めとする頭蓋の各筋付着部の発達度、四肢骨の太さ等、いずれも男性的特徴を見せてている。また、主縫合の愈合がかなり進行しており、かなりの歯が脱落、歯槽閉鎖して、咬耗も進行している（2-3度）ことなどから、熟年後半か、もしくは老年に達した遺体とみなされる。

形態所見： 全体的に骨質が脆弱化し、原型をとどめている部分も土圧によってかなり変形しているため、計測、観察所見の得られた部分は一部に限られた。

まず脳頭蓋については、出土状態のままの計測では、最大長は200mm近くに達するのに対し、最大幅は120mm以下と、かなり不自然な数値となっており、観察所見でも明かに土圧による変形が認められるため、正確な形状は掴み難い。ただ、そうした影響を考慮してもなお、かなりの長頭であった可能性が窺える。

顔面部は破損、小片化が著しいが、発掘時の計測で、以下の数値だけは得られた。

M47	顎高	126mm
M48	上顎高	74mm
M50	前眼窓間幅	15mm
F	鼻根横弧長	17mm

50/F	鼻根弯曲示数	88.2
M57	鼻骨最小幅	7.6mm

この結果をみると、頬幅は不明ながら、かなりの高額傾向が認められる。ちなみに山口県吉母浜の顎高、上顎高はそれぞれ117.3mm, 69.9mm(中橋・永井, 1985)、鎌倉材木座のそれは115.8mm, 64.7mm(鈴木, 1956)であり、当人骨は明らかにこれら同時代人を上回っている。ただ、同じ博多出土の26-2号人骨(各々122mm, 75mm, 中橋, 1989)には類似する。また、鼻根部にはかなり偏平な傾向が見られた。

四肢骨については残念ながら殆ど計測出来なかった。ただ、発掘現場での計測によって、大腿骨最大長:右405, 左402mm, 左上腕骨最大長282mmを得ている。いずれもかなり短く、例えば吉母浜中世人の上腕骨、大腿骨の各最大長は295.8mm, 419.1mm、より短い現代九州人でも295.3mm, 406.5mm(專頭, 1957; 阿部, 1955)であり、当人骨はこれらより明かに短い。ただ、計測は出来なかったが、骨幹部はかなり太いようであり、三角筋粗面の発達度や、大腿骨粗線の発達もこの時代のものとしては比較的良好であった。

表2 推定身長の比較(男性, Pearson法)

遺跡	推定身長	
	K	M
博多42次1号		157.4cm
2号		159.3
3号		162.1
平均	3	159.6
吉母浜(中世)	18	159.7
材木座(中世)	10	158.4
尾羅(中世) <sup>1)</sup>	5	158.4
天福寺(近世) <sup>2)</sup>	24	159.4
桑島(近世) <sup>3)</sup>	10	158.8
上井ヶ浜(弥生) <sup>4)</sup>	18	162.8
広田(弥生) <sup>5)</sup>	10	153.3
津雲(繩文) <sup>6)</sup>	13	159.9

1)内藤(1973), 2)中橋(1987), 3)立志(1970), 4)全開他(1960), 5)中橋・永井(1989),  
6)清野・平井(1928)

この大腿骨最大長から求めた推定身長は、Pearson 法、藤井式共に157.4cmとなり、かなり低身長の男性である。その比較結果を表2に示す。

## 2. 2号人骨（男性・老年）、4号人骨（性不明・老年）

出土状況： 2号人骨は、1号同様、12世紀後半所属の木棺から出土したもので、体軸をほぼ北に向かって仰臥位で葬られていた。右上肢は肘を曲げてその前腕を胸に置き、左上肢は体側に沿って下に伸ばしている。また、膝は緩く曲げて左に倒している。各骨のつながりに乱れは無く、原埋葬位を保った状態と見なされる。なお、頭上部には青磁碗1個と土師皿5枚が副葬され、さらに左上腕外側に沿って鉄刀も見いだされた。また、下肢の右脛から前頭部や右側頭部の骨片（4号）が出土したが、2号人骨との関係は不明である。

表3 上肢骨計測値（男性）

	博多42次 (中世)		吉母 (中世)		天福寺 (近世)		桑島 (近世)		江戸 <sup>1)</sup> (近世)		九州 <sup>2)</sup> (現代)		
	1号	2号	3号	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
<b>上腕骨</b>													
1 最大長	(282)	(295)	—	14	295.8	21	296.9	10	293.6	—	296.8	106	295.3
2 全長	—	—	—	14	291.6	19	293.3	10	293.0	—	292.8	106	290.6
5 中央最大径	—	27	27	20	22.6	22	22.9	14	20.8	—	22.7	106	21.9
6 中央最小径	—	18	23	20	17.6	22	17.7	14	15.9	—	17.7	106	16.9
7 骨体最小周	—	71	78	20	62.5	22	63.8	14	62.4	—	63.5	106	61.8
7a 中央周	—	76	82	20	66.1	22	66.5	14	67.0	—	69.4	106	63.7
6/5 骨体断面示数	—	66.7	85.2	20	78.1	22	77.6	14	76.5	—	78.3	106	79.1
7/1 長厚示数	—	24.1	—	14	21.4	16	21.3	10	21.6	—	21.4	106	20.9
<b>桡骨</b>													
1 最大長	—	—	—	17	228.0	23	228.5	—	—	—	224.2	64	219.9
2 機能長	—	—	—	16	213.6	23	212.2	—	—	—	210.8	64	208.2
3 最小周	—	—	—	20	41.9	23	42.2	—	—	—	41.6	63	40.1
4 骨体横径	—	—	20	20	16.9	23	17.5	—	—	—	16.6	63	16.0
4a 骨体中央横径	—	—	—	20	15.5	23	15.7	—	—	—	15.6	63	15.2
5 骨体矢状径	—	—	14	20	12.1	23	12.6	—	—	—	11.9	63	11.7
5a 骨体中央矢状径	—	—	—	20	11.9	22	12.6	—	—	—	12.0	63	11.9
3/2 長厚示数	—	—	—	16	19.8	21	19.8	—	—	—	19.8	61	20.4
5/4 骨体断面示数	—	—	70	20	71.6	23	72.0	—	—	—	71.8	60	71.4
5a/4a 中央断面示数	—	—	—	20	77.5	22	80.3	—	—	—	77.5	40	77.9
<b>尺骨</b>													
1 最大長	—	—	—	14	247.4	18	244.6	—	—	—	242.1	62	236.2
2 粗窓長	—	—	—	12	217.5	18	214.6	—	—	—	211.2	64	209.2
3 最小周	—	—	—	17	37.5	20	37.5	—	—	—	36.4	65	35.8
11 矢状径	—	—	15	19	12.8	24	13.1	—	—	—	12.8	63	12.8
12 橫径	—	—	18	19	12.8	24	17.0	—	—	—	16.2	64	16.5
3/2 長厚示数	—	—	—	11	17.9	18	17.5	—	—	—	17.2	63	17.0
11/12 骨体断面示数	—	—	83.3	19	73.7	23	77.9	—	—	—	79.0	63	74.9

1)道藤他(1967) 2)清口(1967); 寺城(1957)

性別・年齢： 2号人骨については、寛骨大座骨切痕の狭さ、各四肢骨の太さ、及び頭蓋眉間部の膨隆の強さ等からみて、男性とみなされる。また、歯の咬耗がかなり進み（2~3度）、縫合に愈合も認められるので、既に老年に達した個体とみなされる。4号人骨については、冠状縫合の一部等に愈合が認められるので、老年の可能性が強いが、性別については不明である。

形態所見： 当人骨の頭蓋は底部を下に、ほぼまっすぐ立った状態で見いだされたが、1号同様、やはり土圧によって変形を受けているので、頸蓋については計測値による比較検討は出来なかった。ただ、かなり強度の歯槽性突起が認められ、著しく偏平な鼻根部が確認できた。

四肢骨については、得られた計測値を、比較群と共に表3、4に示した。上腕骨は三角筋根面の発達が良好でかなり太く、またその断面形状に偏平性が認められた。長さは吉母浜中世人等の比較群と大差ない。下肢の大腿骨もまたかなり太く、その中央周は他の中世、近世人の平均を大きく上回っている。長径では、脛骨の長さが目立つ。

大腿骨最大長から求めた身長を表2に示した。Pearson法では159.3cmとなり、中世人としては平均的な身長の男性である。

表4 下肢骨計測値（男性）

	博多42次 (中世)			吉母 (中世)		材木座 (中世)		天福寺 (近世)		江戸 (近世)		九州 <sup>1)</sup> (現代)	
	1号	2号	3号	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
<b>大腿骨</b>													
1 最大長	(405)	(415)	(430)	18	419.1	11	419.9	20	415.2	—	413.8	59	406.5
2 自然位長	—	—	—	15	418.1	10	408.8	18	410.0	—	410.3	59	403.2
6 中央矢状径	—	—	30	19	28.1	69	27.2	17	27.7	—	28.3	59	26.5
7 中央横径	—	—	28	19	27.7	69	26.8	17	26.9	—	27.4	59	25.6
8 中央周	—	92	94	19	87.8	69	85.9	17	85.4	—	87.5	59	82.4
9 骨体上横径	—	—	—	19	32.1	90	31.6	14	30.4	—	30.7	59	29.4
10 骨体上矢状径	—	—	—	19	24.1	90	23.9	14	26.3	—	27.8	59	24.3
8/2 長厚示数	—	—	—	14	21.2	9	20.8	13	20.5	—	21.3	59	20.4
6/7 中央断面示数	—	—	107.1	19	101.3	69	102.5	17	104.1	—	103.9	58	103.8
10/9 上骨体断面示数	—	—	—	19	76.1	90	75.7	14	86.7	—	91.2	58	82.8
<b>脛骨</b>													
1 全長	—	—	—	12	341.9	—	—	13	339.5	—	327.1	61	320.3
1a 最大長	—	(355)	—	11	348.0	—	—	16	340.1	—	331.2	60	326.9
8 中央最大径	—	—	—	20	29.6	—	—	14	29.4	—	28.9	61	27.8
8a 根部孔位最大径	—	—	40	20	33.8	—	—	15	33.7	—	32.9	60	30.6
9 中央横径	—	—	—	20	21.6	—	—	14	21.9	—	21.6	61	21.1
9a 根部孔位横径	—	—	24	20	24.0	—	—	15	24.1	—	23.7	61	23.7
10 骨体周	—	—	—	20	80.8	—	—	14	80.4	—	79.4	62	78.4
10a 根部孔位周	—	—	103	20	90.8	—	—	15	91.3	—	89.3	61	88.9
10b 筋小屈	—	—	77	20	74.5	—	—	15	73.7	—	70.8	60	71.3
9/8 中央断面示数	—	—	—	20	73.0	—	—	14	74.8	—	74.9	61	76.1
9a/Ba 根部孔位断面示数	—	—	60.0	20	71.0	—	—	15	71.9	—	72.2	60	77.5
10b/1 長厚示数	—	—	—	12	22.0	—	—	8	21.3	—	21.7	60	22.4

1) 阿部(1955); 藤井(1966)

### 3. 3号人骨（男性・老年）

出土状況： 体軸をほぼ南東に向かた、俯臥位で見いだされた。下肢はまっすぐ伸ばされているが、右肘は曲げられて、手を胸の下に入れている。各骨はほぼ原位置を保っているとみなされるが、墓擴は不明確で、釘等の木棺に付随する遺物も見いだせなかった。副葬品は無く、俯臥というかなり特異な姿勢から考えても、埋葬されたものかどうか、疑問が残る。あるいは頭位が他の例とは逆になっていることも、こうした状況に関係した結果であろうか。所属時代についても、遺構がはっきりしないこともあって、確定は困難であるが、一応、伴出遺物や遺位関係等、種々の状況から11世紀頃とみなされている。

性別・年齢： 骨盤、頭蓋の形状は観察不能であったが、四肢の著しい太さから考えて男性である可能性が強い。年齢は歯の咬耗が、1、2号人骨よりはやや弱く、老年もしくは成年後半とみなされる。

形態所見： 頭蓋は保存が極めて悪く、観察、計測共に殆ど不可能だった。

四肢骨は上、下肢骨共に頑強な傾向が見られ、表3、4に示したように、その最大長や骨幹諸径はいずれも比較群を大きく上回っている。筋付着部の発達も良好で、下肢の大脛骨、胫骨の骨幹断面には、やや柱状、偏平傾向が認められた。

推定身長も162.1cmでこの時代の男性としては高身長であり、全体的に大柄で筋強な男性であったことが窺える。

### 総 括・考 察

1989年に福岡市鶴見町で実施された発掘調査によって、新たに12—3世紀所属の人骨4体分が出土した。いずれも保存状態が悪く、その形態的特徴を十分には掴み得なかつたが、一応得られた結果を以下に概括しておく。

- 3体いずれも埋葬姿勢が異なり、それぞれ右側臥屈葬、仰臥、俯臥で見いだされた。また、木棺の2体は体軸をほぼ北に向か、青磁碗等の副葬品を伴っていたが、俯臥のもう1体は何も持たず、遺構のはっきりしない塙みの中で逆に南方を向いた形で見いだされた。
- 1号男性ではかなりの高額傾向と、偏平な鼻根部が、2号男性でも偏平な鼻根部と強度の歯槽性突頭が確認された。また、1号ではかなりの長頭傾向が窺えた。
- いずれの四肢骨もかなり頑強な特徴を示し、その骨幹諸径には、比較群の平均値を上回る

ものが多い。特に3号男性は、長さ、太さとも非常に屈強な四肢の持ち主であった。

・推定身長は、1号がやや低く、3号は逆にかなりの高身長であったが、ほぼ他の中世人集団と大差ない身長（3体の平均：159.6cm）の男性である。

以上、今回出土した博多の中世人骨については、残念ながらその詳しい特徴を知り得なかつたが、ただ、注目すべき点として、1号人骨の男性に、かなりの高顎傾向が認められた点をあげておきたい。この点は、先に報告した同じ博多の26次調査出土中世人骨（男女各1体、中橋、1989）の特徴と軌を一にしている。博多40次出土の女性人骨（中橋、1990）のように、低顎の例も存在するので、さらに例数を増やす必要があることは言うまでもないが、今回の結果によつて、一般的には低顎例の多い他の中世人とは異なつて、この高顎性が博多の中世人にかなり共通した特徴である可能性を追認させる結果と言えよう。その他、一部に強度の歯槽性突頸や偏平な鼻根部が確認されたことは、従来より指摘されてきた中世人の特徴に一応合致する点として上げられる。

もう一つ、従来より、博多から出土する中、近世人については、その埋葬姿勢にかなりのばらつきがあることを指摘しておきたい。今回も、3体いずれも異なり、埋葬例ではない可能性のある3号は除外しても、右側臥屈葬と仰臥という風に異なっていた。その中で、今回の1号人骨でも見られた、北頭位、右側臥屈葬という姿勢については、各地でこの姿勢に偏った出土例が報告され、この埋葬風習がかなりの占さと広がりを持っていることが次第に明らかに成りつつある。最近では筑紫野市の原田近世墓や、愛知県市杵嶋神社遺跡中世墓において（いずれも100個体以上を数える）、かなりこの姿勢にこだわった埋葬例が明らかにされている。博多でもこれまでいくつか確認されているが、上記の例のような、一遺跡でこの姿勢に統一された例は検出されていない。これがおそらくは宗教的背景からもたらされ、踏襲されてきた慣習と考えれば、様々な宗教信者が雑居する都市ではそうした埋葬姿勢への偏りが見られない点もある程度納得できるかと思われるが、いずれにしろ我国におけるその詳しい由来と浸透状況についてはまだ不明点が多く、何等かの宗教と関連した一つの興味ある民俗事例として、関連識者による今後の検討が待たれるところである。

（当人骨を研究する機会を与えていただき、いろいろと御教示いただいた福岡市教育委員会の諸先生、諸士に深謝いたします。）

## 文 献

- 阿部英世 (1955) : 「現代九州人手腕骨の人類学的研究」 人類学研究, 2。
- 遠藤萬里・北條暉幸・木村賛(1967) : 「四肢骨」 増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体 (鈴木, 他, 編), 東京大学出版会。
- 鶴鍋勝登 (1955) : 「九州人下腿骨の研究」 人類学研究, 2。
- 金関丈夫・永井昌文・佐野一 (1960) : 「山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡弥生式時代人頭骨について」 人類学研究, 7。
- 清野謙次・平井隆 (1928) : 「津雲貝塚人骨の人類学的研究・上肢骨の研究、下肢骨の研究」 人類学雑誌, 43。
- 溝口静男 (1957) : 「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」 人類学研究, 4。
- 内藤芳篤 (1973) : 「尾嶋一熊本県下益城郡由町尾嶋中世墳墓群の調査」 熊本県文化財調査報告第12集, 熊本県教育委員会。
- 中橋孝博 (1987) : 「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」 人類学雑誌, 95。
- 中橋孝博 (1989) : 「博多遺跡群第26次調査・築港線関係第3次調査出土の中世人骨について」 福岡市埋蔵文化財調査報告書204, 福岡市教育委員会。
- 中橋孝博 (1990) : 「博多遺跡群第40次調査出土の中世人骨について」 福岡市埋蔵文化財調査報告書230, 福岡市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文 (1985) : 「山口県下関市吉母浜遺跡出土の弥生・中世人骨」 吉母浜遺跡, 下関市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文 (1989) : 「弥生人の形質」 弥生文化の研究 1, 雄山閣。
- 立志悟郎 (1970) : 「熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人、上肢骨の人類学的研究、下肢骨の人類学的研究」 熊本医学会雑誌, 40。
- 専頭時義 (1957) : 「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」 人類学研究, 4。
- 鈴木尚 (1956) : 「鎌倉材木座発見の中世人骨」 岩波書店, 東京。

福岡市

博多17

福岡市埋蔵文化財報告書第245集

1991年3月15日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 博巧印刷株式会社

福岡市南区那の川1丁目9の4